
larme ~短編集~

池本いつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

larme（短編集）

【Zコード】

Z5328L

【作者名】

池本いつき

【あらすじ】

短編集です。短編で投稿すると数が増えたとき見にくいかなあとおもつたので、連載のほうで投稿しました。甘かつたり、切なかつたり、痛かつたりすることもあるので、注意書きにお気をつけください。

恋の始まりだつたり、好きだと再確認してみたりします。ぜひどうぞ。ブログに載つてたものだつたり、拍手採録だつたりします。

せつめい（説明）

読むに当たっての説明書のような感じで見ていただければ。

短編を詰め込んだページです。甘かつたり、痛かつたり、切なかつたりするかもしれません。惚け話だつたりすることもあります。また拍手の採録だつたりするのもあります。

前書きに注意を書くので、読んでくださいれば多分、避難することは出来ると思います。（死ネタその他モロモロハ絶対に書くようにしたいと思います！！）が注意書きが必要だという作品を見つけましたら、ぜひ一報を（

続き物もありますが、その場合は明記します。大体、2～3話くらいです。続くとしても、それ以上続くのであれば、連載として載せる予定です。（もしくは、章分けをするはずです）

今まで連載してあるものの短編はそつちのページに載せるので、ここにあるのは連載ものにしない予定のものばかり。
気に入っていたければいいのですが。

ちなみに『larme』はフランス語で『涙』や料理などでは『少し』という意味があるそうです。（女性名詞だそうですね）カタカナ表記にすると、多分ラルムです。

この場合は少しの、とか欠片の、みたいな意味で使っております。フランス語が堪能なわけではない（むしろそれがフランス語ということさえ分からぬ）無知な人間ですので、感覚的に使っています。ただ響きが綺麗だったので。ただし、『-』がつくと『- a r m e』（＝兵器）になり、とんでもないことに。

ここでは涙のように零れた欠片たちを並べていけたらと思います。お話を零たちが、読者様方に届くことを祈つて。

追記

割り込み投稿できるということを先日知り（遅い）ましたので、もしかしたら、割り込み投稿するかもしません。ので、とやびき日付なんかを確認していただけすると、嬉しいかなあ……とか。

偉そうですよね、ごめんなさい。上手く伝わる方法をあまり知らないので。

活動報告には書くよひこしますので、そちらもぜひよひこしくお願いいたします。

バイト（前書き）

本屋でバイトの男の子と、そのお姉さん。
甘いのかといわれれば、甘くないだけど、恋の始まり的なもの
を一つ。短め。

バイト

一ヶ月に一回。それは月初めにやつてくる。だから俺は、いつもその周辺は休みを取らない。

だつて、一ヶ月に一回の楽しみだから。

月初め……それは一日だつたり、三日だつたりするけれど。彼女はやつてくる。近くの……俺の通つている高校よりも少しだけ駅よりの高校の制服を着た彼女。

セミロング……と言つと最近知つた長女の髪をさらせりと流したまま、他のところでは田もくれず、レジ前の新刊コーナーへとやつてくる。

少しだけ眉を寄せて、表紙を手で追つ。探し物がどこにも見つからないのだろう、人差し指で表紙の表面をなぞるよつて一つずつ確認していく。

その仕草が面白くて、毎回、『もう少し左にありますよ』とか、『上ですよ』とか言つてしまいたくなる。

「あ……」

彼女が小さく声を上げる。それも毎度のこと。毎度のことだけど、何故か俺の方まで嬉しくなる。そんな笑顔を、彼女は手元での本が見つかった時に浮かべる。

そしてとても大事そうに、その本を手に取るのだ。

多分、その笑顔にやられたんだろうな、と冷静な方の自分は思う。その時ばかりは、本になりたいとか、普通の時では思いもしないことを思つてしまつ。

そして彼女はその笑顔のまま、ひやりとやつて来る。レジは一

人いるが、もう一人の人はにやりと笑つて呟つのだ。

『あんたがして来なさいよ。そして今度こそ話しかけるのよーー。』三十をいくつか過ぎたおばさんは、母親というよりも年の離れた姉のような存在だ。そんなおばさんにて、俺の心は見透かされている。

「すみません」

このセリフも毎度のこと。だから振り向いて笑顔で『ハイ』と返事をするのだ。多分、本のことしか頭にない彼女は知らないと思つけど。

「カバーをおかけしましようか？」

「あ、お願いします」

本当は、毎回聞いてるから聞かなくても分かつてゐるんだけど。だけど、少しでも彼女の声が聞きたくて。

少しだけ、勇気を出してみよつか。どうせバイトとお客さんの間柄なのだし。おばさんだって、よくお客様など話してゐる。

「お買い上げありがとうございました」

何を話そう。どうしたら、振り向いてくれるだろう。この本を手渡してしまえば、もう一ヶ月会えないのに、中々言葉は出てきてくれない。

何か、何か言わなくちゃいけないのに。

そう思いながら、彼女に本を手渡した。そして声をかけようとして口を開いたその時。今度は彼女がしつかりとこちらを見た。

あれ、おかしいな。いつも本しか見ないのに……。

「あ、あの。いつも、レジをしてくれる人ですよね?」

少しだけ顔を上気させて、彼女がこちらを見る。頷く」としか、できなかつた。

「あの。いつもあなたがレジをやつてくれるから……。いつも、笑顔で返事してくれるから……その

言いよどんで、俯いて。受け取つたばかりの本をきゅうと握り締めたのが分かつた。紙袋が妙に歪んだ。

「お、お礼が言いたくて。あの。ありがとうございます」

多分それが、始まりだ。彼女の瞳に映った自分は……。初めて見るぐらい、真っ赤だった。

どうやって返そつか。どうやって、返事すれば……。

おばさんがこちらを見て、にやけてるなんて知らずに、俺は口を開く。そこから出てくる言葉は、俺にだつて何なのかは分からない。分からぬけど、それが。

始まりの図。

バイト（後書き）

私の短編なんてこんなものですが、よろしければお付き合いください。

優しい物語（前書き）

悲恋っぽい感じの恋愛モノ。悲恋なのかと言われば、明言できないんですが、多分悲恋です。死ネタと言われば、死ネタ、かな。恋愛色薄めです。魔女とか出てくるので、そういうのが苦手な方もお気をつけください。

スッと薫る木の香り。誰も……何もいのではないかと思つほど
どの静けさ。時折、忘れたように風が吹き、その時だけ木々が生命
を取り戻したように揺れた。しかしそれ以外は、何も起こらない。

その中に魔女が住む屋敷がある。一匹の猫を抱き、ゆらゆらと前
後に揺れる安楽椅子に座った魔女。安楽椅子に座るには、若すぎる
ように見える女は日の光が当たると、嬉しそうに目を細めた。

透けるような白い肌を持ち、その皮膚にはシワ一つ、シミ一つな
い。彫刻等のように白い肌とは対照的に、髪は闇より深い黒だった。
全てを見通す瞳はよどむことなく、かといって美しく澄んでいる
わけでもなかつた。

美しい、少女とも妙齢の女とも取れる女の顔は神秘的な雰囲気を
内包していた。ゆうるりと細められた瞳は、魔女にはありがちな冷
たさを奥に潜めていた。

「マーシュ」

小さな声で、猫を呼ぶ。“マーシュ”と呼ばれた猫はあぐびでそ
れに答えた。「冷たい仔ね」とたしなめる言葉も聞こえていないよ
うに振舞う。

「もうすぐ、ね」

その言葉が意味することを分かつていいのか、いないのか。マー
シュは小さく身じろぎした。その時、トントンとドアがノックされ
る。

魔女はゆっくりした動作で椅子から立ち上がつた。まるでそれを
予想していたかのように……。淡い紫のドレスがひらり、ひらりと
美しく翻る。

魔女はその美しくも冷たい顔を綻ばせ、ドアを開けた。

「あ……」

まさか人が出てくるとは思つていなかつたのか、ノックした本人は驚いたような顔で魔女を見つめる。

ノックしたのは一五歳ほどの少女だった。長く、亜麻色の髪は一つの大きなみつあみにしていて、服も魔女とは違う簡素で動きやすいようなドレスだ。

「あの、あたし、森で迷っちゃつて……。雨も降ってきたから、それで」

おどおどと自分の置かれている状況を説明する。その話を本当に聞いているのか、魔女はドアを大きく開けた。

「お入りなさい。温かいお茶を入れましょう」

魔女は目を一層細め、優しく微笑んだ。

そして、自分が先程座っていた安楽椅子の隣にあるソファーを指示示す。少女は遠慮がちにそれへ腰掛けると、魔女が出した紅茶のカップを手に取つた。

ふわりと薫る、甘い香り。そして、紅茶の名の通りの深い緋色をもつ液体を見つめた。その美しい色合いに誘われて少女はカップを口に付ける。

「おいしい」

呴くような感想を言つと、魔女はニッコリと笑う。マーシュはふあと口を開けた。

「どうしてこんなところへ来たのです？」

さらさらと川のせせらぎにも似ている言葉の羅列。優しい響きの中にどこか混じる、寂し気な色合い。その声に少女はほっと息をついた。

「あ、あたし、ルーナって言います。綺麗な花を探してたら、いきなり雨が降ってきて。どこか休むところはないか探していたら、いつの間にかこの家があつたから」

ゆっくりとしたその声は、カップから立ち上る湯気と共に空気へ溶けた。

魔女はその言葉を聞き、小さく目を見開いた。ルーナが来て、初

めてその穏やかかつ冷たい表情を変えたのだ。

驚いたような表情を出し、まじまじとルーナを見つめる。そして何かが分かったように口を動かして、何事か囁いた。しかしそれもすぐに元の表情に戻る。

それから優しく頷いた。魔女は横目で窓を見やり、それからルーナに向き直る。

「ならば雨が止むまでここにで休めばいいでしょう。その間、独り暮らしで寂しいわたしの話しが相手になつてください?..」

首を傾げると黒髪がふわりと揺れる。

サラリと髪が落ちる様子にルーナは見惚れた。いつの間にかマーシュは魔女の膝を離れ、ルーナの足に頭を擱り寄せている。グルグルと喉を鳴らし、ルーナの関心を引こうとした。

それを見た魔女は、納得したように頷く。先程の笑顔より嬉しそうに、喜色を滲ませた。

「マーシュ」

魔女が静かに猫の名を呼ぶ。

すると、マーシュは大人しくルーナから離れ、魔女の膝に飛び乗つた。黒のように見える毛色は深い紺色で艶のある毛並みだった。そして、黄金の鋭い瞳と澄んだ碧眼を持っていた。どこかしら神秘的な雰囲気を持つマーシュの表情は魔女に似ていた。

魔女は触り心地のよさそうな毛を撫で付けると、ルーナの薄く透明感のある黒い瞳を見つめた。魔女にはない、強い光を持つ瞳を魔女はじつと見つめる。

「昔話を、しましょ?」

声が深みを帯び、さらに心地よくなる。美しい響きの言葉たちはまるで、詩のように魔女の口から紡がれた。それはまるで、美しくも切れやすい 傷い糸のよう。

魔女はマーシュを膝に乗せたまま、規則的に毛を撫でる手もそのまま話し始めた。物語とも、史実ともこれるそのお話は、ゆっくりと始まった。

この国にね、数十年も昔の話だけれど、一人の魔女がいたの。誰にも認められる程の力を持ちながら、その魔女は愚かだった。

その魔女はね。

恋をしたのよ。この国の王子に、恋をした。愚かでしよう？ 身分違いも甚だしい。まして、魔女には恋なんて、愛なんて必要ないのに。

その願いは叶わないと知りながらも、その心は報われないと知りながらも、その思いは許されないと知りながらも、その魔女は恋をした。

優しくも、絶対に魔女には振り向かない王子に。

その王子も、身分違いの恋をしていた。侍女に、恋をしてしまったの。そして、その侍女も王子を好いていた。

当然のように二人の関係は誰も知らなかつた。王子に相談を受けた、魔女以外はね。

彼女は王子と、その侍女の為に色々なことをしたわ。逢瀬を邪魔されないように結界を張り、二人の真実を知つてしまつた者たちの記憶を消した。

報われないと知りつつ、それでも王子のために何かしたいというその一心で……。

そしてある時、王子たちは城から出る決心をしたの。

このままでは幸せになれないと、二人は悟つたから。でも魔女は戸惑つたわ。今までなら王子の傍に入れたのに、と。

でも城から出て行かれたら、もう一生会えないのは目に見えてい

たから。

それにね、彼女は国に雇われていたの。王子個人ではなく、国にね。だから、国に不利益なことはできない。

国に不利益なことをする、それはそのまま国に雇われた魔女の禁忌だから。

破ることを許されない、破つたが最期自分の身さえ滅ぼしかねない、契約だから。

そこまで話して、魔女はふうと大きく息をついた。どこか疲れたよつた表情でルーナを見つめる。

何か言おうと口を開き、しかしその口から言葉が出ることなく、また閉じられた。眉を少しだけ下げ、それでも笑って見せた。

「その魔女は結局、どうしたんですか……？」

先が気になつて、ルーナは口を開いた。想像がつかなかつた。どうなつても、物語としては納得できるから。

どんな決断をしても、後悔することが分かりきつてゐるのに、彼女は一体どちらをとつた？

思い人の恋を手伝つてゐるところからもう間違いなのだ、そう思つたが、彼女にはどうすることもできなかつたんだろう。

思いを告げることも、思いを殺すことも、どちらもできずただ、ただ迷つて悩んでいるだけだった。それは何て、悲しいことなんだろ。

恋をした時点では、間違いだつたなんて、それは何て苦しいことなんだろう。

王子の幸せをとり、自らの心を殺して禁忌を破るか、そして

もう一度と会えなくなるか。

国への忠誠を取り、王子を裏切つて一生城へ閉じ込めるか
そしてもう一度と顔を合わせなくなるか。

ルーナの問いに、魔女は再び笑顔を浮かべた。淡く、儂い……、
触れれば消えてしまいそうな雪のような笑み。

「あなたなら、どうします?」

もし、あなたがその魔女なら、どちらを選びますか?

魔女の問いに、ルーナは目を伏せた。何かを掴もうとするよう目に彷徨わせる。長い間、そうしていた。

魔女はそれを咎めることもせず、ただルーナを見ている。柔らかな眼差しの中に、観察する色を映し出した。

いく時そうしていただろう、やがてルーナは静かに魔女へ向き直った。その瞳は揺れていって、いまだに自分の答えへ自信が持てないようだった。

「もし、もしもあたしがその魔女なら……」

そこまで言って、ルーナは言葉を止める。

いつの間にか、カップから立ち上る香り豊かな湯気は消えていた。
そのカップの中身に映る自分を見つめ、ルーナはよきゅっと手を握り締めた。

そしてゆつくりと口を開く。

「あたしなら。王子を城から出さうなんて思わない、思えないよ。
いくら王子の幸せを願つても、やっぱりあたしは傍にいたい。
たとえ、王子が一生あたしに振り向かないとしても、城に閉じ込められてあたしを憎んでも。王子だけその侍女と幸せに暮らすなんて、
許せない！」

何かをこりひえるようにルーナは言った。それを聞くと、魔女はまたマーシュを撫で始める。そして、物語の続きを語るために口を開

いた。

彼女は悩んだわ。

昼も夜も関係なく、そのことで一杯だった。でも、答えなんて出なかつた。どちらも嫌だつたから。どちらかをとれば、どちらかを捨てなければいけないんだもの。

考えれば考えるほど、悩めば悩むほど、そのことしか頭に浮かばなかつた。

でもね、ある日王子は彼女を呼び寄せていつたの。「手伝わなくていい」って。王子にも分かつていたの、その魔女のこと。

『心優しく、真っ直ぐな魔女』

そう呼んでいたぐらいだから。

彼女がどんなに悩んでいるか。国と自分との間で、どんなに苦しんでいるか。それが分かるのに、どうして魔女の思いに気が付かなかつたのかしらね。

彼女は友である自分が、國かで迷つてゐる。

友人を裏切るような人間ではない。

だけど、忠誠を誓う國に背くような人間でもない。

それが痛いほど分かつたから、そう言つたのね、きっと。

だけど、皮肉なことにその言葉が引き金になつた。彼女の迷つていた心を決める、決定打になつてしまつたの。王子が自分のことを考へてくれている。その事実が魔女には嬉しかつた。

ほんの少しでもいい、彼の心に自分がいることが嬉しかつた。

魔女は王子と侍女の身代わりを作り、一週間國を騙した。

王が小さな王子の変化に気が付いたのがきっかけだつたけれど、それがなかつたら、もつと時間が稼げていただろうと王の側近は言った。

そして魔女はその日の内に、捕まつた。

彼女は絶対に口を割らなかつた。ただ、黙つて俯き涙を流すだけだつた。王に許しを請つことも、自分の過ちを嘆くこともしなかつた。

魔女は泣いてはいけないといつ決まりなのに、彼女は人目をはばからなかつた。

怒り狂つた王は彼女を殺そうとしたけれど、それでも呪いが怖くて殺せなかつた。

「だから、彼女は國を追われ、長い旅に出た。そして最後に深い森にたどり着き、そこへ屋敷を建て、そこに命をかけて魔術をかけた。
ずっと、ずっと先、もしもその王子の孫たち、子孫たちがその近くを通つたら、その屋敷に入るようにな。そして、殺してしまつようにな……」

そう言つて、魔女は話を締めくくつた。

そしてルーナを見て笑い、「つまらない話を聞いてくれてありがとう」と弦くように言つ。ルーナは黙つて首を振り、それから口を開いた。

一つの予想と、疑問を抱きながらそれを魔女にぶつけた。

「あなたの、名前は？」

「ルウイーヌ。ルウイーヌ・レストリス」

囁くように言い、マーシュの頭を撫でた。

「そして、愚かな魔女の名もまた、ルウイーヌ。愚かな魔女というのはわたしのこと。そして、ルーナ。あなたは……、あの人の孫、

ね

小さく、本当に小さく魔女の ルウェイースの顔が歪んだ。泣き出す寸前のような顔で、ルーナを見つめる。

「あたしを、殺すの？」

ルーナが問う。その問いに、ルウェイースは首を振った。

「本当はね、本当はそうだと思った瞬間殺そうと思ったの。でもね、あなたがわたしと同じように考えててくれたから。

『王子だけ幸せに暮らすなんて許せない』

……わたしも、そう思つたから。いくらあの人を愛していても、そういう思う気持ちを止められなかつたから。そして、そう思う自分が醜くてしかたがなかつたから。

だから、嬉しくて殺そなんて思えなくて」

嬉しそうに少しだけ微笑んだルウェイースは、マーシュの耳元に唇を近づけ何事か小さく言つた。マーシュはその言葉に『ミヤウ』と鳴いて答える。

そして、ルーナをじつと見やつた。

「ルーナ、来てくれてありがとう。あの人の幸せの証が見れて、本当に良かつた。もう、あの人のお孫には会えないかもしれないと思つてた」

その声はとても小さくて、聞こえにくい。泣いているわけでもなく、俯いているわけでもないのに、とても小さかつた。まるで死にかけている人間のような。

そこまで考えて、ルーナはハツとした。自らの考えの不吉さに身を振るわせる。それでも。

「ルウェイースさん?!」

ルウェイースの体が透けて見え、ルーナは慌てた。

今考えていたことが目の前で再現され、自分の考えを打ち消そうとする。その様子にクスリと笑い、ルウイースはルーナの瞳をじっと見つめた。

「目的を果たしてしまったからなのね。それが、もうわたしの魔力の期限か……。」

でも、やっと逝けるのね。実は後悔していたの。自らの魂を、あの人の子孫が来るまで縛り付けたことに……」

歌うように言い、ルーナに手を差し伸べその頬に触れた。しかし、ルーナがその感触を感じることはなかった。

姿が光の粒子へと変わり始め、上へ上へと昇っていく。ルーナは手を伸ばし、ルウイースに触れようとして その手はルウイースをすり抜けた。

掴んだと思った光の粒子は手に残ることもない。

金の光に囲まれて、だんだんとぼやけていくルウイースは何故かとても幸せそうに見えて、ルーナは涙を流した。

「泣いてはダメよ、ルーナ。わたしは、嬉しいのだから。笑つて?」

「無理。そんなこと、無理」

涙が流れ、それを止めようとも思わずルーナは呟いた。それと共に、言いようのない感情が心を支配していく。じわじわと侵食するように。

「何故?! 何故あなたはそんなに……寂しそうな顔をして笑うの? それでも、幸せそうに見えるのは何で? ! あたしを、殺したかったのでしょうか? それだけが目的で、ここにいたのでしょうか? それなのに何故、目的を果たさないままで逝つてしまおうと思つの? !」

涙でルウイースがぼやけているのか、もう消える時が近いからなのか、それさえも分からなかつた。

ルーナの問いに、ルウイースは答える。心地良くも小さく、すぐに空気へと消えてしまう声で。その声さえ、もつ遠くから聞こえてくるようにあやふやだった。

「何故つて、幸せなんですもの。わたしでは、あの人を幸せにできないことはよく分かつていたから。

いくら力が強くても、優秀でも、所詮は人とは違う者。国はわたし魔術者を使いながら、それでも軽蔑の目を向けていた。異形の者を娶つて、幸せになれるわけがないでしょ? ならば、離れていてもあの人人が笑つてくれる方がいいつて、そう思つてしまつたんですもの。

近くにいたいと、いて欲しいと思いつつ、二人だけが幸せになることを許せないと言いつつ、それでもやっぱり幸せになつて欲しかつた

どこか夢心地で、ルウイーヌは続けた。

「本当にそう思つたの。わたしが幸せになれなくとも、異形の者に『大切な人だ』って言ってくれたあの人の幸せを守りたかった。だから、あの人人が幸せだったという証 あなたに会えて、嬉しかつた。復讐なんて忘れてしまふぐらい」

その言葉を聞き、ルーナは目を見開いて息を呑んだ。

そして何かを思い出すように眉を寄せた。一瞬後に、もう一度目を見開き、ルウイーヌに向き直る。

「一つだけ、あなたに言いたいことがあるのー!」

大声で泣き出したい衝動をこらえるような、それを押さえつけるような声。

「おじいちゃん、一年前に亡くなつたんだけど。その時にね、あたしに言ったの。

『僕は本当に好きな人、一人さえ幸せにはできなかつた愚か者だ』つて。

『彼女から離れることでしか、彼女の幸せを守れなかつた。いや、結局は離れてもやはり彼女の運命を狂わせてしまつたのだけど。でも、あの時は彼女より、ルーナのおばあちゃんの方が好きだと思つて。

つてた。だから、彼女の気持ちを知りつつ、知らないふりをした。
だけど、離れてみて初めて、自分が彼女を愛していたことに気が付いたよ』って。

あたし、今の今まで何のことか分からなかつたけれど、今なら分かる気がする！－！きっと、おじいちゃんはきっと、あなたが、あなたのこと�이－！」

そこまで言つて、ルーナは口を閉じた。

ルウイースが人差し指をルーナの口元に運び、話せないようにしてしまつたから。そしてゆるく首を振り、ルーナの言葉を遮つた。
「あの人はきちんと、侍女の娘を愛してたわ。でも、わたしの気持ちにも気付いていたのね。うまく隠した、つもりだつたのに」幼い子どものように、屈託なく笑つた。

「わたしからも、言いたいことがあるわ」

穏やかな、穏やか過ぎるその声は　全てを悟つた、死期が近付いた人の声。

何もかも受け入れるようなその笑みに、もう初めて会つた時のような冷たさはなかつた。ただ温かくて、安らぐ笑み。

「あの人ね。わたしのことを小さい頃、『ルーナ』って呼んでたの。あなたの名前を聞いた時、まさかとは思つたけれど……。忘れないでいたことがすごく嬉しかつたわ」

そう言つて、ルーナの頬に触れる。もう触られているという感触さえ、相手に与えられないのね。そう言つてルウイースは笑つた。

「さようなら、ルーナ。あなたに会えてよかつた。本当に……。やつと、あの人に会える」

見つけてくれるかしら？　その声はもう聞こえなかつた。

「さよなら。優しい、魔女さん」

どうして、二人は離れてしまつたのだろう。どうして二人はお互の気持ちに気が付かなかつたのだろう。

彼女は彼の気持ちに。
彼は自分自身の気持ちに。

気が付いたら、何か変わっていたのだろうか。
結ばれる、運命には絶対になれなかつたのだろうか。 そんなに魔術を使う者は忌み嫌われていたのだろうか。

「知りたいよ。 知りたくて、 たまらない」

どうして二人は

「こんなに悲しいの？」

涙が再びあふれ出るのは、二人の胸の内が少しだけ分かつてしまつたから。 そしてルーナはあるものに気が付く。

ルワイーヌが座つていた安楽椅子に何か置いてあるのを。

「これ、ロケット？」

そう言つて開けてみる。 ちょっとした、期待を込めて。 そこから現れたのは金髪の穏やかな目を持つ青年と、その青年に寄り添つて笑う黒髪の少女だつた。

その笑みに、冷たさは一欠片もない。 穏やかな、優しい光が満ちているだけだつた。 少女の肩に回された青年の腕は優し氣だ。

『何かを媒体にしないと、魂を縛り付けられなかつたの』

唐突にそんな声が聞こえてきて、 ルーナは辺りを見回したが、 声の正体は掴めなかつた。 いつの間にか傍にいるマーシュを抱き上げ、 ルーナは呟いた。

「こんなに、 思いあつてることが分かるのに」

「こんなに、 互いを大切に思つていたのに……。 どうして、 すれ違つてしまつの？」

それは多分、二人があまりにも愚かで、そして……優しかつたか

ら。

これはある国の愚かで優しい一人の物語。

優しい物語（後書き）

一年以上前の作品！！ ヒー、文体違うーー。拙を万点（もちろん

今でも）ですが、ちょっと懐かしくてびっくり。

二年前でも、今でもこういう雰囲気が好きなのは変わらないらしい。

成長ないなあ。

金木犀（前書き）

季節外れですみません。書いた当時は金木犀の盛りでした。学校
帰りにふわりと香った金木犀があまりにも甘くて、淡いめまいを覚
えました。

『囚われる』感覚に思いついた短編。

主従です。甘くないです。何かあやふやです。……痛くもないけ
ど、甘くもない。平安時代くらいをイメージ。

甘い香りに惑わされて、手を伸ばす。
掴めないのに、掴もうと手を伸ばす。
どうしても、欲しいと、手を伸ばす。

甘い甘い香りを開じ込めようと、ゆっくりと、でもすばやく
……手を伸ばす。

「いい香りじゃの？。わつは思わぬか？」

「ええ」

長い髪を流したまま、少女はゆっくりと微笑んだ。白粉を塗つて
いないのに真っ白な顔、薄桃色の小ぶりな唇。

全てが小作りな顔なのに、瞳だけが輝いていた。

同意した青年を少女はちらりと見て眉をひそめ、着物の裾を翻す。
紅葉の柄が刺繡された裾がふわりと広がった。

「興が冷めた。中にいる」

艶やかな唇から出たとは思えぬくらい冷たい声を青年に発し、部屋に入る。

そして御簾を跳ね上げ脇息に寄りかかった。少々乱暴な動作にも
かかわらず、どこか洗練されていた。

青年は部屋へは入らずに、簞子のといいで止まり、跪く。

「入つてこぬか？」

遠くて少し聞き取りにくい声に、青年は応えた。

「もう姫様は十五におなりです。本来ならば……」

「本来ならば御簾の外にも出ず、人と会うときも仕切りを設け、声

も聞かせず、日の光に当たつたこともなによつた姫君として過る」それが
なければならぬ……じゃらつ。

そしてそちはそれを馬鹿正直に守つていゐる

にやり、と先ほどとは違つよつて微笑んでみせる。一ひらの方が
少女を生き生きと見せていた。

しかしすぐさまその笑みも消し、脇息から身を起こした。

「分かつておられるなら……」

「分かつておるから、じゃ

青年の一一度田の発言も遮り、少女は廂に出て格子に寄りかかるよ
うにして、簾子の青年に近づく。

「わらわはこれから嫁ぐ姉上のように入内はせん。父上も血のつな
がらぬ母上も無理強いはせんじゃらつ。わらわは妾腹の娘。
どこか適当に嫁がされるじゃらつて」

[#]政の駒として、な。

御簾を隔てて、少女は笑う。

「今わらわがいなくなろうと、父上たちは探さつともしないのじゃ
ろくな……。いや、大事な道具がなくなつたと騒ぎ立てるか、……？」

「姫様。姫様はきちんと大事にされています。そのような……」

「そのようなことを言うのはお前だけじゃよ」

お前も、今思えば不運じやのう。

少女が笑つた。御簾越しのせいか青年にはよく見えなかつたが、
眉を下げるよりも見える。

「我が家に代々仕える家の出でありながら、わらわのよつた娘に仕
えねばならぬとは

父上が姉上に仕えるのではなく、わらわに仕えよとおっしゃつた
とき、わらわは姉上が気がかりだつた。

少女が御簾に手を滑らす。御簾が揺れた。

「姉上がそちを好いておつたことくらい、とに知つておつた。そ
ちは知らぬと言い張るか？ 気がつかなかつたと？」

「姫……」

「安心せ。父上などに言ひたりせん」

ぱさり、といきなり立ち上がり、少女は中へと入つて行く。青年は少しだけ腰を浮かし、それから何か思い出したように再び座つた。

「私は、女御様とおりになるようなお方とお話しするようなことはありませんでした。恐れ多い」

きちんととした格好をすれば、どこかの公達に見えるような秀麗な顔立ちが小さく歪む。

「そちはあの金木犀と同じじや」

何の突拍子もなく、少女は言つた。黒い髪が流れる後姿が、御簾の間から見え隠れする。

「姉上の気持ちを知りつつ、それでも決して姉上の声に振り向かなかつた。わらわに仕えていると言い、決して姉上の呼びかけに立ち止まろうとしなかつた」

どんなに姉上が、お前を好きだつたか、わらわは知つてある。

「不快なくらい甘い香りが、そちと一緒にじや。姉上はそれに酔つた。醒めることの難しいくらい深く、な。

そこまでさせる、甘い香りが、わらわは嫌いじや」「

酔つてしまつた姉上を知つてしまつたからの。

「のう。守役……。金木犀が酔つ甘い香りはないのか?」

すつと後ろを振り向いた少女は今度こそ泣いていた。

「もあるなら……。酔わぬうちに身に焼き付けたい」

ほろりと涙を流しながら、少女は笑う。

「わらわは酔わぬ。絶対に酔わぬ」

きゅっと唇を結んだのは青年の目にもはっきりと映つた。

「わらわは……酔わぬよ」

御簾を上げ、少女は再び出でてきた。注意しよつとした青年の唇に少女が手を置く。

「分かつておる。これが最後じや。御簾から外へ出て花々を眺めるのも、その前に何もせず顔を見せるのも」

だから、一枝だけ金木犀を取つてくれぬか?

深くは酔わない。少しだけ、まじろむだけだ。
その甘さに。その美しさに。その優しさに。

もうその甘い香りを掴もうとも思わぬ。溺れといひはない。

そう言い訳して少女は一枝の金木犀を腕に抱いた。その甘い香りを楽しみつつ、青年を見て笑った。

「本当は……それほど嫌いではない。この甘い香りも、そもそも少女は一瞬だけ青年の頬に手を伸ばしかけ、首を振った。左手で右手を包み、金木犀の小さな花を撫でる。
そして御簾の中に入る。

「最後の命令、じや。聞いてくれるかの？」

「なんなりと」

しばらく黙っていた青年が応えた。それを聞き、少女は分からぬ程度に目を細める。

「今姉上は、一ヶ月後のことと思い、外を見ているじやうつ。その姉上に……」の金木犀を届けて欲しいのじや

御簾から金木犀だけが差し出され、青年はそれを受け取った。

「それから、あと一ヶ月、姉上に仕えよ」

「姫様」

「命令じや。聞けぬか？」

納得しないと言つ返事に、少女は冷たい声で返した。

「酔つたまま入内させるのも、酔いを醒ますのも、そちの勝手じや。わらわは口出せん」

それでもう話は終わつたとでもこつよつて、青年に背を向ける。

「姫様」

「まだ何があるのか」

振り向きもせず、少女は応える。手の届くところへ積み立てられ

た書物の山から一冊を抜き出し、ぱらぱらとめくつていぐ。

その視線が一つも動いていないことを、背を向けられた青年は知らなかつた。

「私は、姫様に仕えさせていただいて、本当に幸せです」

ですから

「一ヶ月後には、また戻ってきます」

その青年の言葉に、少女の手が止まつた。そして書物の頁を捲るのをやめ、傍らに置く。

「勝手にしろ。口出しさせんと言つた」

そういう少女が笑顔だったといつとも、背を向けられた青年知らなかつた。

結局、溺れてしまつ。

だけどせめて、その間際まで足搔こいつか。

その甘い香りに酔わされたなんて、もうとっくに酔わされているなんて、言えないから。

金木犀（後書き）

続きが書きたいけど、痛くなるから怖いんですね。

長い夏（前書き）

甲子園が大好きです。あの男の子たちのきらきらした視線を見ると、何だか堪らなくなります。

一つのボールへ向ける視線はひどく熱く、私たちの心を掴んで放しません。……という話を書きたかったんですけど、野球をしたことがないので書けませんでした。
と、いつことで、エセ野球小説。

長い夏

学校へ帰るバスの中は、ひどく騒がしかつた。
「優勝候補の高校だつたから」

とか、

「一点差でよかつた」

とか皆言つてゐるけど、本当は悔しくて仕方がないことなどが分かつた。私だつて、悔しいから。

私はその笑い話にのることなく、のることができず、一人窓の外を見るふりをした。今そんな話をしてもしまつたら、知らず泣いてしまふのが目に見えていたから。

バシンという鋭い、グローブとボールがぶつかる音と、カキンという、バットがボールを飛ばす音が全てだつた。その中に混じる選手たちの声が、全てだつた。

「勝ちたかつた なあ」

情けない声が自分のものだと認識するのに時間がかかり、はつとした。しつかり者と評判のマネージャーがこんなんじゃダメじゃない！ と自分に言い聞かせる。

そして窓の外を見ると、学校まで後少しうつことが分かつた。よしそと両手を握り締め、気合を入れる。ぐつと目に力を込めた。まだ泣けない。家に帰るまで泣くことなんて忘れよう。

一番辛いのは、最後の試合が負け試合になつた先輩たちなんだから。いや、どんな学校だつて、優勝校以外はそうなんだから。

先輩たちは、自分たちが泣くと私たちも泣いてしまうことを知つてゐるから泣かないのだ。だから、わざと明るく振舞つている。それが分かりすぎるくらい分かつてゐるから、私が泣くなんてことできない。

「ハイ。もつすぐ学校ですかね。忘れ物、しないでくださいよー！」

パンパンと手をたたきながら言えれば、涙の気配なんて遠のいていくのが分かった。それでいい。『おー』といつ威勢のいい声にさらりに押され、バスを降りる。

監督の『解散』の一言で皆は校門へと歩き出し、『疲れた』と言い合っていた。あ、負けたんだな。明日からもう、先輩たちは受験生なんだな、と実感した。瞬間、胸の奥が熱くなつた。

「スクアブック片付けてきます」

と宣言し、部室へと走る。

部室の裏に回りこむと、涙が溢れた。その涙がとても熱くて、自分を包む空氣より熱くて、泣いているという感覚が伝わつた。自覚するとまた涙が出た。

これに勝てば、ベストエイトだつた。甲子園には遠かつた。マネージャーでしかない私が、どういひできる問題ではないにしが、どうにかしたかった。

一点差だつた。本当に一点差。ツーアウト一塁だつた。そして…ツースライクツーボール。あと一球だつたのに。あのボールさえ、ミットに入つていれば勝てたのに。

私はあの時、勝ちを確信していたのに。下駄を履くまで分からぬ、そんな野球の醍醐味ともいえる『サヨナラ逆転勝ち』なんて考えもしていなかつた。

考えられるわけがなかつた。

カキンという清々しい音とともに、白い紙のよつたなボールは空へと飛んだ。

高く、高く。

遠く、遠く。

一瞬ファールに見えたそれは、見事に観客席へと入った ホームラン。

湧き上がる歓声と、落胆の声。私は声も出ず、それを見ていた。

「…………」
声が出ないよう口を閉じる。それなのに、もれ出る嗚咽を止めることができなかつた。涙が出ないようにふと目を開じる。それなのに溢れる涙を止めることができなかつた。

幾度も幾度も涙を拭う。目が腫れるとと思うのに、腫れてしまったら明日の打ち上げに行けなくなるのに、そう思つのに……。思つのに……。

「止つ……知らない、よ」

その声に答える声はないはずだつた。

「泣き止んだか？ マネージャー」

ヒョコリと顔を出したのは未来の……いや明日からのHースだ。今日が先輩たちの引退試合になつたから。私は涙を見られたとう恥ずかしさと、いきなり顔を出した彼への驚きで固まつた。涙腺も、固まつた。

「な、何でいるの？」

苦し紛れにそう問うと、彼は少し固そうな髪を搔き揚げた。うちの野球部は、髪型にこだわらないので自由だ。

「あー、先輩たちになぐさめろつて命令された」

気まずそうに視線をすらす。そして左肩に下げていたバックからスポーツタオルを取り出すと、それを私に投げた。

青と白のラインが入つたそれは、フワーンと私の手に落ちてくる。

「とりあえず涙拭けよ。みつともねえぞ」

遠慮なく言われたその言葉につつと詰まり、大人しく従つ。

年頃の乙女が涙も拭かず、なんてさすがに嫌だ。あ、でもこのタオル、今日まだ使つてないよね？ そんな視線を送るが、彼は『早

く拭けよ』と言つただけだつた。

みつともない、つてなんだ。

女の子に向かつてみつともないつて。そう言いたかつたのに。

でも心外だ。絶対にばれないと思つてたのに。先輩たちに、泣きそなのがばれていたなんて。

そう小さくこぼすと、『あの人たちと俺たちじや、少しでも確實に、生きてる年数が違うんだよ』と諭された。

「に、してもお前さあ。明らかに泣きやうだつたが、あれは。俺にも分かるくらい。

そんで、そんな泣きそうな顔して元気に振舞うもんだから、一いつちが困る。正直」

そんなこと言われても……。

「先輩たちが泣いていないのに、私が泣くつて」

なんかおこがましいつて言つつか、図々しいつて言つつか。

モーモーモとそう言い訳しているつちで、また涙が出そうになつて下を向いた。今日の私はおかしい。いつもならこんなことで、涙なんて出るはずないのに。

そんなことを考へると、上から声が降つてきた。

「お前、自分で思つてるほど強くねえよ。多分」

それと同時に後頭部に温かな重みがのつた。気遣わしげに、そつとそつと彼の手が動く。

暑いから、と長かつたのに短く切り、今では肩にもかからない髪。そんな髪を慈しむように撫でられる。ぽろりと、涙が一筋だけ流れた。

何が悲しくて、一回もいこつに泣き顔をそらとなきやいけないのよ。

「私は、しつかり者なのよ。強いんじゃなくて、世話焼きで……、

皆を落ち込ませないようにしなくて……」

だから、私が泣くなんて、ありえないじゃん。泣いてなんかないわよ、そう言つたかった。こつにも、先輩たちにも。自分にだつ

て。

「先輩たちからの伝言……。」

『俺たちの分まで泣いてこそ、マネージャーだ』

だってさ。だからさつきのも、今のも全部先輩の分だからな
そう言われたら、しゃべれるまでには回復していた私の涙腺なん
てあつけなくて。たちまちのうちに崩壊してしまった。

そして、頭の上有る手がすごく優しいことに気が付いた。

「それだけ流せば、先輩たち泣かなくて済むよな？」

「……ん

「それだけ泣けば、俺も……泣かないでいいよな？」

「うん」

その問いかけに、一つずつ頷いた。

泣き止んだか？ その問いかにも頷いて答えた。それを見ると彼は『よし』と言つて、私の頭から手を離す。そして、自分のバッグを出して、それを差し出した。

思わず、わけも分からず、それを受け取った。

「お前にミットで取れって、無茶だよなあ」

その発言は『ハア』という、溜め息つきだ。何だ、その溜め息は。何なんだ。そしてボールを一個取り出して、私から20m程離れる。『マネージャー。お前、絶対グローブ動かすなよ』

何を言い出すんだこいつは。

動かしてケガしても知んねえーぞ。彼はそういうた後振りかぶった。

「えつ……ちよつ」新エースの初、投球！！

思いつきりと言つわけでもないだろう。ボールは、それでもすごい速さで私のところに飛んできた。そして軽く両手で構えていたグローブの中に納まる。

バシン、といい音が響いた。でも、私の耳にはそんなもの届いていなかつた。両手に痺れが走つた。ビリビリと両手が振るえ、腕さえも震える。

しばりべーの腕の痺れは取れそうにない。

「怖……」

口から出た感想に、彼は『やつぱりキヤツチヤーじゃなきや本氣で投げれないな』と一人ごちた。

「まさか。本氣で、投げようとしたの？」

いくら強がりの私でも、さすがに、それは怖いぞ。いつの間にか悔し涙は消えていて、悔しさが消えたわけではないにしろ少しだけ緩和された気がした。

「ん~。それはない、さすがに。先輩たちに殺される。女の子に何するんだっ!!」て

先輩たちは、中々過保護だった。

野球部ただ一人の、マネージャーだから。だつて、今時休み返上してまで部活に出ようなんて女の子中々いないから。

「あー、ケガしなくてよかつた。顔に傷とか、お嫁さんにはいけない」「あ、その顔でいける自信あるんだ」

頬を押されてわざとらしく言つと、すぐさま言い返してきて頭にくる。冗談で言つただけじゃないか、しかもお前にそんなこと言われる筋合はない。

「本当にケガしたらどうするつもりよ!!」

きつ、と彼に向かつて言つと彼は頬を一回、三回かいた後、はにかむように笑つた。うわ、こんな顔するんだ。なんて言えないけれど。

そして彼は、信じられない言葉を吐く。

「そん時は、責任とつてやるよ。あー。でも俺、野球選手になるつもりはないんだよなあ。残念ながら」

いや、だつて万が一慣れたとしても、いつクビにされるかわからんないんだぜ？　いやだろ、そんなの。それに何だかんだで、遠征とか、キャンプとか大変だしなあ。

そんなこと、今、関係あるのか……。

「な……」

思わず返す言葉を搜した。

探してしまつ、自分に恥ずかしさを感じ、さらに顔に血が集まる。

「こんな顔を、奴に晒す日がこよつとは思わなかつた。

「堅実な公務員の奥さんつて、駄目？ マネージャーさん。それとも、野球選手の奥さんじやなきや駄目か？」

しばらぐこの腕の痺れは取れそうにな。

そう、多分……。来年は長いであろう夏が終わるまでは絶対に取れないだろう。あと、この頬の赤みも。

私がどう思つてゐかなんて、実は嬉しかつたなんてこと、言いつつもりもない。

長い夏（後書き）

で、続きがあるんですよ。また載せますが。
このいつ、スポーツマンの男の子が書いたかつたんです。髪が短
めで、固めな感じ。少し目は鋭くて、でも笑うと子供みたいな人。
日に焼けてて、健康そうで少年らしさ少し細身な体。

……変態そりですか。まあ、好きだからしうがなーよー！

細身なのに、運動とかさらっとこなし、つこでに自分が持ち上げ
れないものをわざと持ち上げてくれるような男の子にきゅんとし
ます。

きゅんとするんですが、友人曰く『それ、恋じゃないから』『らし
いです。

私のキュン、は猫とかに対するキュンに近いらしい。『かわいー
ー』とか言ってたら、そつかもしない。

夏の終わり（前書き）

『長い夏』の一年後。一年生の夏が終わった感じ。……二年目が書けるといいですねえー。（人事）

今回は少しだけ恋愛成分多めで。純朴な彼らが好きなんです。

夏の終わり

力キーン、と耳に残る音が鳴った。長く、長く、音が伸びる。白い点のようなボールが遠くに飛んで行って、そして選手のグローブの中に納まる。

「次、湯川ー」

「よし、来いっ」「

威勢のいい声が遙か彼方から聞こえてくる。よく響く声は去年と変わらなかつた。

しがないマネージャーでしかない自分は、ボールを拾いつつそちらをちらりと見る。

すでにボールをしつかりと見ていて、目が合つことはなかつた。……というより、練習中は目が合つたためしもない。ずっとボールを追いかけているのだから、しょうがないと言えば、しょうがないのだ。

文句を言えば、なぜピッチャーがノリノリでフライを捕るのか疑問だということか。練習といつてしまえばそれまでだけど。

「清水ー、ボール」

「はーい!」

そして自分も彼だけ見ているわけにはいかない。

それでも、まあ、野球が好きな彼との仲だから、不満なんてあるはずは、ないんだけど。多分。

涼しくなりつつある夏を感じつつ、『あと一年か』と小さくつぶやいた。

甲子園も終わつた。だから、その人たちの夏ももつ終わつてゐる。
……私たちの夏はもつと早く終わつてゐる。去年より、長かつたけど。
彼に残された夏は、もう一つしかない。

「なー、清水。湯川とは『トーントカすんの?』

ボールを持つていくと、キャプテンがニカリと笑う。憎めないこの人は、がつしりとしていて彼とは少し違うタイプの選手。

「うなれば、某有名高校野球漫画のキャッチャーみたいな人。いや、キャッチャーなんだけど、この人。

「どうしてですか?」

「あ、怒った?」

「怒つてません」

「怒つてるよ。同級生に向かつて敬語とか」

「新キャプテンに敬意を払つてるのは思いません?」「思えないねえ」

要領を得ない会話を数回繰り返し、そして小さく笑つた。ダメだ、この人相手に長く怒つていられない。

「どうして聞いたの。そんなこと」

「別にー。休みの日でも付き合えとかメール来れば、普通心配するでしょ。彼女とか大丈夫なんかなあ、とか」

「え、休みの日までメールしてんの? やっぱ恋女房には勝てないのか」

「ふざけてるだろ」

「まあ。でも、休みの日でメールはちょっと羨ましいかも」
大体、付き合つてるつていうほどでもないし。

そういうと、今度こそ目を丸くされた。そして、『ええ??』と

聞き返される。

「いや、でも、付き合つてるよな?」

「どうしてそう思つのよ」

聞き返すと、うつと詰められる。そして『何となく』といつ何とも頼りない意見が返された。

「告白されたら? 去年のほら、負けたとき

今年も負けたけどね、とは言えない。さすがに。

「あれ、告白……かなあ、とか最近思うよ? それに私、返してな

いし

「なんでもっ！！」

「何でつて、別に告白とかじゃない気がしたから。告白とつていいのかどうか、微妙だったし」

それにあれで返事するのも、何と言つか、自意識過剰な気もするし。

「お前ら、あれだな。どこの漫画みたいだな。某高校野球の「あれほどロマンチックだつたらいいんだけどねえ」

「ここまでくるとお互い遠慮も何もない。大体私が彼のことをどう思っているかなんて、この人にはとっくの昔にばれてこる。

「そうかあ。付き合つてないのか。湯川可哀想だなあ」

「おい、お前はどうちの味方だ」

「清水、言い方が。でも、まあ、あれだな。野球部以前の友人の味方をするか、旦那の味方をするか、迷うよなあ」

「どっちかっていうと、女の子の味方するでしょ」

「そつは言つが、ちらりとこちらを見るこの人の顔を見ると、そうでもないといふことが分かる。

「この裏切り者め、と言つてやろうかといふ思いがよぎる。

「ボールが当たれば、責任とつてくれるんじやね？」

「何でそんな痛い目みなきやいけないんの、私が」

『責任』という言葉を聞き、少しだけ反応してしまつ私は悲しいかな、やはり恋する女の子ということだ。

去年の私からはきっと想像がつかないくらい、のめり込んでいるのだろうと思う。不毛すぎる。

夢は甲子園とデーター、とかいう男の子相手なのに。

これなら、本当にどこの漫画の主人公のほうがよっぽど恋愛していると思つ。

夏が始まる前は、夏のために練習する。夏が終われば秋とか春へ、そしてまた夏へと向かつて練習する。

この繰り返しも回数にしてみればほんの数回だといふのに、とて

つもなく長く感じる。

それにしては、一番思いの深い夏はあつとこつと聞こ鳴かしてしまつのだ。

「理不眞……」「は？」

「何でもないですー」

そう言つてまた、ボール拾いへと勤しむ。ボールを綺麗にしなきやいけないし、硬球縫わなきゃいけないし。

なれない頃はよく刺したりしたが（かなり痛い）、今ではまくできるようになつたと思つ。

最初は一本糸を通すことさえ知らなかつたが。（一本で縫えると思つていた）

やることばっかりもある。だから別に、やつ、別に何がビツくうしたいとか特別何がしたいとかいうことはない。

私だけ同じくらい、いや、それ以上に忙しいのだから。

「今日はここまでなあ。後日付けは各自じゅよ。マネージャーも甘やかすなよー」

「はーい」「」

まだ夏だが、一番日が長かつたときよつは、やはり日は短い。すでに空は暗く、端のほうで夕焼けがうつすりと残るだけだ。家にこれから帰るとメールした方がいいなあ、と一人いちながら家路を急いでとした。

「で、マネージャーわん。どうして先に帰らうとするのかな

後ろから、からかうよつくな声が聞こえた。学ラン姿の彼は少し珍しい。ゴーフォーム姿が自然だから。

学校のあるときはいつも学ラン姿を見ているはずなのに。なのに、彼を思い出すときはいつも学ラン姿を見ているはずなのに。なのに、

「別に。何となく」

そっぽを向くでもなく、そつ返すと、ほんの少し不機嫌そうな顔をされた。よく日に焼けた肌が眩しい。

もちろんこちらだってイマドキの女の子の子のつて綺麗な肌でいるわけではないのだが、それでも彼よりは白いと思つ。

「何となくで帰るのか？」

「だつて別に約束してないでしょ」

自分にも、きつと相手にも痛いところをつっこむ。すると今度はあからさまに眉をひそめられた。

小さくいゝ氣味、と口の中でつぶやいた。

きつと一年前の私でも、最低、と眉をひそめただろう。

「三浦と何楽しそうに話してた？」

「選手のこととか、休日の話とか」

当たり障りのない話題を選んで口にする。「そは言つてないし、特別ごまかしてもいいと思つ。

しかし彼が望んだ答えでないこともまた事実なので、それは知らないふりをした。

「ここ最近不機嫌なのはどうして？」

声が、少しだけ優しかった。

しかたなく、小さく笑うとそつと笑に返していく。去年より、少し大人になつたねとは言わなかつた。

もうすぐ終わる夏、それでも彼にとつてはまだ『夏』で、それは私を少しだけ遠くにやる。

「去年の言葉をね、思い出して……。三浦君と話してた」

「なつ」

初めて、表情が変わった。ぼつと火がついたよつて、浅黒い肌が染まっていく。暗くなり始めてるので、見えにくいのが残念だ。

「何でつ」

「いや、付き合つてるのか、つて聞かれたから、否定はしておいたほうがいいのかと思つて」

つるり、と口が滑ってしまった。あー、と空を仰いでも今更ビリ
しようもない。彼は、同じく『あー』と声を上げていた。

「何で言われて？」

「休日まで三浦君呼び出して練習してんだってねー。恋女房だね
ーって。

そしたら『彼女は大丈夫か』って心配されたから『付き合ってない
よ』と、

彼の表情を見て、何かまことにでも言つたかと思つた。
「つまり、付き合つてるつもりがなかつた？」

「え、湯川君、付き合つてたの？ 私と」

「俺は去年、何のためにあんなクサイ台詞を吐いたんだ……」

「つまりは、自意識過剰でも何でもなかつた？」

「ごめん。あれで返事をするのは、何か自意識過剰かと
がーと短く切られた頭をかぐ。気まずそうにこちらを見て、また
空を仰ぐ。なんだか可哀想に思つてきた。

「返事、いる？」

「こる。つていうか、何も言わずに一緒に帰つてたから、付き合つ
てくれると思つてた。こっちが自意識過剰だろ、これじゃあ
「でも、さ。返事つてどうすれば返事になるの？」

これでは、一番最初にマネージャーになつたときと一緒にだ。
もつとも、あのときの質問は『どうすれば選手がアウトになるの
か』という初步的な質問だつたが。

「す、きです。付き合つてください」

「えつと。はい、喜んで、でいいのか、な？」

お互い不慣れだから、多分、こんな感じでいいんじゃない？ と
笑いあう。

他人から見れば、ぎこちなく、幼く……眞つ人が言えれば、お前ら
は小学生か何かかと怒られそうだ。

それでも、やっぱり、こうでもいいんじやないかな、と思つ。
相手はなんたつて甲子園と付き合いたい男の子だから。

だから次の夏が来るまでは、私どもトークでもしましょうか、と聞いてみる。

「でも、甲子園が一番なんでしょう」

「まあ、高校三年間はそれで通そうかな、と」

未来の公務員さんはそうやつて笑う。そのとき冷たい風がびゅつと吹いて、そんなに冷たくないのに彼は身を震わせた。

「暑い日にはすつごく元気なのに、冬になると大人しくなるよね」

「暑いのは平気、でも寒いのは死ぬほどいや。できればもっと暖かいほうで生まれたかった。九州とか、沖縄とか」

「沖縄は台風が多いから、外で練習できないよ」

「じゃあ、九州」

「九州でも寒いところはあるらしいけどねえ」

話しても仕方のないことを話しながら、ゆっくりと歩いていく。できれば来年は、もう少し夏が長くなればいいな、と思いながら。でもいざ甲子園と彼がデートするつて言えば、また機嫌が悪くなるかもしれないけれど。

「三浦もなあ、もう少しはつきり言えばいいのに」

「はい？」

「『お前、いつか絶対振られる』だつてわ」

「あー、そうかもねー」

お節介な友人に小さく感謝して、小さく彼の手をつかんだ。

夏の終わり（後書き）

初々しい子達を書くと、少しだけ恥ずかしくなる。

ちがう（前書き）

友人に著作権ごと賣つた小説の半ば二次創作。

友人がほとんど興味のなかつた、脇役の二人を中心にして見ました。
……いつもだな。何故か主役カツプルよりも、脇役カツプル
が好きだつたりします。

シスコン、つてどこまでいつたらシスコンなのかなーとか思つ
てみたり。

ちがう

昔、私の髪はセミロングで、よく一つくくりにしていた。好きな男子が、二つくくりが好きだったから。

「奈央^{なお}。あんたが好きな柊^{ひいらぎ}くん。今日、やけに落ち込んでるわよ～。慰めてあげたら？？」

舌つたらずなしゃべり方は男子には人気でも、女子にはかなり不評だ。少し長めの髪をくるくるときれいに巻き、目元から口元までバツチリメイク。

胸元のシャツは大きく開き、私とは違う真っ白で豊かなふくらみが見えた。リボンがだらしなく結ばれ、まだ寒いといつのにスカートは短かい。

「煩い。好きじゃないし」

小さく頭を振ると首もとで一本のみつあみが揺れる。それをけだるげに見つめた。

黒ぶち眼鏡に、おさげ髪、制服は第一ボタンまできれいに閉められ、リボンは美しい結び目をキープしている。スカートは膝下五センチ固定。

何の面白げも感じられない、非凡なほど真面目なガリ勉タイプ。

それがクラスでの私の評価だ。

「またまた。心配で仕方ないはずのくせに～～

頼むから、そんなに大きな声で語ってくれるな。

教室が煩くて助かつたからよかつたものの、『あの』柊^{ひいらぎ}くんが好きだなんて人に知れたら私は死を覚悟しなければならなくなるのだから。

「で、伴、どうしてあんたがここにいるのかしら？」

トントン、と今時珍しくなりつつある図書カードを整理しつつ、十年来の友人の名を呼ぶ。図書委員の仕事中に何の用だ。

「いや、お前なら話聞いてくれるかと思つて」

また始まつた。じいつの悪い癖は自分がどうしてもできない時は友人に頼むこと。

それなら最初つから頼めばいいのに、変なプライドがあるのかもう手が付けられない、という状況まで自分でやり、あとは友人に任せることだ。

悪く言えばそうだが、見方を変えれば最後まで諦めない人だとも言えるかもしれない。とはいって、友人から見ればそこまで抱え込まなくて……と思うような内容が混じつてないとも言い切れない。

「で、今度は何？ 梓くん？」

わざとらしく聞いてやれば、友人は図書委員の席である受付に入り込んだ。

「昨日、芳帰つ きただろ？」

「かあるくん？ 同じクラスじゃない。知つてるよ、それくらい」

昨日帰ってきたのはフランスからの転校生。

咲野 芳
さくの かおる

幼稚園のときに一緒に、引っ越ししてからは連絡も取つていなかつたが、昔馴染みと言つて差支えがない程度には仲がよかつた。

そのかあるくんが昨日、日本に帰つてきて、かあるくんはこの友人の家に遊びに行つたはずだ。

「で、そこまではいい。そこまでは俺だつて、喜べるんだー！」

じゃあ、今は喜んでないって言うの？ あんなに仲がよかつたのに？

「じゃあ、どこまでいったから、喜べないの？」

「さすが、奈央！ いい勘してるな」

いやいや、かおるくんに対しての敵対心のようなものがあんたの後ろから見えただけだよ、とは言わずにおいた。

「聞いてくれ！ 芳は、俺の、俺の大切な妹を……！」

またその話か。

言い忘れていたが、こいつにはもう一つ、決定的な欠陥があつた。それなりに顔がいいにもかかわらず、頭がいいにもかかわらず、運動神経がいいにもかかわらず彼女ができる理由。いや、できそつになつても必ず失敗に終わる訳があつた。

それは

「俺の大切な妹を……！」

重度のシスコン病。もう危篤状態。不治の病。つける薬なしの妹バカ。

そこまでがラインだつた。

「悪いわね。伴。私、今日もう帰るわ。図書委員なんでしょう？」

度くらい、大変なクラスメイトを助けてくれてもいいわよね？ 「だから嫌なのだ。こいつの……伴の話を聞くのは。

「奈央？」

「また明日。聞いてあげる。詳しいことまで。だから、今日は帰してちょうだい。あなたの話を聞くの、結構体力いるんだから」

そう、本当に体力いるんだ。伴の話を聞くときはいつだって絶好調の体調じゃないといけない。その絶好調の体調で聞いてさえ、聞き終わったときはぐつたりしてるので。

「聞いてくれるんじやなかつたのか？」

「どうしても聞いて欲しいんなら電話しなさい

メールでもいいから、と言いかけて止めた。こいつには携帯の番号もアドレスも教えてはいなかつた。

「あなたの家に登録してある電話番号でまだ通じると思つか」「椅子の横に置いてあつた、無駄に大きくて重い革鞄を持つ。私の気持ちと一緒に、その時になつて気づいた。

無駄に大きくて、重くて、持ち運ぶのには不便なくせに、置いていくには気が引ける。

かといって簡単に捨てられるものじゃなく、買い換えるのも簡単じゃなくて、そして長い間使つてはいるから捨てるのももったいな氣がする。

何を、やつてゐるんだろう。私は、十年もの間、何でものを持ち続けていたんだろう。

どうして、恋人を早く作つてはくれないんだろう。

そうすれば、少しでも早く見切りをつけただろうに。

彼の目はいつも同級生に向けられてはいなかつた。どこまでも暖かく、柔らかい、唯一の愛情は、ありつたけの分だけ『家族愛』として妹に注がれていた。

その中に少しでも恋愛感情があれば諦められたのに、その愛はどこまでいつても『妹』にむけられる純粋な家族愛だった。

絶対に私には向けられないと知つていた。そしてその愛が彼女以外に向けられないことも、私は知つていた。

彼の心は絶対に手に入らない。だけど、誰の手にも渡らない。

それが私の心のよりどころだつた。

小さい頃は、それがよく分からなくて、ただ妹が、『僕ちゃん』が本当に好きなんだなあ、と思つてた。同性から見ても可愛らしく、素直で、賢い子だつたから。

だから伴が彼女の話をして、どうしてことなかつた。兄弟のいない私にとっては、その話は本当に面白かつたから。

だけどだんだん、大きくなるにつれて、分かることが多くなつた。

それからだろうか、彼が好きだった
つくりりをやめてしまったのは。

「僕ちゃんの大好きな一

セミロングの髪をずっと伸ばした。彼女も、セミロングだったから。

う。

眼鏡もかけた。親はコンタクトを奨めたけど、彼女は眼鏡をかけてなかつたから。

自分の周りから暖色をなくしていった。彼女がよく身につける色だから。

絶対に、一緒になりたくなかつた。全て、違うものしたかった。思い出した。つくりりを止めた理由を。

『可愛いな。僕と一緒にだ』

この一言があつたからだ。彼にとつてはなんでもない一言でも、私には止めだつた。致命傷だつた。

どうして、そんなこと、言つの？　ともくん。

そう、言つて、帰つたんだ。そして、次の日から絶対につにくくることはなかつた。

「奈央？」

「ごめんね。伴。今日、慰めてあげれないや。どうしてかなあ。調子悪いのかな」

作り笑いが通じる相手だ。少なくとも、こいつは。だって、あの日から、こいつの前で本当の笑顔なんて見せてない。いつもいつも、眉を下げて笑つてた気がする。

『あんたといふとね、周りの視線が怖いのよ～』

『一緒にクラスだつたつけ？』

『あー、ハイハイ。偉ちゃんね。代わってあげるから、一緒に回つてきたり?』

『偉ちゃんに恋人ができたら? 何? あなたそれで昨日寝てないの? できるでしょ? あんなに可愛いんだから』

自分が、一番嫌いだつた。絶対に振り向かないこいつよりも。あんないい子を、少しでも嫌だと、会話も避けたくなるくらい嫌だと思う自分が一番……。

『奈央さん。うちの兄、変な人ですけど、優しい人ですから!…』

『知ってるよ。安心して、偉ちゃん。責任もつて、常人になるように指導するから』

『ホントですか?』

『もちろんよ。ちゃんと分かってるよ。偉ちゃんのことが大切なだけだって』

知ってるよ。優しい、人だつて。私にだつて、優しくしてくれる。彼は、優しくて、残酷な人です。

だけど、どうしても嫌いになれないのは、私が好きになつてしまつたから。誰が悪いわけでもない。私が、そんなことを思ったからいけないので。

「奈央。お前本当に、大丈夫か? 送る。家近いし」

「いいよ。近いっていつも、結構な遠回りになつちゃうし。早く帰らないと、かおるくんが偉ちゃん迎えにいつてるかもよ?」
これで、伴は帰る。

そう知っている、そう確信しているのが嫌だけど、紛れもない事実なのだから仕方ない。こんな感傷に浸っている場合じゃない。早く、伴から離れないと、私はどんな過ちをしてしまつこううだ。

「送る」

「いいつてば」

「奈央」

「伴、煩い！」

はつと氣づいても、もつと遅く。やつくりと傷ついた顔をする伴がいた。

「ごめん。気分悪くて、氣が立つてた」

言い訳のように呟いて、扉を開ける。ひゅつと冷たい風が入ってきて、温かかった室内の温度が一気に下がる。

「ほんと、『ごめん。ちょっと疲れてるだけだから。明日、ちゃんと話し聞いて、今日のことも、絶対謝るから』

だからもう、私に惨めな思いはさせないでよ。声かけられるたびに、叶わないところを実感してしまつから。

「奈央。お前……」

「ごめん。伴。名前、呼ばないで」

はつきりと、偉ちゃんの名前を呼ぶときと違つと分かつてしまつから。そこにこめられたモノの差を、私は分かつてしまつから。

同じ声で、同じトーンで、でも明らかに違うと分かつてしまつ呼び声。

私は、ついに過ちを犯してしまつた。

「あなたは、絶対に、じつちを見ない奴よね？」

確認するようなその口調を、止めようと思つたのに。あふれる涙も、止めようと思つたのに。

「奈……」

そこで伴は止めた。名前を呼ぶなといったことを、思い出したらしかつた。また、傷ついた顔をする。

「ごめんね。私が傷ついた分だけ、伴も傷ついて。誰にも責任がなくて、私だけが悪いんだとしても、どうしても、一人で傷つくのは嫌なの。」

意地悪で、どうしようもなく性格の悪い私を許して。

ちゃんと、謝るから。何年かして、もうこの気持ちを思い出せなくなつたら、ちゃんと訳を話すから。

笑いながら、『馬鹿な恋をしたのよ』って言えるように、するから。

それまで、それまでの何年かだけ、私が十年勝手に傷ついただけ、伴を傷つけるのを許して。

「知ってるの。伴が偉ちゃんを……偉ちゃんしか大切にしないこと

「それは……」

「知ってるって、言つてるでしょ。家族間の愛情だつて分かつてる。分かつてる分、痛いんだよ。『私が』辛いの」

私の、勝手なの。

傷つくるのも、

傷つけるのも、

好きになるのも、

諦めるのも。

「比べられたくなくて、おさげにしたの。眼鏡もして、大好きな色もなくした。彼女が続けるピアノも止めた。フランスも……嫌いになるかもしない」

彼女がこれから好きになるであろう、フランスを。かおるくんが

育つたところを。

「前に、偉ちゃんに『優しいですね』って言われたとき、正直驚いたわ。だって、私優しくないもん」

傷つけてるだけだもん。

「私が優しいのは、もしかしたら……いつかは伴がこっちを見てくれるかもしない、って思ったからだよ。そのときの、伏線だよ」

全部自分のための、優しさなんだよ。

「それに気が付かないなんて、伴はバカ。すつごいバカ」

ゆつくりと髪を止めていたゴムを外す。きつく結んでいた髪は少し緩んただけで、簡単には解けなかつた。

眼鏡を外すと、少し視界が開けた気がする。これで少しは、本当のことが見えるようになるのだろうか。

「もう、このみつあみも、眼鏡も、必要ないね」

本当は、もつとかっこよく、言いたかったよ。泣いてる姿なんて、見せたくなかつた。ボロボロになつた姿なんて、晒したくなかつた。

「本当に……バカなんだから」

伴も 私も。

ぐるりと扉から出て行こうとするのを、阻もうとする手を逃れる。ただそれだけなのに、どうしてか、治まり始めていた涙があふれ返つた。

「もう、泣かせないでね」

これが、あんたの前で見せる、最初で最後の涙になればいい。そうしたら、強くなれる氣がするから。

視界がぼやけて、伴がどんな顔をしてるのか分からなかつた。だけど、きっと寂しそうにしてるんだろう。

「ごめん」

右手の手首を掴まれた。

とつさに振り払おうとして、そして……振り払えなかつた。振る

手に力が入らずに、だらりと垂れ下がつた。

ここまで来て、私はまだ伴のことが好きなの?

どうしても、私は伴から逃げられないの？

「いいよ……、もう。私が、全部悪いんだし」

「奈央！…」

大きな声で、呼ばれた。その反動で、最後の涙が零れ落ちたのを見て、伴があわてて「めんと謝る。

「お前の、悪いところを教えてやろうか？」

少し膝をかがめて、伴が私と視線を合わせる。握られたままの手は、何も感じなかつた。

「お前はなんか悪いことがあると、自分のせいにしたがりすぎだ。そんで、それを全部溜め込みすぎ、我慢しすぎ、無理しすぎ」

見てて……ちょっと自分が情けなくなる。

何にもできない自分が、情けない。

「そんなの、私の勝手でしょ？ 悪かったわね！ 無理しすぎで。しょうがないでしょ。今回は明らかに私の一人相撲にあんたを巻き込んで、勝手に怒つて泣いて、あんた傷つけて」

最低だ。私は。

「私が悪くなきゃ、誰が悪いっていうのよ！ 誰のせいにすればいいのよ！」

私が、私があんたなんて好きにならなければよかつたの…！ 普通の、私を大事にしてくれる人を好きになればよかつた。なのに「なのに、よりにもよって、好きになったのは絶対に望みのない奴。「離してよ。伴。お願いだから、もう、はな、して」

ふるふると体が震えだす。怒りと悲しそと、心の中にある、感じたことのある全ての感情が混ざり合つ。

「もう、惨めすぎるから……、ちゃんと諦めるから。だから、はなして」

もう、好きとか言わない。傷つけない。迷惑かけない。だから、はなして。もうこれ以上、私にかまわないので。

痛い。

い、たい。

いたいいたいいたい。

体のどこかが血を流す。だけど私はそこがどこだか知らないから、手当ての仕様がない。

そして出血はひどくなる。私の手を、染めて、流れ出す。止めようと必死に体中を探すのに、痛みだけがひどくなつて、血に涙が混れる。

助けてと呼ぶ声も、喉で潰える。助けてくれる人なんていないことに気が付いたから。

「奈央。ごめん。俺、バカだから、何にも考えなかつた。いつも笑つて、優しくしてくれて、偉を大事にしてくれるから。そんなふうに考えてるとか、思わなかつた」

するりと、伴の手から私の手首が外れた。握られていたところが酷く寒く感じて、そつと左手で握る。

『痛い』という言葉を口元を押さえた手で封じる。そうしないと、嗚咽とともにたくさん言葉が出てしまつたから。

「俺、なんかしでかしたあとで気づくんだよ。昨日も、偉を傷つ…

…ごめん」

そのごめんは、多分、偉ちゃんの話題を出したからだろ？。いいよ、とは言えなかつた。逆に、もう言わないで、とも言つ資格はないつた。

「でも、奈央。諦めるとか、言わないで欲しいんだけど」

「は？」

大丈夫、奈央。

変に心を動かしちゃ駄目。こいつはいつだって、期待はさせる奴だから。いつだって、あとで落ち込んだでしょ？だから期待しちゃ駄目。

「だから、今は別に、恋愛感情とか持つことないからわかんないけど、今奈央が泣いてるのを見たら、何か僕が泣いてるのとはまた違う感じがしたから」

それは私より偉ちゃんが大切なんですよ。

「俺も、そろそろ僕から卒業しなきゃいけないと思つから」

ちらりと横田でこちらを見てから、伴はこちらへと向き直った。

「よく、分かんないけど、奈央は他の奴とは違つて言つのは分かるから」

彼は、優しくて、残酷で、やっぱり残酷なんです。どこまでも、私をおぼれさせて、逃げ出したいと思つて眠こなまるんです。

一番、愚かなのは、泣いても、怒っても、諦めが付かない私なのかも、しれないけど。

「送つてくよ」

「いいよ」

「送つて行きたいの」

「……お願いします」

「」「」「あつ」「」「」

田の前から、見慣れない組み合せが歩いてくる。

「かおるくん。偉ちゃん」

「あ、奈央さんだ」

名前を呼べば、パタパタとこちらへ走ってくる。手をつないでいるかあるくんも強制的に早歩き。

「芳さん、加藤 奈央さん。お兄ちゃんの変人ぶりに付き合っているで、すつこく優しいの」

この兄妹は本当に、どこまでも優しくて残酷だ。

「知ってる」

「昨日、今日会つてるもんね。幼稚園一緒に」

偉ちゃんに向けられるかあるくんの視線は優しげで、好きなんだあ、って思うほどで。

「芳さんと奈央さんもお友達なんですか！」

何で私覚えてないの——！』と、偉ちゃんが叫ぶ。

まあ、私も偉ちゃんに会つたの小学生になつてからだしかあるくんは会つてないだろ。

「で、お前は奈央ちゃんに気持ちに気づいたんだ？ そうやつて帰つてるつてことは」

「お前。幼稚園での癖抜けないのか？ 高校にもなつて『奈央ちゃん』とか」

「妬いてるわけ？ 妹取られたし？」

「お前、わざとだろ」

むつとして返せば、芳は笑う。

「ともかく、よかつたよ。俺があつちに行つてる間に進展してんのかと思つたのに」

「何で」

聞き返すと芳はにやりと笑つた。人のよさそうな、穏やかな顔が腹黒く思えてくるのは長年友人をやつてゐる所以か。

「だつて、お前。俺が『奈央ちゃん』と仲良く話してると機嫌悪くなつてたし。知らなかつたのか？」

「わざとらしく『奈央ちゃん』と呼んでいるのが非常に憎たらしく。

「まあ、ゆづくつ自分の気持ち確かめてみたら？ 俺の『一田ぼれ』みたいに恋らしい恋に田覚めるかもよ」

「お前、人から妹を取つておいてよくも」

返す言葉を搜していると、後ろから声が聞こえてくる。

「伴。かあるくん。

もう日が暮れるから帰ろつ。私ここでもうここから

「奈央、それじゃ約束が」

「いいよ。あんまり遅くなると、お母さんたちも心配するでしょ？」

「どこまでも、大人な彼女の台詞は聞きなれたものだつた。

「お前のもう一つの悪い癖」

「へ？」

「遠慮しそぎ」

昔から。彼女は遠慮するのが上手だつた。遠慮しないように見せかけて、遠慮している。

もうずつと、そつやつて生きてきたのだらうか。

「俺と一緒にいるからには、遠慮してると振り回されるだ

「いいよ。ずっと振り回されてるから」

それでも嫌いにならない私つて、かなりしつこくない？ 重いでしょ？

そうやって笑う彼女の顔が可愛く見えたのは、夕日と言葉の所為にして。

「偉。先帰つて母さんに彼女送つて伝えてくれる？」

「え？ ええ！…」

「分かつたから、送つてあげたら？」

驚いている偉に芳は平然と帰るよつと促している。

「送るよ」

「あんた、今取戻しが付かないこと言つたつて気づいてる？」「…

重いって言つても、離してやんないんだから。

ふわりと笑つて彼女は言つた。みつあみにされていた髪に軽く癖
がかかり、肩のところで浮いている。

多分これが、恋の始まり。

ちがつ（後書き）

へタレな変態おにいちゃん、が好きです。そういう方が好きです。他のお話でもそういう雰囲気を持つ方がいらっしゃいますが、彼より重症な伴くん。

実はモテモテなのは秘密です。その辺鳞さん見えませんが、結構なイケメンさん設定。

勉強も運動も出来るんですが、なにぶん変態、なので……。

友人から『変態』のレッテル貼られまくつの彼を実は愛してるなんて、言えないつきです。

奈央ちゃんが可愛ければいいかな。もづ。

試練（前書き）

『ちがう』の続きです。

友人にこつちへ載せてることがばれました。……どうして見つかったのか、すごく不思議です。友人のネット回線（？）が読めないまま、降ろすつもりないけど。

試練

「ねえ、お兄ちゃん。どうして今日は一人で帰つてゐるの」「偉。ゆき言つていいことと悪いことがあるつて知つてるか」

リビングで静かな攻防戦が繰り広げられてゐる。殴り合いといふものをしてことがないので、我が家でのケンカはこれが普通だ。

と……いうか、可愛い妹を殴るなんて野蛮な行動俺にはできない。

「ねえお兄ちゃんつてば」

「聞きたいことがあるんならはつきり言へよ」

本当は言われなくとも分かつてゐるが。

「今日はどうして、奈央さんと一緒に帰らなかつたのつて聞いてるの。分かつてゐるでしょ」

一つにまとめてある髪が可愛らしくはねた。あ～、本当に可愛いよな。うちの妹は。

そう思つてゐると、いきなり隣から頬をつねられた。

「それは、甲斐性なしの伴が振られたからに決まつてゐじゃない」「え、お母さんそれ本当!-?」

おおよそ四十台半ばとは思えないほど童顔な顔がこちらへと向ける。見た目は美人だが、性格はいかんともしがたい。これで愛しの偉じゅわいとそつくりなんだから、たちが悪い。

親父はきっとこの顔に騙されたんだな、とそつと思つ。むろん、こんなことを口に出そるものなら、即刻死刑だ。

「それはそうよ。いつもいつも偉、偉、偉!! いくら奈央ちゃんみたいな子でもいい加減、愛想尽きるでしょうに」

まったく、何をしているのかしらねえ、うちの息子は。そう言って母親はわざとらしく頬に手を当て、ため息をついた。

ケンカを売つてゐるようになしか思えない。

いや、事実卖つてゐるに違ひない。

「ダメだよー お兄ちゃん。早く行つて謝らなきゃ」

くくんくん、と僕が袖をひつぱる。

そのさまさえ可愛いなあ、と思つてしまつが、俺の周りの連中はそれが異様に移るらしい。

可愛いものを愛でて何が悪い、と反論するも『お前は変態だ』といづレツテルを貼られる。

「お兄ちゃんみたいな変人をね、いつまでも好きでいてくれるのは奈央さんだけなんだからね？」

「そうよ。伴。あんたこの機会を逃したら、一生独身よ？ それでいいの？！」

お父さんみたいに優しくないんだから、もてないでしょ」

あんたは自分の夫と息子を比べてんのかよ。
「お父さんみたいに優しかつたら、それはもう、女の子なんてよりどりみどりよ」

「じゃあ、何でこんなの選んだんだろうな……」

小さく呟くように反論すると、ニッコリと微笑まれた。キレイなだけに、その奥にある殺氣が怖いんですけど楓さん。

「あんたに『楓さん、いつまでも大切にするよ』って言われても魅力がないわ！」

「何で俺がお袋に『大切にするよ』って言わなきやいけないんだよ！…」

「じゃあ言つてみなさいよ。『奈央、絶対大切にする』って。ハイ、どうぞ！」

じりじりと母親と妹が迫つてくる。どちらも顔は可愛い。確かに可愛い。身内の欲目を引いたつて、可愛いに違いない。

しかし……どちらも女特有の性格の悪さが垣間見れる。

「ほら、早く」

「何で本人いないのに言わなくちゃいけないんだよ」

「本人がいたら言つとでもいうの？」

鋭く突かれて、うつと詰まつた。

冗談じゃないが、妹でもない人間に『可愛い』とか『大切にする』

とか言うのは並大抵の努力でもしない限り恥ずかしくて言えない。
「いつまでも奈央ちゃんがあんたを好きでいると思つたら大間違い
なんだから」

あんなに可愛いのよ？ すこーし手を加えただけですつこい美人
になっちゃうのよ。

それが周りにばれちゃつたらどうするの。

「あんたみたいな超シスコン男、すぐに相手されなくなっちゃうん
だから」

現に今日だつて、一緒に帰つてないでしょ。

「それは……あいつが今日用事があるからつて言つかり

「甘い！ 伴、甘すぎるわ」

そんなに顔を近づけないで下さい、真面目に怖いです。

「あんたまだ『好きだ』とも何とも言つてないんでしょ

『そういえば言つてない……けど。

「あんたねえ、本当にソレ、最低よ？」

母親がやつと落ち着いて顔を離した。

憂いを混ぜたため息が一回、ふうと長く吐かれる。

「奈央ちゃんには言わせといて、自分は言わないとがどれだけ卑怯
なのよ。それをやつていいのは女の子だけよ」
相手には言わせて、自分は絶対に言わない。

「女ならいいのかよ」

反論すると、ニヤリと笑われた。

「違うわよ。『女の子』だけ」

それがどういう意味か、分からなかつたが、反論するのもめんど
くさくて頷いておいた。

どつちみち、この家で女にか勝とうなんて思つてはいけないので。
「手始めに『奈央、好きだ』。ハイどうぞ」

「……好き、だ」

声が小さい！ とすぐさま渴が入る。

「奈央、好きだ」

「じゃあねえ~」

またニヤリと笑う。あの、本当に恥ずかしいんですけど。
どうしてくれようか。』のおばさん。

「『奈央、愛してる』」

「言えるかーーー」

すぐさま突っ込むと、ネクタイを引っ張られた。怖い、怖い、本当に怖いんですねじつーーー。

「あんたねえ。本当に語の気がないの、それとも思ってないの?」

「思つてない」とはない

反論するようにすぐわざと語つと、『ふーん』とおかしそうに笑わ
れた。

この人、確信犯だ。

「ねえ、お兄ちゃん、語つてみてよ~」

「伴、思つてるなんなら語わなきや。練習よ、奈央ちゃんいないんだ
もの」

どうして我が家はこいつなんでしょつか。

「あ……」

言えるわけがない。

「愛してるーーー」

半ば自棄で語つと、少しだけ一人とも驚いた顔をした。

「語つた……」

「語つたわねえ」

一人で何かを見るような目でこちらを見て、すぐさまキッキンに向かつて声を上げた。

「奈央ちゃん、聞こえたーーー?」

おじょっと待て。

「えつと、ハイ

困りながら出でるのは、一時間前に『今日早く帰らなくつちゃ
いけないから』と帰つていった人間だった。

「やばい、まじで面白い」

かおる
芳、……。

「芳さん、そういう言い方はダメだよ。お兄ちゃん頑張つたんだから」

「あ、でもかおるくんが言つと、違和感ないよね。『愛してゐる』でも『ジユテーム』でも」

くすり、と顔を赤くしつつも奈央は笑つた。

「そう?」

「うん。なんかね、フランス紳士つて感じ」

「Je suis amoureux de toi.」

「何で言つてるのか分からぬよ」

何で言つてるかは分からぬが、俺の神経を逆なでしていくらしいことは分かつた。

「これは偉ちゃんへだからね」

「じゃあ、愛の告白だ」

また奈央は笑う。

「いいわねえ、若いって

まあ、約一名、ぜんぜん若さを謳歌していない人間がいるけどね」

いやみんなのなかそう言つて、母はこちらへと奈央を連れてきた。

「可愛くない? 髪を卷いて、お化粧してみました」

よくよく見れば、髪形はいつもと違つ。あれ以来みつあみにはしていなかつたが、急激に外見を変えることがなかつたので驚きだつた。

緩やかに巻かれている髪はふんわりと輪郭を彩り、真っ黒の髪がわずかに光を反射する。

薄くひかれた化粧が肌を光つてを見せた。そして唇には淡く、少しだけ色のついた口紅。

「グロスをしてもよかつたんだけど、ちょっと派手になるから」

母親が『でもかわいー』と絶賛する。

「ちょっと、言わせてみたかったんだけど。どう? 奈央ちゃん」

「びっくりしました。伴は言わなさそつだから」「

ぐるり、と瞳がこちらを向いて細められた。

「無理しなくてよかつたのに」

そう言われると、小さくイライラと引きこまつ。

「奈央、ちょっと」

手を引っ張って、部屋を出ると、少しためらつて奈央の耳元に唇を寄せた。

「

びくり、と奈央が震えた後、赤くなつた。たぶん自分も赤くなつているんだろうと安易に想像がつく。

「伴は何だつて?」

「芳には関係ない」

ひょっこり顔を出した友人に言い返して、奈央に手を差し出した。

「送つていいく」

「お願ひします」

以前より素直に、手を握ってくれるようになった。なのでそのまま玄関から出ようとする。

「偉以外に興味がなかつた伴もついに年頃ねー」

そういう母親の言葉を無視して。

試練（後書き）

芳くんのフランス語はまあ、『想像通りです。伴くんの言葉は好きに入れていただいて結構です。

この二人は幼稚園時代も書いてみたいところ。

そういえば、友人のイメージでは奈央ちゃんはもう少し運動しそうな子らしいです。スポーツガール。

ちなみに髪は短めだそうですよ。伴くんがスポーツ好きだったので、わたしはあえて静かな子にしてみたんですけどねー。

つくりモノ（前書き）

人外×人、です。題名の通り、『つくりモノ』であるアンドロイドと女の子のお話。苦手な方はご注意。アンハッピーエンドの匂いはしますが、そんなことないですよ。

つべりモノ

どうして、死なないの？

どうして、年を取らないの？

どうして、わたしと違うの？

『お父さん、遙はどうして年を取らないの？』

『遙は人間じゃないからだよ』

『人間じゃない、の……？』

『そう。人間とは違うものだ』

「どうして、人間とは違うの……？」

田の前にいる少年は、静かに笑う。まるでそれが、当たり前であるかといつよいに。

「おはよう」やっこます。灯様あかり

「おはよう、遙」

透き通るような白い肌。一度も切ったことがない、真っ黒の髪。

見た目は普通より少しだけ端整で、感情も持ち合わせているように見える。

だけど彼は、私とは違う存在。

「今日はいかがになりますか？」

「いつもどおり、普通に過ごすわ

何もせず、ただぼんやりと過ぐすのが私の日常。国一番のアンドロイド作りの父が亡くなつてから、わたしはそう過ごしてきました。

「博士の、研究所からの手紙が来ておりますが」

「放つておきなさい。父亡き今、わたしには何もできないから」
本当は、作るうと思えばアンドロイドは作れる。だけど父のよう

に、感情豊かな、生きているようなモノは作れない。
わたしが作るのは、あくまで人間が求めている従順な機械。

「遙。父が亡くなつて、どうしてあなたは敬語しかしゃべらなくなつたの？」

前は、もつと普通に接してきたでしょう？

「私は、博士に作られた存在ですから」

博士がいない今、私はただのアンドロイドです。

「アンドロイドにも、死者を悼む気持ちがあるの？」

「博士がそのように作られたのです」

父が彼に植え付けた死者を悼む気持ちとは、父が母を悼む気持ちだ。
だからわたしが父に持つ気持ちより、ずっと深い気持ちだ。

「ねえ、わたしたちは

何が違うのかしら。

遙の肌は少し冷たい。だけど人並みの温かさはある。手に触れば柔らかく、人の肌と何の違いもない。

だけど彼の髪は伸びないし、体温は常に一定だ。食事も睡眠もないし、病気もない。

「全て、違いますよ」

彼の表情は少しだけ寂しげで、わたしは彼の裾を引っ張つた。
ベッドの中の足が寒くて、なかなか出れない。

「遙

そつと呼びかけると、彼はかすかに笑つた。そしてベッドの横へと座り、わたしを抱きしめる。

「アンドロイドを、おつくり下さい」

しかしわたしは次の瞬間、遙を押し返していた。

「イヤ、よ」

わたしはそんなもの作らない。彼のような温かみの欠片もない、ただのロボットを作るつもりはない。

「わたしが作るのは、あくまでロボットよ。感情も何もない、ただ人間の言うことを聞く、哀れな操り人形」

それ以上でもそれ以下でもない。ただの機械。

「私も、機械仕掛けですよ」

この体も、抱く感情も全て紛い物。

「遙は、特別なの」

もうこの世に残った、私のたつた一つの家族。

「あなたの才能は稀有である、と博士もおしゃっていたではありますか」

そんな言葉聞きたくなくて、わたしはベッドから抜け出した。差し出された上着を着て、食卓へと向かう。

用意してある朝食のメニューが一緒だったことはこの六年間、一度としてない。

父が亡くなつて以来、ずっと彼が作っている食事は母の味だった。「戦争が激化しているようです」

「そう」

わたしの能力が求められている理由はただ一つ。

戦力になるandroイドがほしいからだ。戦うためだけの、壊れるためだけのロボットがほしいのだ。

他の国に、そのような技術は存在しない。

操作をする、または指示を出して初めて成り立つ軍隊ならば存在するが、かつて父が協力して作ったような、指示から実践までをandroidだけで実行する部隊は他にない。

そこまでして、人間を死なせたくないのならば、始めから戦争なんてしなければ良いのに。

「どうして、作られないのですか?」

朝から同じ質問を繰り返されたわたしは、ついに感情の籠が外れ

た。

「アンドロイドのあなたには分からないわ」
作り物の、紛い物のあなたには分からないでしょ？
わたしの考え方なんて。

かつてアンドロイドを作ったことによって死んだ、父を思うわたしの気持ちなんて。

遙が特別だといったその口で、わたしはそう言つた。たつた一人の家族に対して、わたしはそう言つたのだ。

「確かに、私は作られたものですから、人間の気持ちは分かりません」

遙の感情を見て、初めて後悔した。

だけど謝ることもできず、言いつぶやくこともできず、わたしはただ席を立つた。

「お待ちください」

いやだ、とも言えなかつた。ただ泣きたくなつて、でも感情を出すのがイヤで部屋へ入つて鍵を閉めた。

「灯様」

心配そうな遙の声が聞こえる。そのとたん、涙が出た。どうして、こうやって感情を出すこと自体、わたしには難しいのだろうか。「灯様、私が悪かったですから、どうか出てきてください」

どうして、遙にできることがわたしにはできないのだろう。わたしは人間なのに、どうして、できないんだろう。

「遙、あなたは、自分の感情全てが、紛い物だと思う？」

「そうですね、始めは……それがたまらなく嫌でしたが、最近はあまり気にしていません」

「そう……」

作り物の感情を、気にしなくなる？

そんなこと、ありえるはずがないのに。自分が考えることさえ、

全て他人から与えられたものかもしれないという恐怖は、その人を蝕む。

かつてわたしにも経験があった。アンドロイドを何の不思議もなく受け入れたわたしは、変なのではないだろうかと。

まだ父がいたとき、学校へ行つて自分と他人との落差に気がついた。

『アンドロイドは、人間の道具でしょう？』

『なぜ、家族だというの？ 変よ』

『人間じゃないのに……気持ち悪くない？』

わたしが、変だというの？ 遥を大切に思つているわたしが、おかしいのか？

「遙、遙が好きなわたしは、おかしいのかな？」

「どうして、そう思われるのですか？」

「アンドロイドは、人と違うから……アンドロイドに特別な感情をもつ人は変なんだって」

変、だから、父が亡くなつた後わたしは学校を辞めざるを得なかつたのだろう。

「では人間に特別な感情を持つアンドロイドは、おかしいと思いますか？」

「いいえ、あなたが父やわたしを大切に思つてくれたことは事実だから」

そしてその事実が、幾度もわたしを救つてくれたから。

そのときだ。乱暴に家の扉が叩かれた。

「こちらは帝国陸軍だ。貴殿がこの家の住人か？」

「いえ、私はただの手伝いです」

彼がアンドロイドだと名乗らない理由は一つ。彼らはわたしたちの味方ではない。

部屋の鍵を開け、玄関に向かうと屈強な男が一人、立っていた。

「何のようですか？」

「貴殿が……相馬博士の跡継ぎか？」

「わたしが、相馬灯です」

そう言うと、その男は不愉快そうに眉を顰めた。まるで騙されているというように。

「私が聞いていた話では、博士の跡継ぎは博士を超える神童だとか」「わたしは父のようなアンドロイドは作りません」

きつぱりと断ると、男は笑った。

「作る、作らないの問題ではない。貴殿がここに住む以上、貴殿は帝国に属する人間だ」

だからどうしたというのだ。

「貴殿は、帝国に貢献できる人材。これは依頼ではない。国民の義務である」

いらり、と感情が波立つた。遙はそれが分かるように、わたしの手を握る。

「お断りいたします。わたしは父のよくな過ちを起こしません」

父は戦争に加担したことを酷く悔い、そして帝国の依頼を蹴った。そして……殺された。

「父のよくな殺されようが、何をされようが、戦争に加担するつもりは毛頭もございません。お引取り下さ」

なぜそれさえも許されないのだ。

男は笑って、今度は遙の腕を掴んだ。

「ならばこの男をもらつていきましょ」

私が分からないとでも思つたのか？ 相馬博士は一番出来のいい

『紛いモノ』を跡継ぎの人間に残したのは、有名な話だろう？

「ばらばらに分解すれば、少しは技術者の勉強になるでしょうから」

「あなた！ 何てことを……」

あまりの恐ろしさに、震えた。

遙をバラバラにする？ わたしでさえ作れない遙を、治せる人間が父以外にいるとは思えない。

「この細腕に、どんな力があるのかとても不思議ですね」

笑う。

晒う。

……この人は、本当にアンドロイドは機械でしかないと思つてゐる。痛みを感じ、感情を持つものではないというようだ。

「さあ、帝国の軍人の言つことどが聞けないのか！」

こんなのは間違つてゐるのに。

「やめてください。遙を、研究のためにバラバラにするなんて連れて行こうとする男を止めようとする。遙は抵抗しない。抵抗すれば、わたしがどうにかされるとでも思つていいのだろうか。」「ほう」

男は笑つた。

「アンドロイド作りのお嬢さんは、アンドロイドに恋でもしていけるかな？」

あざ笑つよくな声に、体が震えた。図星……だつたからだらうか。あまりの恥ずかしさに顔も上げられなかつた。

こんな男に晒われているといつ事實に泣きたくなつた。

「おやあ、図星ですか」

おかしそうに晒う。

「やめてください」

遙の言葉を聞いて、今度こそ男は大きな笑い声を聞いた。

「おやまあ、相思相愛か。まあ……人間とアンドロイドだ」

それは、無駄だという意味だらうか。

「遙を放して、お引き取りください。先ほど言つたとおり、協力するつもりはありません」

「お前は……！…… 帝国の人として生活していくくせに協力できないところのか」

殴りかかるうとした男をわたしは見ていた。殴られるはず……ないのだから。

「お引き取りくださいと、主人も申しておりますので」

そう言つて遙は男の腕をひねりあげた。

アンドロイドだからこそ、その細腕に人間以上の力が宿る。

「くつ……」

それは、軍人だからといって逃げられるような生半可な力ではないのだ。

「お分かりいただけますか？ わたしはこの力を理由に他国へ侵入するあなたがたの気持ちが理解できかねます」

お帰りくださいますね？」

確認ではなく、あくまでそれは命令だ。力にものを言わせる、一番嫌いな方法だ。

「お茶を、お淹れいたします」

「お願ひ」

ぐつたりとイスへ体を寄りかからせると、わたしは息を吐いた。我ながら勝手なことをしたもんだ。

軍事力が一番の武器である国に住みながら、軍人を敵に回すとは。「じめん、勝手なことしたわ。早いうちにこの研究所から出なきや」そうしなければ反逆罪か何かで捕まるかもしれない。一度捕まつたら、多分一生わたしは国の研究所で研究して、死んでいくのだろう。

遙を残して。

「遙……。どこか行きたいところがあるのなら、行つてもいいのよ？」

さつき、男に連れていかれれる遙を見たとき思った。

わたしは、遙をここへ縛り付けているのではないだろうか。父と彼の思い出を盾に、ここへ逃がさないように捕まえているのではないかだろうか、と。

「灯様

どうしよう……。

離れていかれるのは辛い。だけど私もいつか死ぬのだ。父のように、母のように。

彼に再び、同じ思いをさせてしまうのだ。

「私は必要ありませんか？」

必要ないと、言つべきなのだろうと思う。そうすれば、遙は自由になれるのだから。

だけど何も言えなくて、話題を変えた。

「遙、あなたはさつき、わたしに、アンドロイドを作るべきだといつたけれど」

あなたは、あんな連中のためにわたしがアンドロイドを作つてもいいのか？

「そうではありません」

ただ、あなたは博士の失敗を恐れ、自分の能力を捨ててしまいそうなのです。

「わたしは、確かに、父と同様、機械に長けている人間の部類でしょうね」

でなければ、十六という年で父の論文を読破し、遙の体を調整したりはできないだろう。

「でも、わたしは……作る人間も、作られる人間も幸せだと思えない」

作った人間は、神の意志を曲げ、理に逆らつた罪を負う。

作られた人間は、作られた存在であると知り、紛い物の感情を負う。

そして作った人間は後悔し、作られた人間は存在を晒す。

「私の幸せは、あなたが決めることではありません。たとえ私が作

られた存在であつたとしても、紛い物の感情であつたとしても、それは関係ありません

私が幸せだというなら、それは本当の幸せなのです。

「たとえ、後で後悔しても」

「遙は、本当に私以上に……」

人間らしいとは言えなかつた。

「行きましょう。わたしの知識が外でどれだけ役に立つか分からなければ、機械関係の仕事はありあまつてゐるでしょう、今の時代」「お供します」

遙が手を差し出しながら、そつと握つた。荷物を準備して、アンドロイドの開発に関係するデーターのコピーは削除しなくては。

「忙しくなるけど……」

時間があつたら……。

「女の子のアンドロイドでも作りましょうか?」

わたしがいなくなつても、あなたのそばにずっといてくれる恋人でも。

「結構です」

「無理しなくていいのに」

あなたが死ぬその瞬間までお供させていただければ、いいのです。

アンドロイドには心がある。紛い物でも、作り物でも、本人が本物であるといえど、それは本物なのだ。

「それはすごい殺し文句だわ」

アンドロイド作りの少女は、生まれて初めて国を出た。

つづりモノ（後書き）

もう少し切り込んで、しっかりと書き込みたいテーマなのですが、死ネタになりそうなのでやめます。

んー、人外×人、は私にとつて書いても書いても納得できないテーマの一つ（幼馴染、も同じ感じ）なのですが、やっぱり難しいですね。

もう少し、切なさだけじゃなく、そこにある喜びみたいなものも書きたいです。

世界を失つ（前書き）

バッジHンドです。お氣をつけて！－ ちょっと不思議な世界観。いつか違う時間軸で書いてみたい雰囲気を、小さい区間で切り取りました。

悲しくも美しく、を目指しましたが、あえなく撃沈。いつか綺麗に雰囲気を切り取れたらいいなあ。

世界を失う

I cannot lose a world for
the ,
but would not lose thee for
or a world .
(by By
ron)

バカらしいと、君は言つだらうか。

そんなのは自己満足だと、苦く眉をひそめるんだろうか。

俺の行動は、正しくないと、君は言つだらうか。

世界を失う

昔、本当に昔、聞いたことがあった。君がどういう役目を負つて
ここに来ているのか、俺はもうそのとき知っていたから。

君は知らないと、思つているんだろうね。自分の役目など、小さ

な神が知つているはずもないと、そう思つていたんだね。

『ねえ、もし、俺と世界とを選ぶとしたら、どっちを選ぶ?』

分かりきつてはいたんだ。君は俺を選ばない。君が自分の役目を、

放棄するはずがない。

『世界を選ぶと言つたら、あなたはどうするの?』

君は、俺のために世界を失うことは出来ない。

世界のために、俺を失うようなことはあっても、その逆はきっと出来ない。

『どうもしないよ。ただ、世界のために死ぬだけだ』

どうして、俺を選ばないくせに、君は悲しそうに笑うんだろうね。世界のために死ぬなんて、真つ平ごめんだと思うのに、何故か口をついて出てきた言葉は重かつた。重くって、喉元に引っかかる。それでも飲み込むことは出来ずに吐き出した。

なんと愚かしい言葉を口走っているのだろうか。

世界の真理は、こんなにも愚かで残酷だ。

『あなたは、どうなの?』

わたしと世界、どちらを選ぶの。

『そりや、頼だらうかなー』

子供っぽいと言われてしまえばそれまでで、世界と人の命など天秤にかけるものでもないのかもしれない。

それでも、世界よりたつた一人の命のほうが重いと思つんだ。

どの命よりも、君の命が尊いと言えば、君はきっと眉をひそめるんだろうね。

たかだか人間の命一つの重さが、そこまで大差あるとは思えない、とでも言つて。まるで神の命なら、尊いことでも言つよつ。

それは違つと、頼にどうやつたら分からせてあげる」とが出来るんだらうか。

どうしたら、君の命は、君たちの命とそつ変わらないと教えることできるだらう。

『君のために、世界を失うことはあるかもしれない。されないって話だから、そんなにびっくりした顔をしないでよ。いやとなつたら、あつさつ世界を取りちゃうかもしれないから。それでも、世界のために君を失うことなんて、きつとないんだらう

ね』

世界のために、君とつないだ手なんて放せないだろうと思つてた。たとえ全世界の人間が、それは正しくないと言つても、間違つていると言つても、自分はその手を放せないと、そう思つていた。自分たちの命一つで、世界が救えるなら安いものだと、君は考へるのかい？

『あなたは、変ね』

『そつかな』

『変よ。世界とわたしの命なんて、天秤にかけるものじゃない』それなのに、君はどうして今頃になつて、世界と俺を天秤にかけたんだろう。

そんなこと、する必要はないのに。

天秤にかけられる価値が、俺にあるわけじゃないのに。

『逃げて』

声が響く。

『早く逃げてっ！』

どうして、君は傷だらけなの？ どうして血にまみれて、一いちらへ走つてくるの？

『世界のために、あなたを失いたくはないっ！－！』

それは俺のセリフで、君のセリフじゃない

『世界のために、俺は死ぬだけだ』

ああ、だから、どうして君はそんな顔をするの？ 最初に言つた

のは君なのに。どこまでも美しい世界を愛するのは、君なのに。

『世界を、失うことになる。君はそれでいいの？』

顔が歪む。そういう顔をして欲しくて、俺はここにいるんじゃない

い。

『それとも、神殺しの罪が、怖くなつた？』

傷つく君を見るのは嫌だ。それでも、俺はもう選択肢を持つてい

ないんだよ。

君は俺を殺すために毎日、毎日、『その日』が来るのを待ち望んでいた。世界のために、『神』を殺すのが、君の役目だと初めから分かっていたよ。

多分、君の瞳を見たあの瞬間から。

『そうじゃ……』

『なら、君は』

君は俺を殺さなくちゃいけない。

だってね。俺が生きるということは、世界を失うということ。その世界には、君も含まれてるんだって、気付いてるかな。言つたはずだよ。世界のために君を失いたくはない。世界はこの場合、俺自身のことなかもしれないね。

俺のために、君を失いたくはない。

君のために、世界おれを失うことには、何の躊躇もない。

『いつ』

いやだ、と彼女の声が遠くなる。もづ、涙でぐしゃぐしゃになつた顔もぼやけていく。

『いやだっ！－！』

どうして？ 美しい世界は、君の愛する世界は、守られるはずだ。何よりも美しいのは、君だといつたら、『変ね』とまた笑つてくれるだろうか？

あの、愛しさと切なさを混ぜ合わせたような、少しだけ悲しそうな笑顔をくれるだろうか。満面の笑みは、いつだつて見たことがないから。

一度くらい、見たいと思つたけれど、俺の存在自体が君の笑顔をなくしているんだよね。

『失いたくないのっ』

でも、世界を失うことには比べたら、たつた一人の神など、天秤にかける価値もないだろう？
安いものだと、思うだろう？

『あなたをつ』

バカらしいと、君は泣くんだね。

そんなの自己満足だと、嗚咽をこらえるんだね。

俺の行動は、正しくないと、君は縋りつくんだね。

紛れるように、名も知らぬその人は消えていった。
名の分からぬ、神は光の粒子となり、その粒子さえ空気に溶けて
消えていった。

『神様は、名前を教えはしないんだよ』
どうして、教えてくれなかつたのか、今少し分かつた気がする。
だって自分は今、その人の名を叫んでは泣けない。

その名を呼んで、縋りつくことは出来ない。

あんなに、人と神は同じだとあなたは言つたのにね。

『何の力もないよ。だって、死と引き換えにしか、世界を守れない』
自分はあのとき、何と言つただろう。

『神様は、死んだらどうなるの?』

ああ、そうだ。

『神様は、死んだら……そうだな。世界になる』
溶け込むんだよ。境目さえ分からないくらい。自分の前の神様と
同じように。世界となり、空気となり、木となり雨となり、雲とな
り、火となる。

世界のありとあらゆるものになつて、世界を巡る。巡つて、人々
を包み込む。

「溶け込んだら……、もう会えない」

世界の崩壊を免れたのは、間違いなくあなたのおかげだよ。たつた一人の、偉大な神のおかげだ。長い間生き続け、消える寸前だつた神。

だけどね。

「わたしが泣いてるのも、あなたのせいだよ」
血のにじむ体を起こした。

彼を守ろうとして、彼を殺すことを決めた『場所』から逃げてきた。自分の役目を放棄するのは、そのまま死と同じだと、幼い頃教えられた『場所』から逃げ出した。

息を吸うのと同じくらい自然に、『神殺しは正当だ』と言い続けているところから逃げ出した。彼と出会いつまで、わたしもそれを疑つたことなどなかつた。

たつた一つの存在で、世界が救われるなら、それはなんと安い代償だろう。たつた一つのもので、幾億の命が救われるのなら、その『たつた一つ』は喜んで消えるべきだ。

そう単純に考えていた、過去の自分が恨めしかつた。

そのたつた一つが、かけがえの一つだと分からなかつたあの頃の自分はなんと幼く、愚かだつたんだろう。

かけがえのない一つが失われる痛みは、こんなにも痛いのに。

これが、当然なの？

今更になつて痛む傷は、きっと大切なものを失つたからだろう。

「本当は……」

本当はね、聞いて。本当はね。

「あなたを、失いたくなかった。世界を失つても、あなたを一人で逝かせたくないかった」

この世界が、どれだけの重さなんか知らない。自分の命を含めた、人の命の重さなんて、知らない。

それでも、あなたの存在の尊さは知つてたの。

どんなにかけがえのない『神』なのか、あなた自身から教わつたの。

「あなたの代わりの神様は、もういるかもしない」

「もうどこかで、次の代の神様は生まれているのだろう。」

そしてまた、死に近づいた神のもとへ、また一人、その神を殺す

役目を負つた人間が訪れるんだろう。

それは無限に繰り返される、ただの『行為』なんだろうけど。

それはこれまで以前に繰り返された、なんでもない『行為』なんだろうけど。

だけど。

「あなたの代わりの、話し相手は『わたし』にはいないんだよ」
幼い頃、あなたと会つてすぐの頃、あなたは聞いたね。

『ねえ、もし、俺と世界とを選ぶとしたら、どっちを選ぶ?』

あのとき、わたしはもう、自分の役目を知っていた。

いずれ彼が、世界のために死ぬべきだと分かっていた。そして彼を、この手で殺すと知っていた。

だからかな。

『世界を選ぶと言つたら、あなたはどうするの?』

そんなことが、言いたかつたわけじゃないと、言い訳が許されるなら言いたかつた。

『どうもしないよ。ただ、世界のために死ぬだけだ』

それが悲しかつたと言つたら、あなたは笑いますか?

『どうして、いなくなるの……』

確かに、わたしたち人間は、世界が続くことを望んではいたけれど。ずっとずっと、この優しく美しい世界が続くことを、望んでいるけれど。

「それでもわたしは」

あなたのいない世界を望んだわけじゃなかつた。

あなたのいない、この世界が守りたかつたわけじゃなかつた。

世界は美しくて、儂くて、でもどこか強い。簡単なことで壊れるくせに、いつもはそんなこと微塵も感じさせない。

「世界に、あなたはいるのかもしれないけど」

もう、あなたとは話せない。

些細なことでも、嬉しそうに教えてくれたあなたはもういない。
わたしの顔を見て『君は本当に世界を表現しているねえ』と笑う
あなたはもういない。この森の中、ときどき見当たらぬあなたを探し歩く時間はもう存在しない。

見つけたとき、『見つかったな』といだずらつ子のように笑うあなたは、もうこの世界のどこにも……いるはずがないんだ。
世界のためになんて死にたくないと言いつつ、いざとなつたらサラッとやつてのけるあなたは、ズルイ。

「どこかで、信じてたのかもしれないね」

もしかしたら、世界もあなたも存在する世界みらいもあるかもしないと。

あなたが死ななくたって、この世界は当たり前のように存在するかもしだれない。

「人は愚かだね」

愚かな人間を、あなたは愛していくけれど。

今日、わたしは世界を失いました。

鮮やかな、美しい世界はもう、わたしの目には映らない。

何の色も映らず、モノクロの世界で笑う人はいない。わたしの頬を撫でる人もおらず、いるのはただ『神殺し』の少女を、神聖視する人たちだけ。

世界のために、幾億の人のために大切な人の手を離したわたしの選択を、『正しかった』と笑う人たちだけ。

ああ、彼なら、『それは本当に正しいの?』と聞いてくれるのに。

彼がいるから、わたしの世界はあんなにも色鮮やかだったんだ。

神様のいない世界は、空虚で色をなくし、ただただ虚しいだけの『存在』。

わたしの一番守りたかった、世界は彼と共に消えた。

ねえ、わたしの選択が正しかったなら、この世界は色鮮やかなはずじゃないの？？

わたしの愛した世界は、美しかったのに。この世界は、もつその美しさを失ってしまった。

あなたの手を離してしまったから、この世界は色を失ったの？

『ねえ、君の選択は、正しかったよ』

風に運ばれた言葉は、空気は確かに彼で、このこないはずの彼を探して田をさまよわせた。

神様は、死んだら世界になる。……あなたは、本当この世界にいますか？

『君の、近くにいるよ。君の愛した世界になってるよ。それのどこのが不満なの？』

前よりもずっと、近くに。

前よりもずっと、深くに。

君の側に、いるのに。君は気付いてないんだね。

「あなたのために、世界を失いたかった」

もう遅いと分かつていて口に出すと、風がふわりと頬を撫でた。

まるでそれが、『分かつているよ』と言っているように聞こえて、また涙を流した。

『俺は、君のために世界を失ったかった』

それだけだよ。

彼の声があまりに優しくて、瞳に世界を映した。この世界が彼ならば、色鮮やかに瞳に映るはずなのに。この世界は、あまりに空虚すぎた。

そなたのためにたとえ世界を失うことがあつても、
世界のためにそなたを失いたくない。

(by バイロ

ン)

世界を失つ（後書き）

変な出来です。すみません。とりあえず、バイロンの言葉を使いましたかっただけです。

うーん、何と言つかこう。うう痛々しい悲恋が大好物なんです。

voice（前書き）

声フェチなのです。わたしが。
ときどき電車の車掌さんの声に惚れることがあります。ちょっと
高めも、低く落ち着いた声も、甘い声も好きです。

『本日の放送は、2・1 浅野 恭がお送りしました』
BGMと共に流れる声。深くて、澄んでいて、それでいて……少しだけ甘い声。

決して幼い声じゃない。むしろ大人びた声だ。私は目を瞑つて、その声を聞いていた。

「おい……」

そうそう、こうこう少し呆れたような声も色っぽくて好きなのよね、あたし。

「おい……」

えっ、話しかけられてるのって……。

「御園……」

「はい」

名前を呼ばれて、よつやく彼が話しかけていたのがあたしだと知つた。

「何でしょうか。浅野先輩」

彼、浅野 恭先輩はあたしより一つ上の学年の放送部員。そしてあたしも、この放送部の一員です。

まだまだ一人で、なんてさせてもらえないけれど、それでも何だかんだ言いつつ楽しい部活動を送っています。

「おつ前、寝てたのか……」

怒りを押し殺したような先輩の声を聞き、慌てて弁明する。

「そ、そんなことないです！ 先輩のすばらしい美声に耳を傾けていただけですよ。

耳だけに神経を集中させるために、目を閉じてただけです。先輩がしゃべってるのに寝るなんて、もつたいない」

そう一気に言つと、先輩は虚を突かれたような顔をした。何でそんな顔をするんだろう。

「分かつたから、そういうことを言つた。恥ずかしいから」「ええ、事実なのに」

そもそもあたしが放送部に入ったのも、この先輩の声に惚れたからだ。もう、初めて聞いた瞬間、しばらくの間何も手につかなかつた。

そのくらい衝撃を受ける声だった。そして、そんな声を出す人に会つてみたいと思つた。

「この声の、どこがいいんだか」

「深くて、凛と澄んでいて、でも決して高い声じゃないんですね。むしろ、低くて落ち着いてて高校生にはない声です。

それでも、若々しいハリのある声で、それで時々甘くなる声なんですよ！」

もう、本当に素敵なんですって……！」の声で告白とか、先輩……！断られたことないでしょ？！――この声に惚れない人がいたら見てみたい。

もう、大好きです。愛します……！」

長々とそういう言つあたしを、先輩は呆れたように見つめた後、また話しうそと口を開いたあたしの口をふさいだ。

色っぽい展開を期待した方々、残念ながらあたしの口をふさいでくれたのは、今はまつてるハチミツメロンパンなのです。このどろりとした食感が何とも言えず。

「それ食つて、黙つてろ」

返事の代わりに一つ、頷き返した。

「あんな、一つ言つとくけど、これはアイツに頼まれたからなんだからな」

「ひつてまふよお」（知つてますよ）

「だから、ここは正式な部員じゃないんだ」

「わかつけまふ」（分かつてます）

パンを咥えたままだけれど、何とか会話が成立していた。

いつもあたしが発音練習しているその賜物か、それともただ単に

先輩がよく聞いているだけなのか、分からなければ。

「それでも、時々でも先輩が放送するんなら聞きたいじゃないですか。

それに、先輩の声を毎日聞いてたら、あたしの身体が持ちませんよ。興奮しすぎて。だから、時々でいいんですよ。ありがたみが上がるじゃないですか」

そう言つと、『食うの早いな』という声が返ってきた。『呑えたままの会話つてやりにくいし、行儀悪いでしょ』そう返す。

「行儀、ねえ。それなら、安易に人のどこが好きとか言つちやいけないとか習わなかつたか？ 社交辞令にも程がある」

「いえ、全く。どつちかつて言つと、積極的に伝えちゃいなさい、というのが我が家の方針ですよ」

そう言い返す。すると、先輩はもう何も言わず、だけど怒りせちやつたのかな？ と思っているあたしの方を向いて笑つた。

「もう昼休み終わるぞ。戻んなくていいのか？」

小さくあたしのことを見にかけるその声も、あたしことつては甘い。

「先輩つて、そのうちその声で、あたしを殺す気ですよね……」

そう言つて、あたしは放送室の扉を開いた。

「でね、でね。今日の先輩の声は、とっても素敵だったの」

「ハイハイ。ただ、浅野先輩がよくそんな言葉貰つて我慢してたのね？ 絶対すぐに立ち去ると思ったのに」

そう言つるのは同じ放送部員である由香だ。ただし彼女は、中学生時代から放送部員をやっており、大会などにも出たことのあるベテランなんだ。

由下あたしの師匠として、毎日練習に付き合ってくれている。

「大体、先輩の声ってそんなにいいの？ 確かに落ち着いた印象はあるけど、あんたが絶賛するよつには聞こえないけど？」

「こいつは何にも分かつてないな。あの声の良さが分からないなんて、声で勝負する放送部員としてどうなんだろ。」

「いいよ。あの声大好き。もつこのひつかあの声で殺されるかも」「何で？」

「何で、ですと？ そんなこと、はっきりとは分からぬけれど。『え？ 興奮のしずき……？ 呼吸困難。心臓の爆発。えっと、頓死』

「何。それ」

「と、とにかくすつゝく心臓に悪い声だよ」

もちろん、いい意味でだけど。

「何か、心臓驚撃を受けた感じかな。バクバクして、心臓が痛いくらいこに鳴るの。肺とかを圧迫して、息が、できなくなる」

そう言つと彼女はにやりと笑つた。

「恋だねえ」

「ち、違うよ！… 声に恋してるの… そんな、にやけられるような意味の言じやないよ」

「ほお、『声』に、恋してる、ねえ？」

突然背中から声が聞こえた。普段聞きたくてたまらなくなる声の持ち主が、後ろにいる。

「せ、先ぱ」

ぐるりと振り向き、こいつと笑つた。笑うよつには努めたつもりだが、内心冷や冷やしている。

だつて、ほら。気持ちいいもんじゃないでしょう？ 声、に恋してるとか。

「こんにちは。呼んでくれたらよかつたの」。ひょいと、びっくりしゃいました

きちんと笑えていいだらうか？ ちゃんと、笑顔になつていいだらうか。顔は……引きつってないだらうか。声は。

「お前は、声、声、声。声しか、興味ないんだな。人を、見てないんじやないか？」

少しだけ怒った声。あたしは、声だけにしか興味がない？

「ううん。そうじやないんですよ。先輩。ただ他のところより、重きを置いているだけです。

顔よりも、頭の出来よりも、運動神経よりも、って感じ」「でも、でもね？」

「でも、あたし」

言葉を続けることなく、たんつと、机に手を突いて席を立つた。

「それでも、先輩がそう言つんなら。あたしは何より声が大切と言つことですよね？まあ、でも、それでいいか

「お前っ」

怒鳴る直前の声も素敵。あ～。怒られてんのに何考えてんだろう。あたし。

「だつて、先輩の『声』、本当に素敵ですもん」

それだけ言い残して、部屋を出た。怒られるの覚悟で、嫌われるの覚悟で。

自分がなぜ、あんなことを言つたのか分からなかつた。

「浅野先輩」

隣の後輩が一ニヤニニヤとこちらに笑いかけてくる。

「随分、『声』が好かれていることを怒つてるみたいですね？」

嬉しそうに、顔を近づける。先輩をからかうなんていい性格をしている。それだから小さく仕返しをしてみた。

「まあ、放送部の部長に恋をして、この高校まで追いかけてきたお前には負けるけどな」

その途端、後輩の顔が赤く染まつた。

大会に出る常連とか、一年目にして放送部のエースとか言われている彼女が放送部に懸けている情熱は、そのまま恋の情熱だつたりするにはじけだけの話。

「べ、別に、あの人そのためだけにここに来たんじゃないですもん。ここに放送部がレベル高かつたから。

だから、別に、部長は関係ないですもん」

ふん、と横を向いた。この部の部長である友人も、満更ではなさうなので、面白いところではあるが。

「どーして、好きな子に好きって言われて怒るんですか？」『声』だけだからですか？」「

う、と黙ると『図星だ』と面白そうに言つてきた。こいつ、分かつて言つてるから余計たちが悪い。

「いいじゃないですか。私なんて、部長に『お前の声は低すぎる』って一刀両断ですよ」

「好きなやつに『低すぎる』って言われるよつましだって？」

『好きなやつ』を強調すると自分の失態に気がついたようだ。あと口を押されてこぢらを見た。

「別に、一般論を語つたままでです。褒められるほうがいいですよ。絶対」

そう言つて、後輩は笑つた。

「どうしよう」「

嫌われたかもしれない。いや、めんどくさがられているのは分かつていたんだけど、嫌われてはいないうだから安心しすぎていた。

一人、教室で反省中。一年生の教室は、とても静か。

「え、どうしよう。口利いてもらえないとか？」

それはさすがに、嫌だ。一日でも耐えられない。いい声は、やつ

ぱり毎日聞かたいたいし、放送じゃなくつて、恒と向かってしゃべりたい。

「放送だけじゃ足りないの?」

「何が?」

「先輩の声」

そこまで答えて気がつく。どーして一人でいるのに、あたしは他人と会話してるんでしょうーか。

「お前、本当にどこまでも、声なのな」

「せ」

先輩、といつも声を出でこなかつた。

「違うんです。声が一番好きなだけであつて、全部好きなんです。

先輩のこと。

まじめだったり、責任感強かったり、優しかったり。そんなところも全部含めて好きなんです！」

自分で、自分が何を言つてているのか分からなかつた。

「さつきのは、成り行きというか、先輩が意地が悪かつたから拗ねてみただけというか。とにかくさつきのは間違いなんです！」

先輩の言つことが、あまりにもあたしの気持ちを無視していたから。そんなふうにしか、思われていないと知つてショックだつたから。

声だけしか、興味がないなんて、そんなふうに思つてほしくなかつた。

「いつも言つてたのに。……あたし、声しか褒めてないなんてこと、ありませんよ」

そうだ、いつもいつも、好きだとは口に出してきていた。でも、それは声だけじゃなかつたはず。

なのに。

「なのに先輩があんなこと言つかる」

ああ、泣きそうだ。情けない。こんなことへりこで、泣くなんて。

泣き落としだけは、使いたくなかったのに。

先輩、そういうのに弱そうだから、余計。

「満足したか？ それだけ言って」

「言い足りませんけど、これ以上言いつて、本当に嫌われそなんでもいいです」

「悪かつたって。……泣かれるのは、苦手だから」

ほら見たことか。泣いた瞬間、下手にでて。

「先輩、あたし、本当に好きなんですってば。声も、何もかも」
どれだけ、声を大にしても、あなたには伝わりませんか？

「いや、分かったから」

声が変で、少しだけ顔を上げると田字があつた。真っ赤な顔をした、

先輩の顔。

「照れてるんですか？」

泣きそうなことも忘れて問うと、ふいっと顔を背けられた。

「え、本当に照れてるんですか？ どうして？ 壊められるのに、
そんなに慣れてないんですか？」

高校生にもなつて、褒められてここまで赤くなるとか、逆に貴重
じやないだろうかと思つてくる。

「ねえ、せんぱ」

言いかけたところで、口をふさがれる。色っぽい展開を考えた方、
今回は手です。……微妙な表現の仕方ですみません。

「俺、お前の声が好きなんだけど」

褒められて、ここまで恥ずかしかったことはない。……顔が赤くなつて、多分、今見ることができる顔じやない気がする。

「声を褒められるのは、初めてです」

先輩を見つけたとき、とつさに立つていたのに、足から力が抜け
た。

「それ、告白と受け取つていいですか？ ついて、もうそういうこと
にしますけどね！」

からかい半分、それから、複雑な面持ちを乗せつづ聞いてきた。

「先輩の声で痴狂されて、断れる女の子がいると思こますか？」
それがきっと、あたしの答え。

「声だけじゃないですからね！ 全部……す、好きですかうね……」
まだ言い募るつとする口は、今度こそ唇でふさがれた。

多分好きになつた人のことは、どこだつて、愛しい。
その少し意地つ張りなところも、ちょっと冷たいところまで。
それが、恋の正体。

voice（後書き）

いい声に出逢いたいなあ、なんて思つ、今日この頃。これを書いたときも、確かにそんなことを思つてました。

音（前書き）

『voice』の続き。

ま、読んでなくても先輩×後輩でいいんですけど。短め。

「先輩」

ふわりと空気が動いた。扉を開けた所為か、はたまた人間が入ってきた所為か、一人でいた部屋の空気が僅かに揺れた。

「御園……」

お前どこ行つてたんだ、とか、部長はどうした、とか言いたいことはあつたんだけど。

「一緒に帰りましょ」

もう部長も由香も帰りましたよ、と明るく言わると何も言えなくなつた。

「アナウンスの予定表は?」

来週ある文化祭で、アナウンスするのはこの放送部の役割。そしてそのローテーションを決めるのは今日だつたはずなのに。

「え? 部長がもう出してましたよ? 部長と由香、先輩とあたし「知らなかつたんですか? 部長と一緒にクラスなのに? そ

う言われている気がして、むつとする。もとよりあいつが俺に連絡をよこすようなことは思つていたが。

ここまで自分の都合を無視されるとかえつて腹が立つ。

「他の人はまた明日だそうです。とりあえず決まったのはこの二組。一日目の十時から十一時までです」

「何流します?」と間の抜けたような声が聞こえてきた。

やわらかくて、いかにも女の子、というような声を出す。普段の声はもっと涼やかな声なのに、と小さく思った。

「さあ。適当でいいだろ」

「ど、先輩が詰つだるうと思つてあたしは作戦を考えましたとさ」
口調が少しおかしいが、そんなことを突つ込むもなく小さな音楽プレイヤーを差し出された。

「百」「十分間、何流しましようか。一十曲ぐらい用意したらいいで

すかね。途中、呼びかけも入るし

とりあえず、人気の曲入れてきました、と差し出された。

「俺が決めるもんじゃないだろ？ お前も決めるし」

「そうか……」

じつと御園は音楽プレイヤーを見つめた。そしてこいつらを見てにこりと笑う。

「先輩が聞いてるのを、そのまま歌っちゃえばあたしも聞けますよなあかつ先輩の美声も聞けて一石二鳥。なんて賢いの、あたし！」

と、自画自賛しているが、ありがたくも何ともない。

「一緒に聞けばいいだろ？」

深く考えずそのまま口に出すと、御園は一瞬だけ大きく目を見開いたあと『そうですね』と照れるように笑った。

「じゃあ、イヤfon片っぽずつ」

さつさと俺の右隣に座り、片一方だけを差し出す。自分は左の、そして俺には右の方を差し出す。

「左の方がいいですか？」

イタズラ気に呟いた。

「届かなくなるだろ。それだと。お前が左、俺が右、じゃなきゃ」「いいえ、届きますよ」

二口二口と何が楽しいのか笑う。

「引っ越しば、ね」

どうします？ と言つ御園を無視してイヤfonを取つた。もちろん、右耳用の方を。

「残念」

「何がだ」

そう会話を交わして、音楽を流し始めた。流れるのは有名なアーティストのバラード。

そして次々かかるのも全てが恋に関するものだった。

静かに、流れる曲はあたしの心そのもの。
楽しいのも、苦しいのも、切ないのも、全て。
あたしの心届いてますか？^{おと}

音（後書き）

……短い。

文化祭に流れる曲が好きだったりします。どうして決めてるん
だろう。

名もなき本屋（前書き）

拍手で載せたやつ。

オムニバス形式にしようと思つて、1話書いて終わりました。まだネタはいくつかあるんで、書いたら連載モノにしようと画策中。

名もなき本屋

いらっしゃいませ。ここは名もない本屋です。
あなたにぴったりな本を『』紹介させていただきます。

ここへ来たということは、何か大切なものを失くしてしまわれましたか？

それとも初めから持つてなかつたのですか？

ここには不思議な本屋です。幸せな方は『』来店いただけないかもしません。

しかしどこの誰でも持つていそうな、何気ない悩みを一つでも持つているのなら。

きっとここへ招かれるでしょう。

一人の店員が、温かいお茶を用意してあなたの『』来店をお待ちしております。

ぜひ一度、足をお運びください。

その店に入つたのはほんの偶然。

いつも通っているはずの町並みに、異変を見つけたのは定時上がりの帰り道。

珍しく早く帰れて少しだけ浮かれていた帰り道。

いつもは田に入らない店が見えた。

古びたといつほどでもない、しかし年季の入つていそうな外観。本屋の看板らしく『あなたにぴったりの本をお探しします』とある木の板が下げられている。

そんなに大きくななければ、どことなく雰囲気が氣になつた。

いつもなら足を踏み入れない。だけどどうしてだろう、吸い寄せられるようにその店に入った。

日の長くなつたせいか、この時間でも十分明るい町並みが遠くなつた気がした。

扉を押せば、カラソと涼しげなベルが鳴つた。

「いらっしゃいませ」

明るい少女の声が聞こえた。紺色のエプロンをし、少し長めの髪は後ろで纏めている。可愛いといつよりも、美人だと思つた。もちろん、私なんか足元にも及ばない。

野暮つたい、だけど仕事のしやすいひつめ髪。フレームのひとつい、レンズも厚いまのメガネ。化粧つ氣のない顔。しかも最近忙しいから肌なんかボロボロもいいところ。

氣後れしてしまつて、一瞬後ろへ下がつた。しかしその後ろからも声がかかる。

「いらっしゃいませ。どんな本をお探しですか？」

振り向くともう一人、店員らしい人がいた。こちらも紺色のエプロンを身に着けている。書店員、といつよりも、図書館司書といったほうがいい氣がする雰囲気の人。

穏やかそうな青年だった。多分、年は私と同じくらい……二十後半だろう。人の良さそうな、人畜無害そうな顔立ちだった。柔らか

な瞳で、顔立ちは地味……失礼だけど。

でも整つていなくて、この店員さんは綺麗な人が多いと思つた。

「えっと、どのよつな」

「すみません、気になつて入つただけで」

なかなか返事をしない私に戸惑つたのか、男の店員さんは質問をします。それを遮るように私は言葉を紡いだ。本なんて、探していない。

「いいえ、いいんですよ。本を探しに来るのが目的の人なんて、ほんぢいませんから」

いつの間にか少女はお盆を持っていて、その上のカッップが湯気を立てていた。そしてこちらへどうぞ、と言い、店の奥まで入つていく。

「店長。お客様、案内してください」

少女の言葉に男性店員　店長さんらしい　は私に向かつて笑いかけた。笑顔が素敵な人だと思つ。何となく、警戒心を抱かせない人だ。

「お客様、こちらへどうぞ」

少しだけふざけるように笑い、次いで小さく片目を瞑る。この人、かなり茶目つ氣があるのかも知れない。

店の奥は先程の入り口と変わらず、落ち着いた内装だった。店員さんの性格が出ているのだろう、まるで我が家のように落ち着いてしまう。

小さなテーブルに案内され席に着くと、すつと茶が差し出された。ほんのりと黄色の……見たこともないけれどたぶんお茶。紅茶でないことは確かだけど、日本茶でもなさそうだ。

匂いは少しだけ、りんごに似ていると思つた。きつい甘い匂いでなく、仄かに香るだけ。

「カモミールティーです」

につくりと、少女が笑つた。聞くところによれば、大学生でバイ

トさんなんだそうだ。口に含めばハーブティーとは思えなかつた。
もつときついのを想像していたし、あまり好きなものではないはずだから。それでもこれは呑みやすく、『おいしい』と素直に言えば、笑顔を返される。

「ここは、あなたにあつた本をお選びするところです」

店長さんが笑つて言つ。おいしそうにカップを傾け、こちらを見て、また笑う。

「かと言つて、無理矢理買つてもうおうとかではありません。買うも買わないもあなた次第。お気に召していただければ、僕たちも嬉しい」ということです」

席を立ち、さらに奥を示した。

「あなたの大切なもの、いいえ、あなたが大切だと思うものをお探ししましょう」

大切なものの……？

「あなたが失くした、あるいは初めから手に入れてないものをお探ししましょう」

私が、失くした？

本がきれいに並んでいる。それでも普通の本屋などとは雰囲気が違つた。まずベストセラーとかは一つもない。最近人気の携帯小説なるものもなければ、漫画もない。

あるのは古びた本と、いくつかの見知った作家の本だけ。あとは異国の本が多かつた。絵本も多いと思う。だけどあまり見たことがないものばかり。

店長さんはその中をすべるよつに歩き、一つ、また一つと本を抜き取つていく。流れのよつな所作を田で追うと、隣にいた少女がため息をついた。

「店長……、久しぶりだから張り切つてゐる」

「え？」

「久しぶりなんですよ。この店にお客様が訪れる」と

あまりに 人が忙しすぎるから、人は多分一番大切なことを失

つたことにさえ気付かない。

「私も、このお店、見たことなかつたです」

自分はそこまで余裕のない生活をしていたのか。

「いえ、このお店、多分普通に生活している人たちの目に映りにくいんだと思います」

わたしも客としてこの店を訪れるまで、この前を何度も通つたはずなのに全く気がついてませんでしたから。

「あなたもお客様だったんですね」

「そうなんですね」

大切なものを、失つてしまつたときにはこへ来たんです。

「まあ、失くしたものは戻らなかつたんですけど、代わりになるものは手に入れられました」

「あなたは、どうでしょうね。」

少女の言葉が嫌に耳について、私は失くしたものについて考えた。「これくらいですかね」

どさりと目の前に積まれたのは十冊程度の、様々な大きさの本だつた。正直、これに全部に目を通すのは嫌なんだけだ。

「大丈夫。全部読むわけじゃないですから」

しかし店長さんはそんな私の気持ちが分かつたように笑つた。穏やかだけど、油断できない人だと思った。この人は鋭い人だ。

「ただ、少し眺めてみるのがいいかもしません」

もしかしたら意外に早く見つかるかもしれませんよ。そう言って、二人は私から離れた。

「ごゆっくり、お選びください」

一人が離れて、やがて周囲から音が消えた。たつた一人になつて、とりあえず本を眺めてみる。上から順番に、一つずつ手にとつて見る。

特別何かを感じるわけもなく、どちらに目を通そうか迷つているときだつた。一つの絵本に目が留まり、そしてそこから離れなくなつた。

『見つかるかもしだせよ』

その言葉の意味が分かった気がした。
かわいらしい表紙のその絵本は、ありきたりといえばありきたりで。だけど女の子なら一度は憧れた物語だった。

継母にいじめられる少女が、魔法使いの力を借りて美しく変身する。王子とすばらしい時を過ごすが、その魔法の期限は午前零時だった。慌てて帰ろうとする少女を王子は止めるが、少女は行ってしまう。残ったのは一つ。

ガラスの靴だった。

その靴を手がかりに、王子は少女を探し出す。
たつた一人の少女へ出会うため、町中を尋ねる。
そして少女に出会って、めでたくハッピーエンド。

私も幼いころ憧れたものだつた。こんな人に出会いたいと、何度も思つたことだろう。だけど、結局、こんなこと起らないと知つてしまつた。

最近まで、信じていたと言つたら笑われるだろうか。いつかは、誰かやって来て、そして幸せになれる。そう思つていたことを、誰かに知られたら。

『無理に決まつてるでしょ』

『あなたの容姿で、誰がそんなことすんのよ』
そのときは、笑つて済ませることができた。

『だよねー。ありえない』

そう友人に合わせることだって、できた。だけど、家に帰つてから落ち込んでた自分がいた。

『そりが、いないのか』
と当たり前のことを確認した。

私が失くしたもの。
多分ソレは……。

恋への夢だらう。

小さい頃から憧れていで、ずっと信じていた。
だけどそんなのは、ただの憧れでしかなくて、可哀想な私はずつ
と信じていた夢に裏切られた。

「失くしたもの、見つけた」

失くしたことにもえ、気がつかなかつたものを見つけた。

「見つかりましたか？」

「ええ。おかげさまで」

少しだけ、努力してみるのがいいかもしない。もう少しだけ、
待つてみるのもいいかもしない。

「これ、買います」

「ありがとうございます」

私はその本をぎゅっと握り、そして笑つた。ひつめがみを流し
て、メガネも外して。そして、帰つたら肌の手入れでもしようかな
と思いながら。

「また、来てもいいですか？」

「ぜひ、お越しください」

「こちらは名もない本屋です。

あなたにぴったりの本をお探ししましょう。

あなたが失くした、もしかしたら初めから持つていらないものを一緒に探しします。

失くしたことさえ、手に入らないという」とさえ、気付かないモノをお探しします。

ですからどうぞ、ご遠慮なく、見つけたらすぐさま。

お越しくださいな。

「店長」

「うん？」

「わたしも結構、憧れてたんですけど」

「そう？ でも残念だね。僕が迎えに行く前に、君がここへ来たから」

「もし、ここへ来てなかつたら、店長迎えに来てくれてました？」

「それは分からぬ」

抱きしめる腕も、何もかも、ここへ来るまでは知らないことばかりだった。

「君はここへ来て、失くしたもの代わりに何を手に入れたの？」

「聞いてたんですか？！」

聞いていたはずもない発言を聞かれていて、びっくりと肩をそびやかせた。

「家族の代わりに……、恋人を手に入れました」

素直にそう言つと、その人は優しく笑つた。見とれるほど、優しい笑顔でこちらもつい笑い返してしまつ。

「あの人も、出会えるといいですね」

「そうだね。美人さんだったからね」

まあ、事実は事実だから認めるけど、どちらとしてはあまり面白くない。

「ああいうのが好きですか？」

「うーん、あんまり好みは分からしないな」

君が好きってだけだよ。

そういう彼は、本当にきれいに笑った。

名もなき本屋（後書き）

一度でいいから書いてみたい、オムニバス形式小説。
あといつこう雰囲気が好きなんです。

桜と春の季息（前書き）

ブログに載せてない書き下ろし。季節感が全くなくつてしまません。これを書いた当初はまだ寒かつたんです。確かに。ファンタジーっぽいので、苦手な方は注意。季節の節度のお話です。

ひらひら舞づ。くぬぐれ落ちる。そしてまた……ひらひら舞づ。
それはまるで、彼女の吐息のよつてせんべ、夢い。

ふわふわと溶ける。しんしんと積もる。そしてまた……ふわふわ
溶ける。

それはまるで、彼の吐息のように冷たく、淡い。

「冬将軍？ 今年は少し、一月を留まる期間が長いんじゃなくって
？」

「いいえ、いつも通りですよ。春の姫」
真っ黒なマントを羽織り、いかにも温かそうな格好をしている男
は桃色の着物を着た少女の前にふわりと舞い降りた。その男とは対
称的に、少女は少し寒そうな格好をしてくる。

彼女は美しいが、薄そうな着物を着ているだけだったが、少女は
冷たい風が吹いている中、震えてもいいない。まるで寒さを感じてい
ないようだった。

冬将軍が芝居がかつたように手を差し出すと、少女は面白そうに
笑いつつ、その手をとった。

その真っ白い手袋に覆われた手を見て、少しだけ不快そうに眉を
ひそめると、冬将軍に向かって唇を尖らせて見せる。

「まあ、女性の手をとるときは手袋を外しなさいと教わらなかつた
のかしら？」

「これは失礼しました」

少女の言い方が気に入ったのか、クスクスと冬将軍は笑い、芝居めいた動作で手袋を取る。

そして少女の白い手をとると、恭しく口付けた。少女はそれを少し不満そうに見て、『だけで何も言わず、口付けられた右手を胸の前に引き寄せた。

「どうしましたか、春の姫？」

「いいえ、将軍。何でもありません。あなたには芝居がかつた動作がよくお似合いだということを再確認しただけですもの」

皮肉とも取れるその言葉に、冬将軍は小さく目を見開いた後、本当に楽しそうに笑った。

「おやおや、しばらく会わない間に皮肉を覚えられましたか？」

「たかが数ヶ月でしょう？ 私たちにとっては瞬き程度の時間ですわ」

ふいつと少女は横を向き、冬将軍から視線を外す。明るい茶色の、長い髪の毛がふわりと揺れた。

よくよく見ると、その少女の容姿はとても桜に似ている。茶色の柔らかそうな髪と瞳に、桃色の着物。ほんのりと桃色の白い肌。そしてその顔を常に彩っているのは柔らかな微笑だつたが、今度ばかりはそもそも言つていられないのか少しだけ眉をひそめていた。

「何を怒つていらっしゃるのですか？ 春の姫」

「何も怒つていませんわ。将軍」

冬将軍の言葉にそう返すと、『挨拶が終わつたのなら、早く帰ればよろしいのに』と後ろを向いた。そして着物の裾を翻しながら歩いて行く。

さくらさくらと冷たく、真っ白な雪の上を少女が歩けばたちまちに解け、そこから緑色の植物たちが待ちわびていたかのように芽を出した。

そして少女はある一本の木の前に立ち、その木の幹に手を当てた。

「お帰りくださいな。将軍。私は春の装いで忙しいのです」

とつて付けたかのような、いい訳めいたその言葉を聞き、冬将軍

は困つたとでも言つようになにか首を振つた。

「春の姫？ 私にはあなたが何を怒つてゐるのか見当もつきません。何を怒つてゐるのか、お教え願えませんか？」

「怒つていななのに、その理由を問われるの？ 将軍は無駄なことを嫌うお方ではなかつたかしら？」

無駄がお嫌いなら、次の仕事に移られては？ あなたがここにいると春が芽吹いてくれないの。

少女はそれだけ言つと、木の幹に口付けた。まるでいとおしむかのようなその動作に冬将軍は目を細める。

まるで心底愛しいものを見ているかのように笑うが、その笑みにわずかに嫉妬の色が混じつた。それを見分ける目は少女になく、ただその目を眇めるだけだ。

「さあ、目覚めて」

少女の吐息が白く、白く幹にかけられる。すると木はつやを出し始め、一段と力強く脈動し始める。その心音を聞くように少女は幹に抱きついた。

「お帰り、くださらぬの？ この子が、嫌がつてゐるのですけど」この木は桜。美しく、儂い春の象徴。冬を耐え忍ぶこともできるが、長い間冷気にさらされ続けければ弱つてしまひ。

「なぜこんなに早く、目覚めさせるのですか？ いつもならもう一週間先のはずですよ？」

そしてその間、私はここにとどまれる。

熱っぽくさわやか冬将軍に、少女は一瞥をくれてやる。

「あなたが、早く、次の場所へ冬を届けたいのかと思いまして」

ふん、と荒々しく横を向いた後、桜の幹から手を離し、両手を天に向かつて広げた。

ふう、と長く息を吐くと、凍てつくような寒さが緩和した。ビューッと風は瞬く間に柔らかくなり、少女のほほを叩いた。

どの空氣も、彼女の味方だと言つよつに彼女を囲む。

「咲け」

強い調子で言えば、足元から無数の芽が少女を包み込むよつに伸び始めた。

「お帰りになりたいのでしょうか？ 帰して差し上げます」
伸びるはじめた芽は通常では考えられないくらい早く、そして長く伸びる。

その芽が冬将軍に向かつて突進していく。冬将軍の両手両足をいくつもの芽が捕らえる。そこからまた新しい芽が出て黄色い花を咲かせた。

可愛らしいその花が、今はその色を潜め彼を害をひとつ締め付けを強くした。

「路、ですわ。 将軍」

その声には、『帰らないのならば、無理やりにでも帰らせいやる』とこうの意思が含まれていることを冬将軍は知っている。

「離してくださいらないのですか？」

それは『離さない』ことが分かつていて聞いている。それが少女にも分かり、苛立たせた。

「離しません」

決意のように言い切ると、冬将軍は薄く笑った。少女がそう答えることさえ、知っていたかのような微笑だった。

「ですが私もまだここにいたいのですね」

そう言つと、その言葉がまるで命令だつたかのように、路の芽が凍つた。ピキリと音が響いた後、キラキラと粉々に砕け散つてしまつた。花の一 片さえも残さなかつた。

美しい氷の欠片を見て、少女は悔しげに唇を噛む。

「春の姫、私は少し、あなたのお怒りの原因が分かつたような気がします」

自分の欠片である花が碎かれたせいか、少女はその場へたり込んでいた。氷で切れたのか、右手が赤く染まっている。

白い肌に赤い血はよく映え、その白さを犯すよつに広がつた。

「やりすぎてしましました。すみません」

少女の右手を見て少し眉を顰めた後、手をとり口付けた。ぱっと少女は自分の右手を冬将軍から奪い返し、胸元で握る。そつすれば、まるで彼から逃げられるでも言つよつ。

「さつさと帰ればよろしくでしょ。」

無理やり立ち上がりつとして、失敗して倒れる。それを抱きとめて、冬将軍が言った。

「つかぬ事をお伺いしますが、夏のガキが何か言いました？」

「まあ、そんなふうに言つては可哀想です」

そう言いながらも図星を刺されたらしく、横を向いた。

「何と言つたんですか」

「何でもよろしいでしょ？ 私たちの会話なのですから」

相當に決まりが悪いらしく、頑としてでも話そうとしない。そして自分の足で立てるようになると、すぐさま冬将軍の腕から抜け去つた。

追いかけようと伸ばした冬将軍の手をぴしゃりと叩いて拒絶すると、彼の手の届かぬところまで足早に去つていく。

「もしや、雪の精と関係が？」

ぴくり、と早めていた足を少女が止めた。その震えた肩が、その言葉の真偽をはつきりと伝えている。それが分かっているはずなのに、少女はあえて首を振った。

「雪の精が何だというのです。たとえあなたが雪の精を愛そうと、愛さまいと、私には関係ありません」

血に濡れた腕を一振りすると、春の暖かな風が吹く。それと同時に少女の腕は癒えていった。まるで始めから傷さえなかつたかのようにそのまま有様に、冬将軍は少々残念そうな顔をする。

眉を寄せて、首をかしげ、少女を刺激しないようになつてじつと近づいていく。

「何か？」

「いいえ。ただ、あなたの腕に傷があるつむけ、征服できた気分でいましたので」

随分と勝手な言い分に、少女はむつとしたように眉を寄せた。

それではまるで、自分が彼のものだとでも言つようではないか、と顔に書いてある。その不機嫌そうな顔を見て、冬将軍はまた彼女の腕を取つた。

傷が治つてさえも、その跡に触れぬよつこ。
痛みが消えてさえも、その傷を癒すよつこ。

「春の姫。誤解です。私はこの数週間を楽しみに、各地へ冬の吐息を落としているのですよ？」

そう、冬が次の場所へいくほんの少し前に田覓める彼女と交わす会話が、永遠に続く理の中での楽しみ。

幾千幾万と繰り返される季節の移り変わりと、それを知らせるそれぞれの季節の妖精。彼らは永遠とも言えるときを過ぎしつつ、その刹那を楽しんでいた。

春の暖かさを感じれば、春の姫は高々と春を称えるために歌いだし、

夏の強い日差しを感じれば、夏の王子はあちこちにその暑さを振り散らす。

秋の涼しい風を感じれば、秋の姫が豊穣を願つて、その黄金色の髪を揺らし、

冬の厳しさを感じれば、冬の將軍はその冷たい吐息で雪を降らす。
「冬の精は私の娘でもあります。この吐息から生まれるのですから
ふわっと冬將軍がゆっくりと息を吐いた。

その吐息からきらきらと美しい光を纏つた娘が数人、春の少女の前へ降り立つ。白い髪に、淡い蒼の瞳。それは冬將軍に似通つている容姿で、冷たく美しい姿だつた。

幼げな顔の中に、色香を含み、キャラキャラと無邪気な笑い声を立てる彼女らを見て、少女は不快そうに眉を寄せた。

自分とは全く違うその姿を厭つよう、ふいつと田線を外す。そして右手を口元に近づけ、その手のひらを滑らせるよつて吐息を吐いた。

彼女の暖かな吐息は手のひらへ滑り落ち、彼女らに向かって進んでいく。

とたん、雪の姿を模した少女はすっと解けるようになくなつた。雪が春の息吹を受け、瞬く間に溶けていくようなもので、そこに疑問を差し挟む余地はない。春の準備が進んでいるこの場所は、もう完全に少女の領域なのだから。

「ここはもう、春の領域です。むやみに力を使いにならぬよ!」「これは失礼。なんとしても誤解は解きたかったので」

分かつていただけましたか？と冬将軍は切なそうに顔を曇らせた。澄んだ瞳がまっすぐに少女を映し、たゞがの少女も罪悪感に口ごもる。

一応、彼の娘とも言ひべき精を勝手に消してしまつたのだ。領域の問題があるといえども、感心する行為ではない。

「分かつてあります。……冬の精は、あなたの具現。いわばあなたの身であると」

だから彼がそれらを愛するわけはない。自分の体の一部なのだから。

「では何故不機嫌に？」

「……今年は、冬の始まりが早かつたのですね」

突如として、全く違う話題になり、冬将軍はそうでしょうが、と首を傾げる。いつもどおりに吐息を落とし始めたはずだったのだが、そういうえば秋の姫君にもそんなことを言われた。

「『銀杏が、散つてしまつであろう』と、秋姫にも怒られましたねえ。そういうえば」

「春の季節を届けに行つた土地で、夏の王子が笑つておりました。

『冬将軍は秋姫に会いたくて早めに追いかけてるんじゃない？』と

春の季節を届ける春姫を追いかけるよつて、夏の王子はその跡をなぞる。それと同じように、冬将軍は秋姫を追つ。そして冬将軍を春の姫は追うのだ。そして季節は巡つてゆく。

彼らが彼女らを追いかけ、彼女らは彼らを追いかける。それが長い間変わることのない、理であつて、彼らはそれに疑問さえ持たない。

「あのクソガキが」

「まあ、冬将軍。王子になんて口の聞き方を」

楽しそうな少女の声に、冬将軍も笑みを零し、少女の手を捕まえた。

「ほんの少し、春の領域で冬の眷属の私が留まることをお許しいただけますか?」

「……少し、だけならようしきつてよ? そうね、せめて」

「せめて桜の蕾ができるまで。

「それでは足りない」

「いいえ、十分です。私とあなたは交わらぬ季節。春と冬が一所にいること 자체、おかしなことなんですか?」

巡る季節は触れるように小さな接触を残すだけだ。
決して交わることはない。いつの間にか春が夏になるように、秋が冬になるように。明確な分かれ目はなくとも、彼らには越えてはいけない一線がある。

「私がこんなに季節を急いでいるのは、あなたに会つためなのに?」「秋姫に会いたいだけではなくって?」

「ええ、あなたに一刻も早く会いたいのです。会いたいから、冬を早くして、春を急いだ」

あなたは決して交わらないといいますか、人間はよくこの時期をこういうのですよ。

「三寒四温と」

三日寒い日が続いて、四日暖かくなる。春先に用いられるこの言葉は、今の状況によく合っていた。

「人間にはばれていらじしい。昔から、私があなたと離れがたく思つていることを」

だからせめて、誤魔化せるまではこにこさせてください。

「まあ、冬将軍が聞き分けのない」と

くすくすと笑う少女の手をとり、冬将軍はふわりと息を吐いた。

この息が彼女を凍らせてしまわなうこと思つてつ。

息を吐ぐ。その息が、季節を象徴するものを生み出す。やうじて
彼らはまた、奇跡を届けに行くのだ。

春の姫は桜の花びらを出し、夏の王子は熱を吹き散らす。
秋の姫は銀杏を撒り、冬の将軍は雪を降らす。

ずっと、継やかに、その季節は巡る。

桜と書の吐息（後書き）

ファンタジーだ。久々のファンタジー。
こういつのを書いてみたいんだけどな。

棘（前書き）

やばい、短編もネタが尽きてきた。

わたしが発したのは確かに、相手を傷つけるための言葉で、そしてその言葉は予想以上に相手を傷つけた。

彼を傷つけようと、口に出したその言葉は寸分違わず、それ以上の威力を持つて、彼の心を引き裂いた。その瞬間を、わたしはこの目で見た。

放った瞬間に、後悔をした。口に出した瞬間、分かった。言つてはいけない言葉だった。一番、口に出してはならない言葉だった。

いつもそうだ。

ケンカするときに、『こいついう言葉』をいうのはいつもわたしの方で、傷つけるのはいつもわたし였다。優しい彼が、そんなことをするはずもなく、いつだってそれはわたしの役割だ。

そして傷つくのはいつもあっちだつた。それなのにケンカをしたとき、謝つてくるのはいつだってあっちなのだ。

ただ一言『ごめん』と。まるで自分が悪いかのような顔をして。時々それが、無性に腹が立つ。

君は悪くないんだよ、と言外に言われた気がして嫌になる。

悪いのは、あなたじゃなくわたしだと、はっきり分かつているからだ。

自分は何もしていないのに、ケンカの原因が多少あったにしろ、傷つけたのは間違いなくこっちで、加害者はわたしなのに。

それが腹立たしかつた。何を謝つているのか分からなかつた。だからまた傷つけてしまう。

『何に』謝つているの？ ケンカの原因？ それなら謝つてもらう必要なんてない。謝ればわたしが笑うとでも思つてるの？

傷つけたわたしが、笑うと？

わたしは傷つけた。一番言つてはいけない、一番彼を傷つける言葉を……わたしは吐いた。自分が彼のにふれたいと思つた唇で、その言葉を吐いた。

彼を傷つける言葉を、その唇から吐き出した。なんて、薄汚れた感情の言葉なんだろ?と思つていてのにもかかわらず、彼が一番傷つく方法で、彼が一番傷つく人間から。

その言葉を吐き出すんだ。

イライラして、感情が定まらない、呆気ないほど自分が自分じやなくなる。

「じめん」

「何が……」

声が、冷たかった。泣き出しそうなくらい弱く、しかしそんな自分で律するかのように、必死になつて感情を抑えているような声。

ああ、弱弱しい声。女らしい声。……違う、馬鹿らしくらい弱い声。

「別にわたしは、謝つてほしいんじゃないの」

顔を俯けたまま、表情の分からぬまま、言葉は続く。先程、荒く言葉を紡いだ唇で、小さく言葉を続ける。

「謝らなくちゃいけないのはわたしなのに、謝られると正直イラッとする」

言つてもなお、じぢぢを向ひつとはしなかつた。荒く言葉を吐いた後、傷ついたのは多分彼女だ。

言わされた自分よりもさらに深く、じぢぢが感じる痛みを想像してより深く、彼女は傷ついた。

はつと息を呑んで、そして顔を歪める。自分が言われたかのよう

な表情に、言われた言葉より胸を刺された。

「どうして、いつも謝るの……？」

泣く寸前のような顔が、ケンカするたびに臉裏に浮かび良心を苛むのだ。始めから、ケンカなんかしなければいいのに、と。

「だって、傷つけたのは俺だから」

彼女にそんな顔をさせるのは自分だから。

優しい、本当はとても優しい彼女に、そんな辛い言葉を吐かせてしまつたのは自分自身だから。

「言いたくないような言葉を、言わせてしまったから」

誰も傷つけたくないという彼女を、人を傷つけることに慣れていない彼女を、そうさせたのは自分だ。

「バカだなあ」

そう言つて、彼女は初めてこちらを向いた。苦笑いを含んだ顔で、こちらを見る。泣いていないようで、それだけで少し安心した。

「被害者なのに、何、加害者みたいな顔してるの」

そつと近寄れば、『情けない顔してる』と頬に手を添えられた。そして抱きつかれる。

「ごめんなさい」

いつだつて泣きながら言つセリフを、今日彼女は笑顔で言つた。『ひどいことを言つてごめんなさい。傷つけるつもりで言つたけど、あなたを刺すつもりはなかつたの』

ああ、そうだ。

けんかをするとき、自分も彼女も、相手を多少傷つけるために言葉を発する。

それは苛立ちによるものだつたり、単純な怒りによるものだつたりするけれど。

「俺も、ひどいこと言つたね。『ごめん』

だけど、もしそれを後悔するのなら、謝ればいい。人を傷つけておいて、そんな簡単な問題じゃないんだと言われれば、それまでなんだけど。

「仲直りのキスでもしど〜?」

「しないー」

ひらり、と彼女は腕から逃げて笑う。

「どうせなら、仲直りのトーントしよ?」

にこりと笑う彼女の臉に、キスを一つ落として笑う。

彼女の棘なら、たとえなんだろうと甘い花に変わると願つて。いつかその蜜に触れることを願つて。

電話（前書き）

拍手再掲。『newlywed』という短編連作を5作くらい書いていたのですが、続きを書く機会を逸してしまったので、一個だけあげてみますー。

新婚さんのあれこれが書きたかったのだよ。
短編にふさわしく。めちゃくちゃ短いのはいい愛嬌。

まだ少しなれない明るい行進曲が耳に付く。たたんでいた洗濯物を放り出し、近くにおいてあつた子機をとる。ディスプレイを見る習慣は……まだなかつた。

「ハイ、もしもし」

そこから先が、声にならなかつた。正確には言葉を呑み込んだと言つほうが正しい。とつてに出てきた姓を押し込める。俗に言つ、旧姓を。

「えつと……、清」

いけ、もう少しだ。ここまでいたら、勢いに乗つてしまえ！！！本当に、旧姓、変わつたよね？ 間違いじゃないよね？

「しみ、ず、です！！」

火照つてくる顔も気にせずに、一気に言い切る。もう、電話でたくなくなつてきた。もう、本日二度目です。ちなみに一回目はもつと時間がかかつて、セールスの人々に笑われました。

そんなことを考えていると、向こう側で笑い声が聞こえた。

「あのさあ、千紘。それ、わざとやつてんの？ それとも素？」

笑つてゐる顔まで浮かんできそうで、思わず顔を覆つた。電話の相手は“夫”だつた。この“夫”もなれないものの一つだつたりする。「け、圭介くんの馬鹿……」

言つてくれればいいぢやない。

「いや。分かると思つて」

そう嬉しそうに笑う、圭介くんが恨めしい。

「どうして、嬉しそうなの？ 恥かいたよ」

むつとして言い返せばあつけらかんとした答えが返つてきた。

「千紘が『清水』つていうから」

結婚したんだなあ、っていう実感があつて嬉しかつた。

そう言われて、また赤くなつた。せっかく治まつてきてたのに。
圭介くんはこういう人だ。変なところで照れがないといふか、恥ず
かしがらないといふか。

「またかける」

次こそは、『清水』と並んで乗つてやる。ぐつと拳を握り締めて誓う
わたしだつたが、数時間後帰るコールをしてきた彼に、また旧姓を
名乗りそうになつたのは、また別のお話。

「学習能力ない？」

「そんなことないもんつ！」

「もんつて、可愛いなあ」

「圭介くんの馬鹿あ」

バカップルの会話はしばりへ続く。

電話（後書き）

モルヘンヒュンションをたまには書いてみたい。

現金な（前書き）

のはゞがりなのか。ここの一話ほど短くてすみません。拍手採録が
続きます。だけどそれだけでは寂しいので、加筆修正加えて少しだ
け長くしてみたり。

現金な

しんと静まる部屋に一人。ふわりと広がる煙が渦巻く。

静かな沈黙に、耐えられなくなつたのは俺か、きみか。多分、心の底から氣まずいのはこっちなのだろうが、口を開いたのは彼女だつた。どこかけだるげな声がこちらに届いた。

「ねえ、ねえ」

机の上で頬杖をつき、こちらを見つめる。視線だけで、続きを促すとあつけないほど簡単な答えが返ってきた。

「好きだなあ、って思つて」

何の含みもなく、厭味でもなく、ビームでも素直に返してくる彼女が……。少し羨ましくなつた。

「俺もだよ」

なんでもないよう返すと、彼女はパアッと笑顔を浮かべる。現金というべきか、素直というべきか。

「じゃあ、タバコ止めて」

「俺に死ねつて言ってんのか」

それでも笑顔の攻防戦は続く。

「違うよー。死ねなんて言つてない。ただタバコを止めてほしいだけ」

「だからそれが、死ねつてことだらう?」

俺からタバコをひいて、一体何が残るというんだ。何も残るわけがない。（自分で言つていて非常に悲しいが）

他に楽しみも何もない、ただタバコが娯楽。

「体に悪いでしょ？」

「知つてる」

「私にも悪いんだよ？ 私のほうが早く死んじゃうかもしねりないん

だよ？ それでも吸うの？

「……」

それを言わると、うつと止まるしかない。副流煙の影響など、
とっくに知ってるし、知った瞬間は『止めよつ』と思つのだ。

「ねえー」

「少なくする」

「止める？」

「少なくする」

止める、とは言わない。実行できなかつたとき、責められるのは
必須だ。

「私が好きなら止めてー」

ほほ本氣で入つてないのだろう。普段は絶対口にしないことまで
口にした。よほどタバコの煙が嫌いなのだろう。付き合い始めるま
で、身近に吸う人がいなかつたらしい。

付き合い始めた当初はよく咳き込んでいて、それが気になつて数
ヶ月タバコを吸う回数がぐつと減つた。それも彼女を思つてのこと
だ、と言い張りたい。

それを言つなら、すつぱり止めるといつ話だけど。

「好きだよ。だけど止めない」

「ばかあ。肺がんになつたら死んでやる」

「だから少なくするつて」

いつか、止められたらいいと思う。いつかは、の話だけど。
キスするとき、タバコのにおいがするとがつかりする

「それは謝る」

そう言いつつ、キスを一つ。苦い顔をした彼女の頭に手を置いて、
「ごめん」「めんと謝つた。そして、現金な彼女に一つ約束を。
「そのうち止めるよ」

結局、タバコを止める原因になつたのは、彼女の妊娠、というオチなのだけど。

「あー、子供に悪影響だ」

「止めます。今すぐ止めます」

意外に止められたりするものなんだな、とそのとき初めて気がついた。

現金な（後書き）

半分実話。

子供が出来るとタバコつて止められるらしいですよ。まあ、人にも
よるけど。

欲しいのは（前書き）

失恋っぽいのを一つ。後悔はしていない。だけビッシー、惜しかったかな、なんて思つてゐる。そんなお話。

恋の芽を自分で摘み取つて、あとで『恋だったかもなあ』なんて思つてたらちよつと痛い。だけど幸せだから、嬉しさが勝つ。そんな女の子。

欲しいのは

どんなに泣いたって、叫んだって、手に入れられないものがあると知ったのは何時頃か。

これはその類ではないけれど、やはりどんな道を通つても手に入らなかつたものなんだろう。たとえ、彼女に紹介しなくたつて。

「ほしい……って言えないよね」

「へ？」

ちらりとこちらをみた友は、ポツキーを口にくわえたままこちらを向く。ぐるん、とはねたままの髪が田に入つたが、あえて言わない。

寝癖といつほどでもないし、今日一日それで過げにして皆に指摘されなかつたんだから、いいのかもしない。

恋人に指摘されてしまえ、とまでは思わないけれど。あいつなら、それさえも可愛いと思つちゃうんじゃないだろうか。

「ほしいの？ ポツキー？ あげるよ」

箱をこちらへ向ける彼女に『違うよ』とは言えなくて、笑いながら『くれないのかと思った』と一本もらひ。しつもは甘い棒が、ひどく苦く感じた。

苦い、甘い、やつぱり苦い。チョコレートが嫌いになつそつだ。

「それでね、わつきの続きなんだけどさあ」

「彼氏の愚痴と見せかけての惚氣でしょ？ 続けて『わざとらしく言つてやると、ムツと眉をひそめた。

ああ、可愛い。これは惚れるわ。うん、女のわたしだつて惚れるんだから、やつならもつただろう。

「のわけじゃない！！」

「じゃあ、別れちゃえば～」

「やる気ないでしょ……」

「胸やけがしてねえ。どうしてだらうへ、」

チョコレートの棒を口で上下に振りつつ答えると、うつと彼女は詰まった。うつ、としばらくうつてこちらを睨みつけた。が、睨んでいるように見えないので全くもって怖くない。

逆に上目遣いになつていて可愛いくらいだ。

そこに話の中の重要人物が登場した。

「悪い。部活長いた」

「早くしてよね。惚気に付き合わされるこっちの身にもなつてよ」
そう返すと、彼は真っ赤になる。あ、照れてる。

わたしと彼の間に彼女がいなかつた頃、一度だつて見たことがなかつた顔だった。彼女を紹介して、初めて見れた顔だ。

それを貴重だと思つていた頃がもう懐かしくて、ちくりと痛んだ胸を隠す。

痛くない。痛くない。こんなのは痛みじゃない。

「え、や」

「今度あんたら、奢りね」

それだけ言つて、席を立つた。いつの間にかオレンジ色になつている口を見つめる。

切なさを感じることはもうくなつた。だつて紹介したのはわたくしで、一人を引っ付けたのもわたしだ。そのとき、後悔しなかつたし、これからもすることはないだらう。

ただ、思うとすれば。

今更だけど……彼は結構いいやつだったのかもしれない。友人としても、彼氏としても。それは、付き合っていないわたしには分からぬいけれど。

「あなたたちのおかげで、こつちはお遊びの恋なんてできないのよ

」

羨ましいくらい、優しい恋だから。

羨ましいくらい、可愛くて純粋な恋だから。たとえ気休めだとしても、中途半端なものはしたくないと思つてしまふくらい。羨ましい。だけど手に入れたいとは思わない。ただ傍で、ずっと

見守っていたい。そんな二人。

「まあ。別れたら一人ずつ慰めてあげる」

「ちょっとーー！」

「おー」

一人につぺんの返事に二三回と笑い返すと、教室から出た。

「あの笑顔が、羨ましいから……だよね」

だから、彼女を彼に紹介したことを、少しだけ惜しいと思つた。だけど、たとえ一度目があつたとしてもわたしは紹介するんだろう。何度も、繰り返してしまうんだろう。だってそれで後悔なんてしないから。

悪いことをしたと、思つたことはないから。

「恋、できるかなあ」

恋と氣付くのは遅すぎた。「ううん、恋の可能性があつたと氣付くのが遅すぎた。でも、氣付いたとして、何か変わることはあつたんだろうか。

彼と、わたしでは、何かが起こりようもなかつたと思つけど。次にもし、誰かに可能性を感じたら、今度こそちゃんと氣付こう。今は、そう思うだけでいい。

恋じゃない。だから失恋でもない。

だけどこの痛みを説明する言葉を知らない。
名づけられないのは、思いか痛みか。

欲しいのは（後書き）

失恋じゃないと言い張るのは彼女が強いからなのか弱いからなのか。

見つめるだけの恋、なんて素敵じゃないですか。それで相手も見てるだけの恋、とか思つてたら可愛い。
そんなお話。相手役と一度としてしゃべっていないけど、恋愛ものだと言い張る。

「また外見る」

クーラーの効いた部屋で一つ、声が落ちる。

「……つ。み、見てない！ 見てない！ 見てない！」 グラウンドとか全然見てないし！」

慌てて友人の前で手を振った。行き過ぎた否定は、肯定も当然と言つことを知らないわけではないけれど、それでもせずにいられなかつた否定。

「グラウンド見てたんだあ」

「あ」

右手に持つていた筆が落ちそうになるのを慌てて握りなおす。ばれてしまつた……。自分は何と不甲斐無いんだね。こんなに、早々ばれてしまふなんて。

これは絶対、わたしだけの秘密だと思つてたのに。

「だつてキャンバス全然変わつてないよ。始まってからぐうの音もでずに押し黙ると、横から友人は身を乗り出し、わたしのすぐ隣の窓からグラウンドを覗く。

さらり、と長めの髪が彼女の肩から落ちてきて、その大人びた横顔にかかつた。羨ましい、と思うけどあえて口に出さない。自分が惨めになりそうだ。

「この暑い中、何がいいのかねえ。野球部は」

八月という、一番日が長くて暑い中、彼らはただただ白いボールを追いかける。泥がついてるボールより、なお砂にまみれる。

だけど顔は笑顔で、ボールを追いかける姿は生き生きとしていて、どこか羨ましくもある。どうして、その一つの球に執着できるのか非常に疑問ではあるけれど。

「青春、してるんじゃない？」

少し遠慮がちに言つと、友人はにやりと笑い、こちらを見た。そ

の瞳が恐くて、キャンバスに向かう。青い絵の具を一気に押し付けた。白から青へ。それはまるで、この夏のように。

暑さをも吹き飛ばすくらい、まつさらな青い空。雲ひとつなく、その光は彼らの肌を焼いていく。キラキラ光る、光の粒子がまるで彼らに降り注いでいるみたい。

真反対だけど、雨のように。

「で、どれ？ 一十人ぐらいいる中の誰なのよ」「べ、別に一人見てるわけじゃないもん。皆頑張ってるから、ちよつと見てて」

一階の窓から見下ろせるグラウンドは、蜃氣楼のようにゆらゆらと揺れる。あんな中で走つたら、私はきっと倒れるんだろうな。ただでさえ、走つた後は体調崩すし。

こんな暑い中、走つている意味が分からぬ。いや、分からなくていいとは思うんだけど。

「ふうーん」

「そ、だから、誰も……っ」

そういう終わらないうちに、がたん、と慌てて席を立つと、こちらに手を上げた人に頭を下げる。やばい、見てたことがばれた。

ひらひらと振られる手に、自分の手を上げるだけで返す。恥ずかしくつて、手を振るなんて出来ない。もし、慣れたらして見たいとは思うけど、いまだその勇気は出てこない。

そのうち、そのうちしてみようかな、とか思つけど。

しかし彼はそんなこと気にしていないらしい、ここからでも分かるくらい明るく笑うと、もう一度手を振つて走つていってしまった。その笑顔に、どきりとしてしまったのはわたしだけの秘密。

「一人を見るわけじゃない、ねえ。のわりには、過剰反応してない？」

「う、う、煩い！」

バツと教室の中を向くと、足早に廊下側に走る。完全にグラウンドが見えなくなつてから、へたり込んだ。

心臓に悪いんだ、あの笑顔。わたしとは真反対の、明るい笑顔。ちょっと気後れしてしまつけど、そんなこと関係ないとでも言つように、分け隔てなくわたしにも贈つてくれる彼。

「あれ、隣のクラスの」

「何も言わないの！！」

「付き合つてんの？」

「付き合つてない！」

「じゃあ、片思いだ」

「……っ」

また何も言えない。

容赦のない追走はなかなか手を緩めてくれず、わたしを追い詰める。まるで警察か何かのようだ。どんなに逃げても、逃げ切れる気は到底しない。

むしろ、いつ捕まつてしまつのかと冷や冷やしてしまつ。

「青春してるねえ」

「……」

何も言わない。もう絶対、何も言わない。

何を聞かれても、何を言われても、余計なことは一切言わないようにする。そうしないと、この胸に育ち始めている気持ちを全て吐かされてしまいそうだ。

全部、全部。この胸に灯るわずかな光さえ、隠すことを許されることなく。

「今度のコンクール、野球部描いて出せばいいじゃない」

「……」

「あ～。坂本くんだけ描いて出したいの？」

「……」

「描かないんなら、あたしがモデルお願いしようかなあ」「だめ！」「

思わず出てしまう声。

「サイゴーーー！」

「あ……」

もう、ダメかもしれない。

陥落まであと少し。

「おーい、坂本ー。何手え振つてんだよ」「別にー。美術室に知ってる子がいたから手を振ると、少しだけはにかみながらも、絶対に返事をしてくれる彼女。恥ずかしそうに手を上げて、でもまだ振つてはくれない。こっちが気付かなかつたら、絶対自分からはしなさそだよなあと一人ごちてみる。

この前まで名前も知らなかつた。同級生だといつことも、知らなかつた。だけこの前、文系クラスとの合同授業で、初めて美術室以外で彼女を見た。

気になつて、話しかけたくつて、でも理系と文系の溝は意外に広くつて。休み時間に、文系クラスが多いところへ行くことさえ出来なかつた。

「美術部？ お前知り合ひなんていんのかよ」

「いや悪いわけ？」

知り合いつて言つていいいのか分からぬ。もしかしたら、彼女からみればそんな存在じやないのかもしれない。

だけど隣のクラスなんだ。今まで一度として気したことなかつたけど。文系クラスとほとんど授業が違うから、縁のない人たちだとばかり思つていた。

「ん？ あれ、隣のクラスの文系じゃん。お前、どーして知つてるわけ？」

「お前に関係ないことだ」

「さてはお前ら付き合つて……」

「ないし」

ぱつさりと友人の言葉を切り捨てていると、向こう側の彼女は顔を赤くして奥に入ってしまった。残念。もう出てきてくれないのかもしれない。

この暑い日に、カーテンを開けていれば、彼女らは暑いだろうし。

「名前、何て言うの？」

「はあ？ 教えなきやいけないわけ？ それ」

「だつて同級生なのに、名前知らないとか」

菊池 優華 忘れもしない、彼女の名前。誰がお前らなんかに教えるもんか。

「なあ、坂本ー」

「つるさい。練習に戻る」

今日も彼女の顔が見れたから満足。さて、練習に励むか。

「まさか、知らないの？」

「知ってるけど、お前に教えたくない」

手を振つて、見つめて、笑つて、名前を知つて。

次はどうすればいい？ どうすれば、君に気付いてもらえるかな

？ 「ここに、俺がいて、君を想つてゐつて。

やつぱり、話したことないのにそつとつて、変なのだろうか。

「お前、彼氏気取りかよ」

「まさか。立候補はしてみるけど」

彼に一つ、笑顔を。

「うわあ。こいつ、嫌い」

「どうとでも」

今度、文系クラスに行つてみようか。それとも美術室に行くか。どちらにしても、彼女の声が直で聞ける。それだけですぐ嬉しくつて、つい足早に歩を進める。

「おい、坂本ー」

その声に返事もせず、美術室の方を見上げた。

本物の恋に落ちるのは、もう少し先。

窓の向いの方（後書き）

女の子の名前でピンときた人は『drop』読みの方ですね。絵を描くって言つたら、そういうイメージしかないのですでした。（笑）作中の人間は暑い暑いと言つてますが、わたしは今とても寒いです。季節外れで申し訳ない。

白衣とメガネと張り紙（前書き）

白衣とメガネが書きたかつただけ。ただそれだけ。
らんぽらんに見えての天才は書くのが難しいです。
楽しいけど。

白衣とメガネと張り紙

「ちょっと」

厳しい声が、殺風景な研究室の中で響いた。随分とどす黒い雰囲気をまとったその声には、確かに『殺意』なるものが含まれている。が、話しかけられた男は嬉しそうに首を傾げた。

「うん？」

なあに、とでも聞いたげな目に、厳しい声の主がはあとため息をつく。

「外の注意書きが田に入ってるのかしら？」

今度は怒氣を少し抑えた声だ。しかし隠し切れなかつた怒りの粒子はその端々に垣間見られ、男はくすりと笑つてしまつた。

そして、きちんと律儀に頷く。

「うん。読んだし、覚えてるよ。

『ただいま実験中につき、立ち入りを禁ずる。大変危険なので、くわぐれも間違えて入つてこないよう』。まかり間違つても、楽しそうだからとか考えるな』

『だつたよね？』

すらすらと、まるで暗記したかのような口調。事実その言葉は寸

分の狂いもなく、扉に張られていた紙の内容だ。

一度見ただけで完全に再現できるその記憶力。怒氣を潜めた声の主は、その能力を心底恨めしそうにしていた。

『どうして、見てるのに、入つてくるのかな？ 理解できないのかな？ うん？』

幼稚園児に話しかけるような女に、男は眉をひそめた。

馬鹿にされたことがなかつたのか、予想外の反応だったのかは分からぬが、とりあえず不快そうだ。

頬を膨らませて、女に反論する姿はどこか押さなくて、長身のアンバランスさに少々おかしみさえ感じる。

「これでも、研究所きつての天才って呼ばれてるんだけど？」

ちょっと胸をそらしつつ、それでも片目を瞑つてぱっちりとウインクもしてみせる。どこからどうみても、その様子は『研究所きつての天才』には見えない。

どちらかといえば、長い髪をすつきりとまとめ、メガネをかけている女のほうがよほど研究者らしい。

研究者と、訳の分からぬ男。そんな印象の二人が白衣を着て向かい合っている。

研究者の人間が見れば、二大天才の衝突だと騒いだるうが、今は幸いなことに誰もおらず、旧知の仲らしく一人は存外気軽に話しきを進めた。

「ふーん、へー。そんなんだー。すごいねえ」

全く興味なさそうに、女は相槌を打つた。その間も、試験管に何かを入れてみたり、振つてみたり忙しく動き回つている。ひら、ひらつと白衣が翻るのを、男は眺めていた。

一瞬だけ、その目に愛情が浮かび上がつたが、すぐさまそれもなくなり、代わりにからかうような色が出た。

「用がないのなら帰つてくれる？　どうせ、所長が探してるでしょうから」

女はバイインダーにはさまれた紙にさらさらと記入して、男を見る。フレームのない眼鏡の位置を直し、ついでに髪を耳にかけた。

そのままはどこからどう見ても、『今忙しいんですけど、邪魔しないでくれる？』というメッセージが含まれており、男はどうも楽しくない。

いつもなら首根っこを掴んででも追い返しにかかるのに。

「君を見るのが、僕の楽しみなのに」

「もう見たでしょ」

「足らないんだよ」

はあ、とこれ見ようがしにため息をついてから、彼女は器具の間ににおいてある電話を手に取ると、一つだけボタンを押して耳に押し

付ける。

どうやら内線を使つてゐるらしい。

「もしもし？ 所長？ 来てますよ。彼、ええ、だから早く迎えをよこしてください。邪魔なんで」

「ひどーい」

明るい色の髪の毛をヒヨン、と動かし、彼は反論する。

傷ついたなあ、なんて言いつつ、全く傷ついたそぶりを見せないのが余計に腹立たしく思い、女は眉を寄せつつ電話を切つた。

「いつまで、そんな研究するの？」

「結果が、出るまでよ。天才には、分からぬでしょ？ この気持ちが」

くくつてゐにもかかわらず、彼女は髪を搔き揚げる。当然ほつれる髪をうつとうしそうに見ながら、彼女は長い髪を後ろへやつた。無造作にくくられていのに十分艶めいていの髪は、さらさらと背中で揺れる。

「そうだね。その研究は、絶対に成功しない」
きつぱりと、真面目な声で男が言った。

「知つてるわよ。早く出てつて」

「出て行かないって言つたら、どうするの？」

その言葉を聞いて、彼女は珍しく無表情を変えた。
「試験管の中身をかけてでも、追い出す」

「分かつた。出て行く。だから、そんな泣きそうな顔しないで」

男は両手を上げて、降参の意を表した後、扉を開けた。

怒られるのはいいが、泣かれるのは困る。そういうことらしい。女にしてみれば、両方同じ様なものなのだが、男には明確な違いがあるのだそうだ。

罪悪感の重さ、とか何とか。

「でもね、その研究は絶対に成功しないけど。だけど、成功して欲しいって、思つてるよ」

それはバカらしい、願いだけど。

叶うわけもない、だけど確かに願い。

「ありがとう」

「やつ、彼女が言つならいいかもしないと、彼は思つのだ。

「もう少しで、諦められそうよ。ようやく」

その言葉が意味することを理解し、ほんの少し残念に思つ気持ちと嬉しい気持ちがない交ぜになり、男はぜひもなく微笑んだ。

「そう」「うう

「だから、あともう少しだけ」

時間をくれるかしり。

「好きなだけ、あげるよ」

『ばいばい』、と言い置いて、男はやつと扉から出て行つた。その後姿を、女は一瞬寂しそうな顔で見る、がすぐさま試験管に向き直り、また研究を開いた。

それは、叶うはずもない願いを、諦めるための『研究』（研究）だと、女はずつと自覚していた。

「その研究は絶対に成功しないよ」

部屋から出て、男は独り言のように言つた。

「だつて、僕だつてしまふとしなくなら……無謀なものなんだも

の」

幼い頃、そんなものがあればいいなと思つたことはあった。しかし年を経ることに、絶対あつてはならないものだといつても分かつて、やがて考へることさえなくなつた。

「死者を蘇らせる秘薬、か」

それは、彼女が誰よりも愛した、『彼』を生き返らせるためか。

そのための、『無駄』な研究か。

「成功、してほしいよ」

だけど、絶対成功しないその実験にある種の安心感を覚えていることもまた事実で。

絶対に成功しないからこそ、応援できるのだと言つことも事実で。「まあ、だから、『成功してほしい』なんて言えるわけだけど」もし、成功する確率がもう少し多ければ、自分は絶対に応援し続けることは出来ないだろう。むしろ、どんな手を使ってでも止めさせて、邪魔して、忘れさせる。

「記憶を消すくらい、できるしね」

その方が、彼女にとつてもよかつたはずだ。

誰より愛した『彼』を亡くした彼女に、してあげられることがくらいはそれくらいしかない。だけど。

「できないんだもんなあ……」

忘れさせてあげることも出来なかつた。彼女がそれを望まなかつたからだ。

無理やり薬を飲ませてしまつとも出来たが、実は怖かつたのだ。男自身も。

「あいつを忘れた君なんて、想像できないから想像できない。できるわけがない。知り合つたときにはすでに、彼女は彼のものであつたから。彼女の一部が、彼自身で、彼のいない彼女は果たして存在するのかとも思つ。

「君の半分以上が、なくなつちゃうね」

そして彼を忘れてしまえば。

「僕のことも、忘れちゃうかもしれないし」

それが、一番怖いことだと、自分が弱いと認めた今なら素直に言える。本当は、彼を忘れた彼女を見るよりも、彼とともに自分自身も忘れられるんじやないかと思つたからできなかつた。

ただそれだけのことだ。

でも、本当は。

「あいつのことを、忘れさせたい」

もうあの頃の笑顔が見れないなら、せめて苦しみだけは取り除き

たい、なんて。

「人でなしの僕も、恋をすれば変わるものかな」

だけど、大丈夫。

「お前との約束は破らないよ。」

『彼女に一生手を出さない。何があつても、どんなことがあつても、
彼女はお前のものだ。一生、死ぬまで、お前以外の誰のものにもな
らない。』

そう見守るし、俺だつて我慢する』

こんなときばかり、記憶力のいい自分を呪つた。今ではつきり
と、覚えている。彼の言葉を。

『『もし、お前が本気で彼女を好きなら……』』

その口を思いつきり手で塞いでしまおうと思つた。だけど入り混
じる汚い希望を捨てきれず、結局彼の言葉に耳を傾けてしまつた。

『『彼女を預けてもいい』なんて、お前お人よし過ぎるだろ』

その言葉に、縋りたいと思つたことは何度もある。しかし結局
中途半端な友情が手伝つて、何も出来ないのだ。

「厄介な奴らめ」

その痛みさえ、楽しかったときの思い出に繋がるのだと、分かつ
てはいてもやはり痛いものは痛い。

「ま、彼女が諦めるまで、もう少し見守るけど」

約束だからと言い訳しつつ、彼女を見守り続けよう。彼女が諦め
るまで、あともう少しだから。

「我慢、もつかな」

きつともつとは思う。いつだって自分は『理性の人』だから。だ
けどときどき、それを破つてみたくなる。できないうことは、分かっ
ているけれど。

「好き、大好き」

それは言えないから、せめて。

『研究が成功することを、祈るよ』

それが精一杯の、愛の告白。

白衣とメガネと張り紙（後書き）

書き足すと、随分重い感じになりました。もう少し、ドタバタ感を出したかったんだけど、試験管を爆発させてもなあ、と断念。名前を考えてないので、ちょっとと二人称とか分かりにくくなりましたが、分からぬままのほうがいいかな、と思つたのでそのまま。

興味本位の観察を（前書き）

身分差。王子 × メイド

毎度思ひけれど、どうしてそんなに身分差が好きなんだろ？。

『王子～～』

少女が一人、広い中庭にいる。くるくると、まるで踊っているかのように、紺色のメイド服を揺らしている。

可愛らしいデザインのメイド服は、城内外問わず人気で、それゆえメイドは人気の高い職業だ。当然、その服を着る人間も選ばれ抜かれたものであるので、王族に決して無礼を働くかない。

礼儀作法を叩き込まれている彼女らの職業からして、メイド服を揺らしながら走り回るのは少々考えられないことだった。

『王子、どこにおられるのですか』

紺色を基調とした、清楚でありつつも地味ではないメイド服は王様の趣味だとかそうではないとか。城下ではもっぱらの噂であったが、ここにその噂を知る人物は一人もいない。

そんな噂の的である服の上に、真っ白なエプロンをしている少女は、正真正銘のこの城のメイドだ。

「ほら、ウイル。あなたの可愛いメイドさんが探しているわよ？」

そのメイドの様子を、部屋の中から楽しんでいた少女が一人。開かれた窓からはその様子がよく見えて、少女はくすりと笑いを零した。

そうして窓の外を見ようとはしない弟を振り返る。

「お姉さんは楽しんでおいでですね」

弟は難しい顔をして、姉を責めるように見つめた。

「ええ、もちろん」

身分違いの恋なんて！ しかも、王子がメイドに恋しているなん

て、なんて素敵なんでしょう！－

美しい顔をほころばせて、王女は言ひ。その片手には巷で有名な『ロマンス小説』が。およよそ『王女』が読むに相応しくないものだらう。もつとも、彼女はそんなことを気にしていなにようではある。

しかし、好奇の目に晒されるのは必須だつた。

なんせ、あの柔らかい笑顔を持つ王女が、生糸の『ロマンス小説』好きなのだから、興味をそそられないわけがない。

「そんなことを夢見てるから、お父様が嘆かれるのですよ」

「あら、わたくし、恋のない結婚なんてしなくてよ？」

ぱりり、と苦労を知らない手が本のページを捲る。白く細い手は、労働を知らない手だ。そして、元々労働をするように作られていい手だ。

まさしく、王族の手と呼ぶに相応しい造りの手だつた。節が目立たず、抜けるように白く、滑らかで本をめくる以外の仕事をする必要がない。

「だつて、あなたがこんなに素敵な恋をしてるのに、わたくしが一人、愛も何もない結婚をするなんて不公平ですもの」

ここは王女の部屋で、その窓からは中庭が一望できる。王子はその窓から、メイドの少女をちらちらと見ていた。

見ない、という姿勢を崩してはいけないが、腰が僅かに浮いているのだ。そんなに気になるのなら、窓が見えるところへいけばいいのに、と王女のみならず部屋にいた別のメイドたちは思ひ。

それを口に出さないのは、この王子がその指摘を受けると本格的に窓へ背を向けかねないからだ。天邪鬼、といつよりここまでくればいつも素直の部類になるだらう。

「そんなど心配ならば、行つてあげればいいのに。どうして、ここにいるのかしら？ 我が弟君」

からかい半分のその言葉に、王子は少しだけ息を吐いて、答えた。

王女は指摘することにしたらし。しかし、あえて『見てるじゃ

ない』とこう指摘はしない。回りから固めていく手はずは、まるで戦の策のよう。

「あれは一応、お母様の手先ですよ。私が何をするか逐一お母様に報告するに決まってるではありませんか」

そう言ってから、紅茶を口元に運ぶが、こけそうになつた少女を見て、わずかに腰を浮かした。そう、まさに立ち上がりかけた。ぐすり、と王女の口から笑いが零れるが、王子の耳には届いてないらしい。姉を睨むこともせず、窓の外を気にしている。

「あらあら、心配でいけないようね。それに……」

少しだけためらいを見せた後で、王女は盛大に口元を引き上げた。

華やかな美貌が、より美しくなる。

大人しく、夜会で男性をひきつけて止まないその顔立ちは、どちらかと言えば幼くて、今はらんらんといったずらをする子供のよう輝いている。

瞳は生氣を宿し、どんな言葉が弟から出るのか待ちに待つているようだ。

「ここにいるのは、彼女のそばにいると落ち着かないからかと思つていたわ」

ほら、なんて言つのかしら。王女は手を口元に当てて、小首をかしげる。

可愛らしい仕草だったが、王子から見れば嫌な予感しかしない。どんなに洗練された動作でも、芝居がかつて見えたなら、それはよくなないことの兆候だと身をもつて知つてはいるのだ。

「そうそう。男は狼なのでしきう？」

「お、お姉さま……」

王子が声を上げる。

「違つた？ おかしいわね。確か、数ページ前にそんなことが書いてあつた気がしたのに」

弟の声を聞いて、間違つてたかしら、と呟きつつ本をめくつり始める。

パラパラとページを戻す姉に向かって、王子は手を伸ばし、その手から本を奪い去った。噴出しそうになつた紅茶は、いつのまにかきちんとテーブルに戻つてゐる。

「王族が、このような本を読むなんて感心しませんね」「どちらが年上なのか分からぬ言葉だ。

「その言葉そつくり返して差し上げるわ。王族が臣下に心奪われるなんて感心いたしませんわ」

対して、王女はゆつくりと慌てることなくその手から本を奪い返す。

もちろん、王子に皮肉を贈ることも忘れない。王子の手から思いのほか本を奪い返すのが容易かつたのは、相手が動搖しているからだろうと王女は勝手に思つた。

『王子へ、どうにいらしゃるんですか。あ、服が引っかかるて、取れない……、動けない……』

「泣きそうね。どうしたら、あんなところへ、複雑に引っかかるのかしら」

「あれは天性の才能ですからね。厄介ことを引き起こすことに関しては」

王子はそれだけ言つて、席を立つ。紅茶はすでに飲まれており、礼儀を欠くことなく部屋を出ようとすると。

何気なく装つてはいるが、先ほどからイスを倒しそうになつたり、メイドにぶつかりそうになつたりと動搖を隠しきれていなかつた。

「お姉さま、本日はこれで失礼いたします。では」

そしてそのまま部屋を出た。

パタパタと部屋の外から走る音が聞こえる。きっと今頃中庭へ走つて向かつてゐるのだろう。素直すぎて可愛い弟を見送りつつ、王女は本を閉じて笑つた。

そして側仕えの長いメイドに視線を送る。何とも嬉しそうな、そ

の表情。

「お母様もお人気が悪いわ。あの子の好みを知つていて、わざわざメイドとして行かせるんだから」

息子の結婚相手として、教育した相手だとはよもや王子は知るまい。大層な家柄の姫君が、メイドとしてここにいるなんて、一体どこの誰が考えるだらうか。

結婚相手は要らないと話を蹴りまくり、逃げ出し、耳を貸さうとしない弟に対し、母が行つた無謀とも言える作戦。

しかしその作戦は、案外母の思つたとおりに進んでいて、王女は顔を綻ばせた。

まさか彼も、たつた一回、たまたま出た夜会のときに話した相手がメイドだとは思わないだらう。

ひそかに、こんな少女なら楽しいかもしね、なんて思つた幼い日の思い出を覚えているかどうかは別として。

「あの子、それにしてもよく貴族の娘がメイドなんて引き受けたわね」

「どうせあの母のこと、手ハ丁口ハ丁で丸め込んだに違いない。

「さて。あの子達はどうするのかしら」

くすくすと美しい顔が楽しげに笑つたことを、彼らは知らない。それを知つているのは、母と王女の親子だけ。

父も、弟も知らない。

「まあ、あの子のためですものね」

やつと中庭に出てきた弟は、息を切らして彼女に近づく。メイド服が揺らめいて、そして弟を見つけて少し浮き上がる。

その様子は、彼女の心を表現しているみたいで、思わず笑いが零れた。抑えようとするのに、次々と溢れて止まりず、しばらく声を押し殺して笑う。

こんな楽しいことがあるだらうか。ロマンス小説よりよほど面白い。

王女はそんなことを思つて、メイドに言った。

「無事、結婚まで漕ぎつけられるといいわねえ」

「王妃様が、身分差には障害がつきものだから、そろそろ引き離す作戦を実行しようかと仰っていましたわ」

答えるメイドも楽しそうだ。一体何人ぐるみで王子の恋愛を楽しんでいるんだと、知られたら怒られるだろう。知らせるつもりもないし、ばれない自信もあるから出来ることだ。

「あら、いいわね。反対する母、それに立ち向かう息子。彼は愛しい人を守りきれることが出来るのか。ロマンス小説に出てきそう」

王女はについつと笑い、そして窓を開めて部屋の奥へと入つていく。

日差しを厭い、日中滅多にカーテンを開けない彼女にしてみれば、日に焼けていないかが最大の問題だつた。

王族の少女というのは、並の努力ではいけないので。常に美しさを心がけていなければいけない。

「わたくしも、したいものだわ。恋」

「姫様もできますわ、きっと」

弟の幸せそうな姿に、わずかに嫉妬を覚えた王女はため息を吐いた。弟に訪れたのだから、自分に訪れてもいいはずである、と。

「だって、王子が恋をしたんだもの」

結末は当然決まつているでしょう？

「ハッピーエンドしかないじゃない」

それに憧れているんだと言えば、メイドは僅かに笑つた。

王子が真相を知るのは、彼が花嫁を迎えるちょうどその日であったというのは、余談である。

そして、王女が運命の相手を見つけ、城を出て行つてしまつのも。

興味本位の観察を（後書き）

ということで、またまた身分差。
まだ少し身分差ネタがあるんだよね。次は江戸くらい？？ 何か
水戸黄門みたいなやりたいなあーと思つてた頃があつたのさ。
格さんの方が全体的に好みなのです、という内容。出たがりな藩
主の娘と、その教育係（子守役？）の二人。年の差（がつつきり10
歳くらい）、身長差とか詰め込んだ感満載のネタでした。
練り直したら短編でUPしたいです。

君の背中（前書き）

幼馴染モノ。わたしが創作で一番最初に書いたのが、幼馴染モノだつたせいか、度々登場する関係です。何と言つか、何回書いても難しいな、と思う。

両片想いも美味しいし、かたっぽだけでも美味しい。もちろん、全然気にしてなかつた二人が歩み寄る話でもイケます。とりあえず、書いても飽きないテーマ。

いつの間に、わたしの田の前に立るやつの背中は大きくなつたんだろう。

そう思いつつ、目の前にある彼の背中を見やる。もちろん、気付かれないうつ。まあ、相手は向い「う」を向いているんだし、大丈夫だとは思うけど。

見つめてたのがばれるのは嫌でしょう？

つい最近までわたしより小さくて、『しうがないなあ』と思いつながら見守ってきたのに。今はわたしより大きい。身長だって、肩幅だって……背中だって。

何もかもが、わたしよりずっと大きくして、彼とわたしの違いを示す。

彼は男で、わたしは女で、一緒にじゃないんだと。

「ねえ」

「んー？」

声だつて、昔はもつと可愛かつたのに。高くつて、少し尖つてたけど面白くつて。やつぱり可愛くつて。

「何で成長するの？」

「はあ？」

いつの間に、わたしの知らない人になつたの？

わたしの代わりに自転車を押す背中を見つめ、振り返らないやつを見つめる。

いつの間に？ わたしずつと見てきたのに、いつの間にそんなに。わたしの知らない『男の人』になつたの？？

わたし、全然気付かなかつたよ。いつも、近くにいたと思つてたのに。

確かに、年を経ることと一緒にいる時間は減つていつたけど、だけどそれでも、近いと思つてた。誰より、近い、なんて。

彼に彼女がいたら、そんなことないだろうに。

そんなことに、今初めて気が付いた。そして、何故かその事實を疎ましく思つた。

「わたしの方が、大きかったのに」

「一年も前の話だろう」

そうなんだけど、改めて、大きくなつたと思う。ちょっと一緒に

帰らなくなつただけで。

それが分かつてしまう。

悔しいのか、寂しいのか。はたまたそれ以外か。分からぬけれど、イラッとしたのも事実で。

「悔しい……」

「何、お前。まだ根に持つてんの？」

それが悪いか。負けるのは嫌なんだ。
たとえ仕方のないことだとしても。また一つ、わたしの知らない人みたいな証拠が増えた。

「絶対飲んでる牛乳の量なら、あんたに負けない気がする」

「牛乳……」

骨太くなるだけだろ、それ。そのツツ「ヨミは聞こえなかつたふりをする。骨が丈夫になることはいいことなんだ。現に骨密度がだね。

「ずーるーいー」

「はいはい」

「その余裕そうな顔もむかつく」

「そうですか」

機嫌悪いなあ、と咳きながら、笑つた。

少しだけ、小さい頃のやつの顔と重なる。少し、気弱そうな笑顔もそのままだ。大人しくつて、誰に何を言われても言い返そうとはしなかつた。

その分、わたしが言い返してたんだけど。だから、弟みたいなものだと思つてたんだ。

彼は、わたしが近くで見てなきやつて。

「後ろ、乗つけて。歩くの疲れた」

「我がままだな」

「いいんだよ」

あんたにしか言わないんだから。

そうだ。クラスでこんな発言するわけない。いつもはわたしの方が大人しくて、聞き分けのよい、何を言われても言い返さない子。

そうしようと、学年が上がる』ことに思つよつになつたのだ。昔の

ように、男の子とけんかなんてしない。

「はいはい。じゃあ、乗つてくださいな」

「ありがと」

彼が自転車に跨つたのを確認し、わたしは後ろに乗つた。そして無意味にぎゅっと抱きついてみる。

やつぱり少し大きかつた。一年前はもう少し細かつた気がする。

男の子、の体だった。細くて、頼りなくって、背丈だけが急に伸びたような。そんな

もやしつて言つたら怒られたつけ。

「太つた……」

「筋肉がついたと言つてほしい」

そんなこと、絶対言つてやらない。
だつて認めることになるもん。

「少しば動搖すればいいのに。女の子が抱きついてるんだから

「女の子、ねえ」

「何が言いたいの?」

「いいえ」

ぐつと必要以上力を入れても、彼は苦しがる様子を見せなかつた。

それが悔しくって、もつと力を入れてみる。

これでもかと言つくらい押し付けて、それからふと『動搖しないのか』とつこんだ。仮にも女の子が抱きついてるんだぞ。

少しくらい慌てもいいだろつ。

なんて。まあ、女の子として意識されていないのだから、それも

仕方のないことだらけ。

「つまんないの」

「何が」

「何でもないよー」

せめてもう少し、立派な体つきをしていれば、彼も動搖するんだろつか、なんて詮のないことを考えた。もともと、意識してほしいわけじやないんだけど。

だつて意識されたら、もつと遠のいてしまうから。

男と、女の距離は遠かつた。だから一番近い、幼馴染でいい。性別なんて、気にしないほうがきっといいんだ。気いたら、寂しくなつてしまつだらうから。

「家つくぞ」

「うん」

「降りろよ」

「うーん。もうちょっとだけね」

「苦しい……」

「ハイハイ」

それだけの観想を語つ彼が面白くつて、少し笑つた。何だ、やつぱり意識してないじやん。

よかつたのか、悪かつたのか。

判断はつかないけれど。でもとりあえず、安心してしまつた。

だがしかし、彼女は知る由もない。彼が苦しがっている様子を見せず、かつ冷静に見せかけようと必至なのを。

苦しがっている余裕もなく、彼はひたすら前に集中していた。そして、頭の中で素数を数え、羊を数え、拳句2の一乗から順々に計算している彼の心が伝わることは、当分ないのだった。

少なくとも彼は、彼女を『幼馴染』ではなく、『幼馴染のく女の

子へ』として見ていた。そう、彼は初めから、自分と彼女の違いなどはっきりと分かつっていたのだ。

それを知らない彼女は、未だ『幼馴染』の関係に執着している。

「（馬鹿か、こいつは）」

そう思いつつ、口に出さないのは、彼女がそれを望んでいるからだった。

想いの伝わらない彼から、彼女へ。

その『心』が伝わる『当分先』はいつ頃なのか。

君の背中（後書き）

男の子（恋愛）（友情？）女の子
こんな関係つて、可愛い。男の子の成長つて早すぎて、ちょっと
寂しいよねつて言つお話をでした。

ネタ提供（無意識）の幼馴染に感謝。（残念ながら、現実では幼
馴染に恋愛感情はそういう持てない）

優しい嘘（前書き）

幼馴染愛好家シリーズ。年の差幼馴染カップル。その一は普通に過去編を交えつつな感じです。書くたびにヒーローが怪しくなつてくる。

優しい嘘

「ねえ、はじめお兄ちゃん。今日、沙夜のお家にサンタさん来る？」

クルンとした、丸い瞳がこちらを向いた。

今年小学校に上がったばかりの少女 上野 沙夜^{さよ}は彼女が生まれたときから一緒に幼馴染。お気に入りの真っ白なティベアを抱いて、こちらへとトテトテ歩いてきた。

風呂から上がったばかりで上気した顔と、少し濡れた髪を見て、やれやれと思いながら四歳年下の少女のほうへと行った。

肩まで伸ばしている髪が淡いピンク色のパジャマをぬらしている。このパジャマは、そういうえば彼女のお気に入りのもの一つだった。

「沙夜。髪が濡れたままで、こっちに来ちゃダメだって言つたら？」

風邪引いたら俺が美雪さんに怒られるんだけど」

そう言いながら、首にかけていたタオルを引っ張り、沙夜の髪に当てる。こちらも風呂上りで、母さんに言われて慌てて着替えてきたのだ。

「だつて、お母さんがいい子にしてないとサンタさんこないって……」

ティベアを抱く手がぎゅっと強くなるのを見て、内心やれやれともう一度首を振った。

美雪さんも意地が悪い。何も当口に言わなくともいいだろう。もちらん俺はもう、信じる年齢でもなかつたので、チラリと母親を見る。

母親は難しい顔をして、こちらを見ていた。

「で、今日は何をしたから怒られたんだ？」

沙夜の身長にあわせて屈み、髪を拭きつつ聞いてやる。

最近自我が芽生えたらしく、反抗期なんだそうだ。美雪さんが嘆いていた。『私も徹平も反抗期らしい反抗期がなかつたから、うち

の両親たちもお手上げなのよ』と苦笑いで語っていた。

「あのね。はじめお兄ちゃんのところで寝るつて」

しゃん、と萎むところとは、自分がわがままを言つているといふことを分かつてゐる証拠だ。自分にも少し見覚えがあり、少し苦い顔をした。

でもそれで美雪さんが怒つた理由が少しひがつた。俺はあの家であまり歓迎されない。

あそこの夫婦は代々幼馴染らしくて、美雪さんのご両親も確か幼馴染だつた。美雪さんはその呪いとも運命とも取れるソレから沙夜を引き剥がしたいらしく、幼馴染は作らないよつにしようつと思つていたらしい。

なのに子供を生んでもみると、四歳差とはいえ、幼馴染ができた。……怒り狂つていた美雪さんは小さかつた俺から見ても大迫力だったのを今も覚えてゐる。

「あ～、ほら、今日はクリスマスイブだるひ～、そんなときぐらいい一緒に寝たいんだよ」

フォローのつもりで言つてみると、最近わがままばかりの沙夜は怒られる度に俺のところへ来て俺のベッドで泣きつかれて眠るのだ。当然、今日もそうなりそうな気がする。ちなみに徹平おじさんは沙夜が俺のところに来るのは少しだけ反対らしい。

『この年で、娘を嫁に出した父親の心境なんじめんだよ』と笑つていた。

まあ、それはそれとして、夜に一人つきりで過ぐせることについては『嬉しいけどね。甘えられるから』と笑つてゐる。

俺が年齢の割りにませてていると言われるのは、この所為だと思つんだが、誰もそれに同意してくれない。

『美雪さんや徹平おじさんが寂しいだろう?』

諭すような言葉にも、沙夜はかたくなに首を横に振つた。

『沙夜ははじめお兄ちゃんと結婚するからいいの』

この子には俺を喜ばせる素質があると思つ。

たかだか四歳年下の女の子に落とされるのは、男としてどうかと思つけど、そんなことが関係なくなるくらいには嬉しかつた。

たとえ、何年か経つてそのことを忘れてしまつたとしても。

「あらあら、沙夜ちゃんは一を誘惑するのが上手ねえ。サンタさんも一にはこられないかしら？」

母がこじちらをみてにやりと笑う。

まるで、『これでうちの子は独身のまま一生を過ぐ』ではないわね』と確信しているかのようだつた。

「母さん！」

言葉の意味が分からぬ沙夜だからよかつたものの……と思う反面、もう少し大人になつてくれたらなあ、と思う。まあ、俺だってまだ小学生だけど。

「サンタさん、こない？」

泣きそうになつたので、慌てて抱き上げた。小さい彼女は本当に軽い。こつん、と額同士をつけ、沙夜に視線を合わせる。

「沙夜。サンタさんは来るよ」

「一せん？　はーじーめーせん？」

トントントン、と階段を上つていぐ。

今日はクリスマスなんだから、好きな人に会いたくなるのは必須だと思つんだけど、どうも四歳年上のお兄さんはそうではないらしい。

まあ、完全な片思いなんだけど……。もうずっと、この生まれてこの方、十六年間ずっと、片思い中なんだけど。

「一せん？　入るよ？」

もう何年も繰り返されてきた動作だ。

始めのうちはノックさえしなかつたんだけど、何年か前に着替え中に入つてしまつたことがあって以来、きちんとノックするように

なつた。

返事がないので入るうか入るまいか迷つたけれど、いることは確かなので部屋へと滑り込む。音楽でも聴いてるんだろう。

それでそのまま論文でも書いてる。それが最近のパターンなんだから。

「あ、やつぱ……アレ、ヘッドフォンしてない」

机に向かっている一さんの耳には、ヘッドフォンがされていない。かといって、イヤフォンとうわけでもないし……。

「寝てる……？」

細心の注意を払い、足元に乱雑に積んである本をよけ、机へと到達する。

わけの分からぬ本に囲まれて、一さんは組んだ腕の上へ顔をおき、寝ていた。顔のいい人は寝顔見られても気にしないはず。私なんて、寝顔なんか見られた日には憤死する。

「一さんが相手してくれないから、私は帰りますよ？」

一瞬、本当に一瞬だけ、唇でも奪つてやるうかと考えたけれど、『実は起きました』なんて少女漫画的な展開はイヤなので止めておいた。

プレゼントだけおいて帰るうつと思い、もつていた箱を邪魔にならないように机の上に配置した。

そしてまたそっと本に氣をつけて足を踏み出そうとした。

「沙夜」

びくりと心臓がはねた。

寝た振りしていたの？！ そう聞き返そと振り向いても、一さんは寝たままだった。そのまま一さんはまた言葉を紡ぐ。

「サンタさん……ちゃんとくるから」

いつだつたか、何年か前に言われた言葉だ。

わがままばかり言っていた私に、母がサンタさんは来ない、と言つた。それを聞いて、哀しくなつて、すぐに一さんのところへ来たときに行われたのだ。

それで、安心した。きっと、一さんが言うなら絶対なんだりつつて、無条件に信じきっていた。

「サンタさん、いるの？」

そして、その後、聞いたのだ。

意地悪な男の子が、私に『サンタさんはいないんだ』と言ったから。それを話すと一さんはほんの少しだけ眉をひそめて。

「いるんだよ」

沙夜は、どつちの言葉を信じるんだ。俺と、同級生と。

「また、嘘ついてる」

そして、月日が経ち、私もサンタクロースを信じる年ではなくなつたとき、一さんを嘘つきと呼んだ。

『一さんの嘘つき！ もう信じないんだから』

一さんの優しさを理解するほど大人ではなかつたけれど、じども扱いされたのがひどく気に障つたのだ。

でも、確かに私は。

「一さんのたくさんの中元に元気付けられているんだよね」

それがほんの少し、分かり始めたとき、謝るには遅すぎる。

「ありがとう……一さん」

優しい嘘を、また私にくれますか？ 嘘でも、私はきっと。

「嘘でも、私、多分喜ぶんですよ？」

本当の言葉が欲しいとは、さすがに言えないから。

バタン、と扉が閉まつたと同時に顔を上げた。

「俺、今絶対人に会えない」

独り言のように呟くと、赤くなつてゐるであろう顔に手を当てる。

「自分の言葉の力を知らないって……タチ悪いな」

クリスマスの力を借りて、告げてしまおうかとも思つていた言葉を呑み込んだ。

「空気に流されるのは、イヤだろ」

「にやり、と笑う。欲しいのなら、いつだって、手に入れるまでだ。」

「美雪さんに、殺されるかも。俺

正直じゃない男の子が、素直じゃない女の子を手に入れるまであと何ヶ月？

優しい嘘（後書き）

ヒロイン ヒーローですので、甘々好きな人はよい
かも……しれないです。はい。珍しく、甘い感じを目指してますよ。

St · Valentine · s Day(前書き)

少女小説もどきとしては、書いておかなければいけない感じのシチュを一つ。年の差が多分、最高潮だったんだらうなと思います。

そもそも、バレンタインデーと言つのは、日本のお菓子業界の戦略であり、決して日本人がもつてゐるチョコレートが正式なイメージとは言いがたく、むしろ外国では男性から女性というのも珍しくないし、バレンタインデーとは元々一人の司教様が元になつていて……。

「何ブツブツ一人で言つてんのよ」

そこで私はうんちくを打ち切つた。強制的に終わらせるを得なくなつた。

私の目の前にあるのは、目の回のほど沢山詰まれたチョコ、チョコ、チョコ。

どこを見渡したって、その他の商品は私の目に映らない。ついで言つと、その棚と棚の間にいるのは全て女性だ。

つまりは、チョコレート売り場だ。

「来るんじゃなかつた」

自然とこの言葉が口をついて出てきた。そんな私を、一体誰が責められるだろう。いや、攻められない。が、私をこのチョコ専門店に連れてきた我が友人なら、あるいはするかもしれない。

「本当に、そんなこと思つてるわけ？」

ほら……。彼女の手にはすでに十数個のチョコが入つてゐるかごが。

「か、彼氏のチョコを買いに来るだけじゃなかつたのか、お前は」皮肉にならない程度に、しかし抑えきれない怒りを混ぜて奴に

木村百合に問う。

奴は今日、私にこうのたもうたのだ。

『彼氏のチョコが決まらないから、一緒に来て欲しいの。三年目になつてるんだから、つて思うかもしれないけど、特別なことがしたいから』

と。

だから私は、わざわざ用もない、この店に来たのだ。が、しかし、奴はにこりと笑って答えた。

「そんなの嘘に決まってるでしょ？ あいつに特別なことがしたいなんて、そんな時期とっくに過ぎたわよ。全てはあなたのためよ」今年で三年目と言う奴の彼氏殿は、一体どうやって奴の手綱を握つているのか。

私は今、それが無性に知りたくなった。ぜひ二つの扱いからを教えてください。彼氏様。

しかしすぐさま。

『百合の扱い方？ そんなのあるわけないじゃないか。もう、沙夜ちゃんは分かりきつたことを〜。

百合は扱うものなんかじゃないよ。人を扱うなんて、ありえないだろ？』

といつのほほんとした、しかし結構まともな回答が返ってきた気がした。

今もし、彼がいたなら間違いなくそう答えていただろう。百合の彼は、百合の性格に似合わず天然癒し系だ。

可愛いというのもしれない。そんなことを考えながら、私は百合へ向き直った。

「私のためつて言つんなら、今すぐこの店から出る。それが望みよ」百合の手首を掴み、私はレジへと向かつ。が、悲しいかな体格は百合の方が私よりはるかによい。

ゆうに一六〇？を超えているのだ。一五〇？ちよいの私が敵うはずもない。

「あなたも買づのよ」

奴が一回私を引っ張れば、私に抵抗する術はなかつた。

「私には必要ない！！ 一体誰にあげるつて言つのよ」

「そんなの彼に決まつてるじゃない」

『彼』ねえ？

「もう、沙夜のテレビ屋さん」

そんな言い方されても気持ち悪いんですが。

「一くんよ～～」

ウフフって、お前が一番気持ち悪いわ。

「は、一くんって、一さんのこと?」

何で、何で、何で百合がそんなこと知ってるの?!. しかも”くん”付け? 私より馴れ馴れしい気がするのは私だけですか?!. 一くんっていうのは私の家の隣に住んでる、四歳年上の兄さん。

もうただの、お兄さん。

「べ、別に一さんには買わないよ。ってか、何であんたが一さんを知ってるの?」

平静を装つてみたものの、それが失敗したのは自分でも分かった。どもつて、焦つて、顔が赤くなるのが分かつたけれど、誤魔化す術を私は持つていない。

ふーんという百合がものすつじく憎らしい。

「彼氏の、晴夏はるかのお友達なんだって」

ケロリと言つてのけた。そうね、世の中結構狭いものね。そんなことも、あるわよね。

百合の彼氏つてのほほんとして、優しくて、誰にでも好かれるタイプだもんね。友達だつて多いわよねつて、納得できるかあ!! 「じゃあ、何で私が一さんにチョコレートあげる、っていう設定になつてると教えてくれる?」

「一くんが隣の家の女の子が、すつじく可愛いって言つてたから、何があるなあ。と思つてたのよね。そもそもあんたが可愛い、とかどうなのよ」

そんなん、本人に失礼だと思わないんですか? 百合さん。可愛いつてどうよ、とか。

「もう、沙夜は本当にテレビ屋さんだからなあ」

からかうような声で百合は言い、ついで真剣な顔を私に向けてき

た。

「そんなことしてると。いくら沙夜思いの、『一さん』でも他の子に取りれちゃうかもね」

わざとらじい言い方。わざと『一さん』と言つてこるのが、何だか悔しくて……。

確かに一さんは優しい。ちよつと優しすぎる感じじゃないかって思いうくらいい、優しい。

私に甘いのも周知の事実だ。小さい頃から、これでもかといつほどに一さんは私に甘かった。自分でも『一さんって甘いよなあ』と思う。

だけどそれは少し年の離れた妹を溺愛するようなもので正直、複雑以外の何ものでもないのだ。

それなら、少し意識して、距離を置かれるほうが余程脈ありと言うものではないだろうか。

だから今年は、毎年あげていたチョコをあげるのはよせつと思つていた。

百合が何か言いたげな顔でこちらを見る。あまりにも長い間黙り込んでしまった私を心配しているのが分かつたが、あえて気が付かないふりをする。

百合を構つていられるほど私の心に余裕があるわけではないから。少し困らせたいというのが、本音かもしれない。百合のことではなく、一さんのことだけ。

いつも私の前で穏やかに微笑む顔を崩してやりたかったのかもしれない。

どうせ私がチョコをあげなかつたくらいで、動搖なんかしないだろうけど。そんなこと分かりきつているけど。でも、何かやりたかった。

「そうかもね」

やつとのことで言葉が出た。その言葉に百合は意外そうな顔をしてこちらを見る。

「沙夜？」

「さんはただのお兄さんで、私はただの妹で。きっと家が隣でなければ、接点も何もなくて。

顔を合わすことさえもなかつたかもしれない。なのに、なのに、どうして。

どうして、それが分かっているのに私は今、顔と目頭が熱くて、今にも泣き出してしまいそうなんだろう？

「百合」めん。私やつぱり帰るわ」

百合はもう、私の手を掴んではなかつた。私は逃げるよひに店から出た。

人の喧騒から逃げるよう人に通りの少ない方へと走る。にぎやかな通りから見えるチヨコたちと、それを嬉しそうに買う女性たちがひどくうらめしかつた。

と、その時、見慣れた姿が前をよぎる。

「はじ……」

声をかけようとして、やめた。

今まさに考えていた人に、八つ当たりのようになんていた人に、話しかけたくないという幼い意地と、一さんの前にいる女人人が気になつたから。

長い髪をゆるいカールにして垂らし、いかにも女の子と言つ人。フワーンと揺れる髪は柔らかそうで、女の私でも見惚れた。遠くから見ても分かる、ケアのしっかりされた髪と顔が、私との落差をうかがわせた。

可愛らしい、ふわふわとしたコートに短めのスカート。そこから形のよい、長い足がすらりと伸びていた。

いかにも清楚です、というラインで固めてあり、あちこちの男性が振り返っていた。

顔を赤らめて……。ああ、一さんに気があるんだなあつて分かつた。一さんと同じくらいの年、綺麗で一さんの隣にいてもおかしくない人。

違和感なんかなく、つりあつてている人。

私みたいに幼くなくて、十人並みの顔じゃなくて、素直でひねくれてなくて。

涙を流すと惨めになるだけだから、それが分かつていてから、唇を噛んでそれをやり過ごす。顔を上げて、零れないようにせき止めた。

「私つて、運悪いなあ」

何も思い人が告白されるとこになんて出くわさなくて。くるりと踵を返し、駅へと向かう。

ここで鉢合わせとかになつたら、さすがに泣いてしまっそりな気がした。

ルルルルル ルルルル

友から色気も面白みもないといわれる着信音。

面倒だからと言う理由で買つて以来、一度もえていない。あの子からの電話とメール以外は。

あの子は嬉々として、自分の好きな歌手の着うたを入れて設定したから。

それを変えずに、あの子からの電話とメールだけ音楽がついていたら、特別だと皆に知らせているようなものだと思ったが、変えるのももつたいくなくて結局そのままにしている。

ディスプレイを見てみると、一度今考えていた子の友達だった。

最近では少し珍しい、着信。

「もしもし？」

「あ、一くん？」

「いつから”一くん”呼ばわりされ始めたのか聞いてみたい。

「何ですか？ 木村百合さん」

この子の彼氏とは友人だが、電話をされたのは初めてだ。一体何の用なのか。

「ああ～～。怒らないで聞いてくださいね」

そう前置きされると、俺を怒らせる何かが起きたのかと危惧してしまった。

彼氏を振ったとかか？ でもそんなんじゃあ怒つたりしないしな。本人たちの勝手だし……。

後、この子との共通点といえば、あの子しかいない。しかも、俺が怒ることと言えばそれしかないようにも思えた。

「言いにくいくらいんですけど。その、ちょっと突つつきすぎちゃいました」

ぷつり、と何も言わずに電話を切る。

これくらいの意趣返しひらい多めに見てくれるだろう。誰を、突きすぎたなんて言わない、けど分かる。

彼女はわざとおどけているが、その実とても焦っているのが分かつた。すぐさま家に帰ろうとした、が面倒はまだ残っていた。

「ねえ、伊藤くん」

あの子より長い髪。あの子のしない化粧を、香水をしている”女”。あの子のするような無邪気な笑い方を知らない人。

何もかもを比べてしまい、小さな自己嫌悪が自分自身に襲い掛かる。

上野 沙夜 それがあの子の名前。四歳年下で、現在高校一年

生。小さい頃から俺を”兄”として慕う可愛らしい妹。

小学校低学年くらいの時は「お兄ちゃんのお嫁さんになる」と言って、随分と俺を舞い上ががらせてくれた。

「あのね、あたし伊藤くんのことが」

「ごめん」

彼女の言葉を遮った。何に対しての謝罪なのかは自分にも分からなかつた。

しかし、彼女は小さく笑う。あの子にはない、じつこじつことが慣れた笑み。

「さつきの、彼女？」

「いや」

短く答えると、彼女は”そだと思った”と笑みを深くする。先程までの恥らうような顔は嘘のようにその表情を消していた。そして再度、口を開く。

「きっとあなたを射止めるのは、色氣があつて知識が豊富で。あなたの隣にいても違和感や、遅れもないよくな人 だと思つてたわ。今の今まで。でも、違うのね？」

どこか確信めいた、言いきるような言葉に頷いた。

「そうね、可愛らしい子、かしらね。さつきの惚けた顔からすると。しかも、ちょっと年下。四、五歳ぐらいかしら？」

事も無げにそう分析した彼女の顔を驚いて見ていると、彼女は俺の顔を見て『バレバレよ』と艶やかに微笑む。

「何か緊急事態なんでしょう？ 行かなくていいの？」

そう言われ、はつとすると彼女は俺の背中に手を置いて小さく押した。

「失恋させた女の前に長くいるのはルール違反なんだからね？ 逃げ去るようす早く立ち去りなさいよ」

強気にそう言う彼女は、泣いているようには聞こえなかつたが強がつてているようにも見えてしまった。

「俺、もう行くわ

言い訳のようにそう言つと、駅の方へと足を向けた。早く、早くと気ばかりが逸る。

電車を待つのも、家へ歩いて帰るのも、いつもの倍かかった気がする。実際はいつもの半分の時間だったが。

家の前に着き、そつと隣の家の一階に目をやつた。

あの子の部屋に電気はついておらず、それでも携帯に手をかけた。滅多なことでは自分からしない電話。

電話帳の一一番上のグループは「〇〇」。そこには沙夜のものしかない。

そのボタンを押そうとして、止めた。強がりの得意なあの子を崩落させるにはどうしたらいいか。
付き合いの長い自分は分かつているはずだ。分かつているはずなのに、冷静さを欠いている自分がいる。

そもそもと布団から出る。母も父もいないことが珍しく夜勤が重なったことが唯一の救いだった。

こんな風に、泣き出しそうな顔なんて、見られたくない。

両親は明日の昼以降に帰るはずだから、それまでには何とかなるだろうと勝手に、希望的観測込みで推理する。

だから、布団から出たくないなら今日はもうこのまま不貞寝もできてしまう。

しかし布団の中で拗ねるのも馬鹿らしくなった。幼い行動を取り続ける自分に嫌気が差す。

こんな自分のぐせに、一さん近くにいた彼女へ嫉妬するなんて。馬鹿みたい、馬鹿みたい、馬鹿みたい！！でも、でも、でも！！

「一さんのバーカ」

少しくらいなら一さんに非があるもん。そうだよ、一さんが、妙に甘いから。

「馬鹿でじめん。沙夜」

笑いを含んだ声が耳朵をかすめ、思わず『ヒヤッ』と声を上げた。一さんの声は普通に聞いても心臓に悪い。耳元なら威力は倍増だ。「な、なつ……何でいるの？！」

しかしその問いは、一さんの持つていてる小ぶりなお鍋と猫のキー

ホルダーがついた鍵で解決した。

つまりは両親がいないことを心配したおぜたご（一せんのおお母さん）は、『お夕飯のおすそ分け』と称して、一せんを私のところへ行くよつて言つたとこいつことだ。

ちなみにおばさんは変なところで鋭いので、私の気持ちなんてとつぐの昔にあばかりている。

だからわざわざ一せんが帰つて来るまでうちには来なかつたんだ。

「ふ、不法侵入で訴えてやる」

苦し紛れに出た一言に一せんは目を丸くする。

そして、ポンポンと頭を叩き、「沙夜がそんなこと言つ年になるとはね」と呟いた。その発言は私の神経を逆なでするのに十分すぎた。

「それ、どういう意味、一せん。私だってこのくらい知つてるわよ！」

囁み付くよつて言つて、その幼さに小さな後悔が生まれた。しかし言つたことを撤回しようなんてこれっぽっちも思わなかつた。

その様子を一せんは笑いながら見ていた。実はこの笑顔が大敵だなんて、誰も知りはしないだろつ。

「ハイハイ。俺が言つたのは、夕食を持つてきた隣のお兄さんに、不法侵入なんてことを言い出す皮肉屋になつたんだねつてことだよ」

宥めるようなその口調とは対照的に、その内容は私を馬鹿にしている以外の何者でもなかつた。

私を宥めようとしているにもかかわらず、まるでその気がないような言い方。

いつもなら、踊らされてるな、と思つても怒れないような言い方をする一せんにしては珍しいことだつた。

それを分かつていながら、一せんにしては珍しいながら、それでも治まるような怒りではなかつた。

「お兄さんなら、妹の部屋に勝手に入つてこないでよ。嫌われちゃ

うよ、お兄ちゃん」

皮肉半分、自嘲半分。その台詞を搾り出し、私は一さんを部屋から追い出した。

そしてその扉に背中をつけた。鍵なんてものが付いているはずもないのに、背中を付けたままそこにズルズルと座り込んだ。コソ、と頭を扉に持たせかけ、足を伸ばした。しわくちゃになつているスカートのプリーツと、脱ぎっぱなしのままベッドからずり落ちるブレザー。

どれもこれも、一さんとの違いを表していて。
涙が、こぼれそうだ。

「沙夜」

呼ばれる。この声に、私は抗えない。それは、抗うことさえ許さないと言われているようだ。

背中越しに感じるのは、扉の冷たさ……それと混じる人の温かさ。背中合わせで座っているのに、扉なんてそんなに厚くないはずなのに、体温以外は何も伝わらなさそうだった。

「一さん、なんて」

一さんなんて大嫌い、そう言つたら、この人は何か反応してくれるだろうか。少しは、動搖してくれるだろうか。

「俺なんて？」

その声は楽しんでいるようだった。少なくとも私にはそう聞こえて仕方がなかつた。

私に追い出されながら、私が唇をかみ締めているのをえ分かつていながら、まだ私をからかおうとするの？

「嫌い」

”大”はつけれなかつた。私が言いたくなかったから。

「へえ」

少しだけ、少しだけ声が低くなつたように感じた。いつもみたいに、穏やかそのものの声じゃない。

怖い、男の人の声だった。一さんは好きだけど、改めて一さんが

『男の人』なのだと感じた。

「俺、十年間沙夜を思い続けてきたのに」

振られちゃったな。一さんはおどけるようにならう言つた。
その言葉がどんなに私を揺さぶるか、どんなに私を傷付けるか知
らずに。知らず、涙がこぼれた。

「嫌い」

沙夜のこの言葉に、ここまで威力があるとは正直思わなかつた。
多少のショックは覚悟していたけれど、自分の思考回路がとまる
ようなことは想像もしていなかつた。

どうやらこの病、自分が思つてている以上に重症らしい。いや、前
々から重症だと自覚はしていたけれど。

それでもこの娘には動搖する自分なんて見せたくなかつた。

「へえ」

震えそうになつた声を押さえ込むように出した。ばれたりはしな
いだろ? うか?

そしてそれを隠すように、さらに言葉を紡いだ。おどけるように、
まるで何でもないようにならう言葉を口から出した。

「俺、十年間沙夜を思い続けてきたのに」

「」

扉の向こうから、何かを堪えるように声ならぬ声が上がつた。
沙夜? と声をかけると、小さな声が聞こえた。

「一さんは……、まあ」

涙声になつていて、びくりと肩を震わせた。

「そんなこと言つて 私のこと妹にしか見てないくせにーー! 何
でそんなこと言つのーー!」

怒りをはらむ声。それでも弱々しく、思わず腰が浮いた。

「分かつてゐるの！？ それで私誤解しちやうよ！？ 一さんが私に甘いのは、私が、妹みたいだからなんでしょう？」

なら。ならもう、そんなこと言つて、私に希望持たせないでよ。お願いだから、もう、やめて。これ以上、甘やかしたり、優しくなんてしないで、お願ひ

涙をこらえるほどに、強くなる声。聞いているこっちが痛くなつてきて、それでも沙夜の涙を止める術を知らなかつた。

一番泣いて欲しくない女の子を、泣かしている自分。自分でやつたことの始末もできない子どもな自分。

欲しくて欲しくてたまらないくせに、素直にそれが言えない自分。素直に好きだと伝えることができない、自分。

「一さん、帰つて」

「沙夜」

「帰つてつてばあーー！」

やつと出た声に続く拒絕。その後も続く嗚咽。もどかしくて、痛くて、悔しくて でもどうしようもない。

自業自得なうえにこの娘まで巻き込んでしまつた罰だから。

「沙夜。俺はさ、我が仮言いたくても言えない沙夜が好きだよ？ 優しくて、でもそれを表に出すのは苦手で でもちゃんと分かつてる。沙夜は優しい。そんな沙夜が好きな俺じゃダメ？」

力ちやりと扉が静かに開いた。扉に寄りかかっていたままだった体は、抵抗も何もなく重力にしたがつて床に沈んだ。

「一さんのバカ」

「ハイハイ」

顔を目も赤くした沙夜がいた。ショートカットといつには少し長すぎる髪にまだまだ幼さが残る顔。床に倒れたまま、沙夜を見つめた。

上から覗き込まれ、その拍子に最後の一滴が零れ落ちた。その零が頬に落ち、それはそのまま流れた。

「それじゃあ、誤解しろって言つてるもんなんだよ？ それを分かつて、まだ私をからかうの？」

「からかってないよ」

今度は割合素直に言葉が出た。そう思い、そつと息を吐き出した。

「誤解、しちゃうよ？ いいの？」

「いいよ」

こくんと頷き返せば、沙夜は再び泣き出しかねた顔をした。

「バカ」

「ハイハイ」

「バーカ！！」

「うん、そうだね」

俺はバカだよ。そう返すと、沙夜は”そんなことない！”と即答する。

そして自分が言つたことに気が付き、口元に手を当てた。その顔はほんのりと桃色に染まる。

「本当に、誤解しちゃうよ？」

それでもしつこく聞いてくる沙夜を黙らせるために、沙夜の腕を引っ張つた。

ポスン、と一回りも一回りも小さいからだが腕の中に納まる。沙夜は急に大人しくなった。

「誤解、でもないけどね」

呟くようにそう言えば、腕の中で小さく動く気配がした。

「女人からたくさんの中を貰つておいて、よく言つね」

自分の腕の中から声が上がる。服に顔をうずめたまま、決してこちらを見ようとなんてしていなかつた。

それは、彼女の照れ隠しだと分かっている。しかし、その言葉は照れ隠しゆえの嘘とも思えなかつた。

少しだけふてくされたような言葉の意味を取りかねた。

「はい？」

そう返すと、キツと沙夜が顔を上げる。その顔は見事なまでの朱

色だった。

「きょ、今日、貰つてたもん。キレーな女人の人からつ！！」
最後のほうはもう意地になつて言つた、と言つ氣配がこじみ出で
いる。

そして、沙夜はそんな自分を恥じ入るよつにフイつと顔を背けた。
何、この可愛や。

どうしよう。すつじく嬉しい。どじまで単純なんだよ、俺。
と、つっこみながらも緩みそうな頬を引き締めた。いつも穢やか
な表情といわれるが、意識して作るなんてほほ初めてに等しい。

「何、ソレ？ やきもち？」

意地悪をしてそう言つと、赤い顔が一段と赤くなる。

『ひ、違 う、もん』と聞き漏らしそうなくらい小さな声でそ
う言つも、説得力はない。全く、ない。

「大丈夫だよ。沙夜。俺は沙夜以外からチヨコレートなんて貰わな
いつて決めてるし。

実際、もう何年だ？ 物心ついてからだから、一〇年以上その決ま
りを守つてるぞ。俺は「

ギューッと服を掴む沙夜の力が強くなり、また顔をうずめた。フ
ルフルとその手が震えて、なんだか自分が 犯罪をやつている気
がしてならない。

数十秒たつて、沙夜は小さく息を吐いた後ゆつくりと言葉を紡い
だ。

「一ちゃんは、私に甘すぎるとと思つ

ぐぐもつた声にニヤリと口角が上がるのが分かる。

「ん~。そんなこともないけどなあ。

結構、沙夜に甘いのは自覚してるけど、つてかよく言われていい加
減認めてるけど 甘すぎつてほどでもないと思うよ、俺は。多分。
その証拠に、これから俺にチヨコを用意していない沙夜にお仕置き
しようかと思つてるし」

俺つて好きな子いじめちゃうタイプだつたんだ。と納得したよ

うに咳くと、サディスト……と咳くよつた声が聞こえた。

「どんなこと、して欲しい？」

そう聞くと、沙夜はガバッと顔を上げた。すごい勢いだった。

「わ、私、Mじゃないもん！！」

何となく、ずれた回答だつたが、そんなこと関係なかつた。

「すきあり」

沙夜の頬に唇を押し付ける。沙夜の全ての行動が止まつた。一秒、一秒……三秒。

「は、ははははーさん」

先程とは比べ物にならないくらい朱い顔。自分の頬を押さえ、懸命に言葉を紡ぐとして失敗する沙夜が、すぐ、すぐ 可愛くて。

「あーー。俺、末期だわ。完全に」

頭を押されて、上を向いた。まだまだ幼いこの娘に、俺は悪いことを教えていい気がしてならない。

いや、教えているんだろう、もうすでに。

こんなこと考えているなんて、きっと沙夜は知らない。教えるつもりもない。

だつて。

「一さん、何かの病気なの!? 末期つて!! 大丈夫なの? ねえ!!」

真面目に俺の身体を心配している沙夜にこんなこと言えない。言えるはずがないだろう。

St · Valentine · s Day(後書き)

年上の余裕は結構、ギリギリといつことでしょうか。それともただたんに一さんがむつりと、いうだけかもしません。

女の子　男の子と見せかけて、実は女の子　男の子の構図がツボ。あと2話くらいブログに載っているので、ホワイトデーもHPでできます。書きだめはしどくべき。

ねぬこね田口（繪書）

前回が英語だったので、今日は日本語。安直ですか？　自覚はしてあります。彼氏さん田線とこののは単純に面白い。

「晴夏^{はるか}……」

「ん~?」

「俺たちは何をしてるんだっけ……」

「愛しの彼女さんたちに、バレンタインマークのお返しを貰つてゐるんじゃない」

結構まともな、というかすつじくまともな答えが返つてきた。それは、そうだ。そうなんだけど。

「どうして、男一人で雑貨店に入らなきゃいけないんだ」「押し殺していくも、怒りは通じるらしい『何がいいかな』と考えていたらしい友人がこちらを見た。

「何? 一こうこうところ苦手?」

まだ寒いのでマフラーをつけている友人が笑う。真っ白いマフラーをつけて似合つのは、一いつだけじゃないだろうかと思つてしまふ。

「お前と違つて、俺はこいつこいつ男と一人ではいる趣味はない

「僕もないよ」

さらりと答えて、晴夏が再び店の中へと視線を移した。

「どうせ^{はつ}一のことだから、もう用意はしてるんでしょ。いいじゃん、僕に付き合つてよ」

未だに百合の好みつて分かんないんだよね、と晴夏は笑う。性格そのままの雰囲気と話しかたで怒る氣も失せた。

「何買ったの?」

「ぬいぐるみ」

答えると、晴夏はびっくりしたようこちらを見る。ただでさえ

女のように大きな目をことさら大きく見開いたのだ。

一瞬、こいつの彼女よりもこいつの方が可愛いんじゃないだろう

かと思つてしまつ。（失礼）

「…………、そんなの買つてゐるの」

「沙夜はそれで喜ぶんだよ」

何がほしい？ と毎年聞く。普通の女の子ならアクセサリーや何かを頼むはずなのに、毎年沙夜は『ぬいぐるみ』と答えるのだ。
「はあ、あの沙夜ちゃんがねえ。見る限り、ぬいぐるみ愛好者には見えないよ」

「そりゃ？」

毎年選んでいるので、かぶらないかどうかだけが唯一の心配だ。
ぬいぐるみと言つても『何の』かは限定されていないだけマシではあるが。

「でもつ。一がぬいぐるみ持つてレジ並ぶの見てみたいかも」

笑いを抑えきれないように、晴夏は笑う。

「お前にだけは見せれない」

「どうせ、ちょっと怖い顔してんでしょう。店員さんかわいそー」
まだ止まらないらしく、くつくつと少しだけ頭にくる笑いを続ける。

「早く決めろよ。あと一時間後なんだろ。約束」

「は？」

「俺は夕方。どうせ家近いし」

「両親公認だし？」

ぱっと晴夏のほうを見ると、ニヤリと顔に似合わぬ表情を出した。
『この子』が『天然癒し系』だ。ただの優しい顔した詐欺師だろうが。

心中で『晴夏さんは優しそうな人だよね』と笑つた沙夜に文句を言つ。

「沙夜ちゃんの両親はまだ知らないんだつけ？」

「知つてるけどあえて黙つてんだる。おばさ……美雪さんに殺されるまであと少しだつてこと」

怖いんだよなー、と言つと晴夏は『何？ まだ沙夜ちゃんのお母

さん、認めてないんだ』と首をかしげた。

『諦めればいいのにね。大体、自分だって幼馴染と結婚してるんだし』

「それも不本意なんだろう。『マインドコントロールで恋愛しているみたいでイヤだ!』ってプロポーズ一回断つたらしいし」

「うわ。一、気をつけないとそれは本当に危ないかもね」軽口をたたきつつ、店内を見回すと一つのものに目が行った。

「一? ああ。やうじょうのもいいね。おそらく買う?」

晴夏が笑う。

「お前の彼女と、だる」

「それもそうだね」

ソレの一いつを手に取った。

「はい。バレンタインデーのお返し」

「今年は何のぬいぐるみ?」

少し大きめの袋の中には柔らかなモヘアの毛皮のテディベアが座っている。薄茶色の肌に、真っ黒な丸い瞳が二つ。無邪気な瞳は沙夜を見つめる。

「可愛い!」

さやーと歎声を上げ、小さなテディベアを抱き上げて抱きしめる。しかしそこで何かに気がついたのか、いったん体からテディベアを離した。

「何か……いい匂い」

スン、と鼻を動かして、テディベアの胸元に気がつく。

「コレだ」

指でテディベアの胸元にかけられているシルバー・ペンダントを弾

いた。

「アロマペンダント、だって」

「アロマ?」

「アロマオイルをこの中に入れて、匂いを楽しむ。沙夜最近よくアロマ焚いてるだろ?」

市販のでも入れて大丈夫なんだって。

「そりなんだ。だからいい匂い」

ありがとう、と沙夜が笑う。毎年、この笑顔を見るためだけに『我慢して』ぬいぐるみを買っているのだ。

「この匂い、何?」

「ネロリ、だつたかな」

美しい透かしの入った、ドロップ型のペンダント。その透かしから柔らかな、優しい花の香りが漂ってくる。

「優しい、香りだね」

この子にぴったりだ、と沙夜はティーベアを抱きしめた。

……そしてそのペンダントはしばらく『ティーベア』のアクセサリーとなる。

「それ、沙夜がつけるんじゃないの?」
と友人が言うまでも。

お返しは白由（後書き）

ホワイトティーでした。アロマ&ティベアは私の永遠の癒しと疑いません。大好きです。

と、いうか短いですね……。ブログからだつたので、コピペして初めて気が付いた。書く年数が長くなると、文章も長くなるのか……。

それとも短くまとめられなくなっているのか。ともあれ、更新できて一安心です。

first (前書き)

ただのロッキンとか言われても、彼は平氣だと思います。そして多分、本当にロッキンなのではないかと最近思っています。

そのきつかけはささいな友人の意見だった。

「で、どこまでいったの？」

頬にキス、では遅すぎるんじゃないでしょうか？

「遅いでしょう」

「そりかなあ」

「……一さん、可哀想に」

友人の同情したかのような発言に眉を寄せれば、彼女はにかつと笑った。

「ま 沙夜はお子ちゃまだからね」

お子ちゃまつて、やっぱり幼いってこと？ 彼とはつりあわないつてこと？

「遅いのかな。一さん」

我が彼女殿は実にあつけらかんと、あけすけもなく言つた。一瞬こちらの思考回路が止まろうが、ショートしちょうが関係ないということだらうか。

むしろ、狙つてるんだろうか。狙つてるんだろう。もし狙つてないなら、相当タチ悪いぞ！ 沙夜。

「さあ……。人それぞれなんじやないか？」

何とかそう切り返す。この娘、本当に新学期から高一なんだろうかと思つてしまつ。

春休み中、沙夜は何をするわけでもなくこちらへ来ては、ゴロゴロしている。

もちろん、勉強道具を持つてきて、それらしいことをしているように見えるが、半分以上は俺がやっているようなものだ。

「一さん。この問題、×も×も○（ゼロ）になる

「なるわけないだろ？。一つを代入したとき、この式は4になるんだろ。×も×も〇なら、ここは〇になるはずだ」

「そつか。アレー。どうして？」

そう言いつつ、ノートと解答を交換りばんこに見つめる。その様子を横目で見ると、まだあどけない。幼い、と言つてもいいだろ。本人にいえば間違なく怒られるが、こちらから見る限り、沙夜はまだまだ子どもだった。

反面、ペンを片手に考えつつ、垂れてきた髪を耳にかける仕草はどきりとするほど色っぽい。（変態と言つてくれてかまわない）……変な目で見て、いるわけではないと、一応言い訳はさせでもらうが。

「よつて、この式の連立方程式を最後に解けば、この問題は解決。連立は簡単だろ？。一見複雑そうに見えて、連立方程式だと思えば、この問題もそつ難しくないってわけ」

そもそも、この問題の難しいところは……、と言いかけて、沙夜がこちらを向いた。純粹な目であることは間違いない。

「でも、付き合って一ヶ月でどこまで行けば、人並みなのかな？」
また戻った！ 乗り切ったと思ったのに、また振り出しか。このやろー。

「さあ、どうだろ？」

それだけいつて、等式を書く手元に集中する。これで諦めてくれればいい。むしろいつそ、忘れてしまえばいいのに、そんな話題。「百合は』一さん、は、間違いを起じたなやうだよね』って言ってたよ」

バキッと、書いていたシャーペンの芯が折れる。いや、もう、俺の心が折れた。シャーペンよりこっちが重症だ。ついでに流れるように書いていた等式の内容が頭から吹っ飛ぶ。

やばい、高校一年生の数学が分からなくなるつて、大学生としてどうだ？ しかも理系で大学受験したのに。

「『間違い』って何？ 一さんは、つてことは、他の人は間違うの

？」

ひょんっと後頭部で一つにまとめられている髪が揺れた。
かけていたはずの残り髪がまた頬にかかっている。あらわになつ
ている、それまでほとんど意識しなかつた白い首筋が艶かしく感じ
る。

あー。完全に変態の思考だ。美雪さんに殺される。
むしろ、自分自身で、自分って人間としてどうなんだらうと思つ。
ずっと妹みた的に思つていた子を、こんな目で見るなんて。
変態か、変態なのか。

「沙夜」

ちょっとちやんと話さなければいけない気がした。（父親の心境
とでも言つておこう）

「何？ 休憩？」

先ほどから一回も使われていなないペンを投げ出し、すぐさまベッ
ドへダイブ。

誘つているのかと膝詰めで説教したいところだが、残念かな本人
はとっても無意識のうちにやつてしているのだ。何も言えるはずがない。
と、言つたが最後、彼女はここのへ来ない気がしてならない
い。（あながち間違いではないだろう）

今まで培つてきた理性を総動員し、沙夜が寝ている少し横へ座つ
た。沙夜が下から不思議そうにこちらを見る。そんな目で見ないで
ください。頼むから。

「一さん？」

「沙夜、よく聞いて」

そつと髪を撫でると沙夜はされるがままで目を開じた。そして小
さく擦り寄る。猫並み……いや、それ以上に可愛い。

あー、もう、下心なんて抱く人間が悪いみたいだ。

「俺は沙夜の兄じゃないし、まして父親でもない」

「知ってるよ」

瞳を開き、無邪気にそう言つ。

それは分かつてゐるよ、とにかくも笑顔を返した。

「沙夜が好きだし、大切だ」

今度は顔を赤くし、わずかにはにかんだ。可愛い。

「それで？」

「だから、早く進むことはないよ」

焦ることはないと諭す。歩くより遅くとも、それが遅々として進まなくとも、沙夜が大切なから。

何よりも大切な女の子だから。ぎゅっと沙夜が腰にしがみついてきた。

『ありがとう』とわずかにもれ出る声は照れているようだった。

「ちょっとね。心配だつたんだ」

こちらを見て、沙夜は笑つた。

「私と違つて、一さんは大人でしよう？　だからね」

我慢してもらつて、それでいつか……。

「いつか嫌われちゃうんじゃなかつて」

私子どもだから。一さんがこうしたい、とか、あなりたい、とか、そういうことを聞いたら『いやだなあ』って思っちゃうかもしれないから。

不覚にも押し黙ってしまった。もう、何でこの子は『可愛いんだろうか。今更ながら発言の殺傷能力を実感してしまつ。

あー、やることなすこと全てが可愛いなあと、惚気て仲間から彼女バカなのがばれるのも時間の問題だ。（晴夏あたりには既にばれている）

「大丈夫だよ」

もう何年も待つてゐるんだから。後数年だつてあつという間だ。これまでがそうだったように。これからもきっと、ハラハラしながら、ときにも心配しつつ、それでも目が離せないんだから。

早く大人になつてと願いつつ、まだ『お兄ちゃん大好き』と言つて欲しいと思いつつ。

「一さん」

大好きだよ。その言葉とともに頬へ落ちてきたのは柔らかい感触だった。

……不意打ちだ。

「この前の仕返し」

バレンタインデーの時のことだと分かるまで数秒。次の行動に移るまで、コンマ数秒。気が付けば沙夜を抱きしめて、キスしている自分がいた。あ、言つてることとやつてること違つくないか？ 僕。

「つ！！ 早く進まないって言つたのに！」

触れるだけの、分相応なキスだった。幼い彼女に、その彼女が好きな自分に。

大学生にもなつて、それさえ経験がないなんてありえないだろう。というような、そんなキス、だったはずなのに。

「倍返し」

「ひどいつ！」

なのに顔は熱くて、心臓は早く脈打つていて、思考はあつけなく崩壊した。

そしてまた、合わせるだけの口付けを贈る。怖がられないように、優しいだけの口付けをした。ステップアップが楽しみみな、ある春のこと。

first (後書き)

変態なんですか、ナウカナル。

0・5歩分（前書き）

あまりに短編少ないので、書きかけの遠距離もの投下。彼女と彼の交互に視点を入れ替わるので、苦手な方注意。なお、遠距離に対する見方はただの妄想です。

本当にしている人を知つてはいますが、やつぱり当事者の感覚は得れませんでした。

一話は一話が短め。そして短編で終る気もしない。短編連作です。

彼までの距離 ～0・5歩分～

わたしは大人じゃないから、上手くあなたに安心させてあげられるような言葉は持たない。

『頑張って』と心からの祝福もあげられない。だけど、それを面と向かってあなたに伝えてはいけないことくらいは分かる。

それくらいには、“オトナ”なのだ。

それならばどうか……傷つけることがないよう祈る。応援も祝福も、わたしにはできないけれど、彼の足枷にはならないよつこ。

新幹線乗り場。騒がしいホーム。わたしにはそれら全てが、どこか絵空事のように思えて、ぼんやりとする。

隣を歩く彼もそうなのだろうかと、ちらりと視線を上げた。するところちらの視線に気が付いたように、彼もこちらを向いてポン、とも言わずに頭を撫でられた。

不意に泣きそうになつて、上を向いて笑つた。それから泣き言を言わないように、口を開いて全く関係のないことを話し始める。

黙っていたら、泣き出しそうな自分がいて、全く関係のないことをしゃべらないと、酷いことを言つてしまいそうな自分がいた。

「あの歌を思い出すよね。ほら、汽車を待ちながらさ、彼女が遠くへ言つちゃう歌。汽車じゃなくて、新幹線を待つてるんだけど」

いつも、じうだった。あまり話さない彼に、拙いながらも話すわたし。

そして時々、思い出したように彼が口を開くのだ。彼の言葉は量よりも質なのだろうと思う。人の話に耳を傾け、自らで咀嚼し、言葉を紡ぐ。

いつも聞き手なのに、言いたいことは時間がかかっても言つ。そんな彼だ。元々おしゃべりでなかつたはずのわたしが、彼の隣でよく話すようになるくらいには、彼が好きになつた。

まあ、少し慣れた今は、無理をして話すこともなくなつたんだけど。

「もうすぐ、桜も咲くね」

ぱほり、と何の気なしに呟く。急に『あと10分』が現実味を帶びて、また泣き顔を隠すように笑つた。

「咲。
……」「めん」

何で謝るのか、分かつてゐる。何も言わず、県外の大学へ行くからだ。しかもそこへ行くと告げられたのは、ほんの一週間前。

怒りも悔しさもなかつたと言えば嘘になる。

だけど、進路は他人が口を出すものじゃないこともよく分かつていた。だから、怒りも悔しさも全て流れ、残つたのはただ何とも言えない感情だけだつた。

一言言つてほしかつた、といつのが正直なところだつた。たとえ、県外の大学へ行くのを決めた後だつたとしても、もう少し早ければよかつた。

早ければ、心の整理がついたはずだ。少なくとも、今よりは。

「いいよ、別に。謝るようなことでもないから

少しだけ厳しい口調は、自分が思つてゐるよりずっとそのことを気にしているのだと気付かせる。他に何を言つても同じように、彼を責めるような二コアンスになりそうで口を閉じた。

「湊くんが、考えもなしにそういうことしないって、分かつてゐる」

それでも口をついて出でくるのは、彼へのフォローと見せかけた自らへの戒め。彼を庇つてゐるのは、彼へのフォローと見せかけた言い聞かせるためだけの言葉。

そうしないと、彼にとつて自分はそこまでの存在だったのだから、かと、考えなくてもよいことを考えてしまったから。

所詮、学生同士の恋など、そんなものだと思つてしまいやうになるから。

「ほら、湊くんのことだから、どうでもいいかな、とか考えてたんでしょう？　わたしに分かりやすいように、納得するようになつて。わたしが、傷ついたやわなによつて、考えててくれたんだから、怒る必要なんてない」

早口でまくし立てるわたしは、彼にどう映つているんだろう。顔は歪んでいないはずなのに、笑顔で話しているはずなのに、彼の少しだけ寄せられた眉を見ると、そうじやないことが分かつた。離れてほしくない、そんなこと無理だと分かつて、口に出しかねうになる。

行つてほしくない、今更だと知りつつ、泣き出しちたつなる。繋りそうになる手をぐつと握り締めて、それだけは我慢する。

「咲、ごめん」

「だから、謝ることでもない」

「無理して笑わせて、ごめん」

謝る顔はこちらも泣き出しそうで、そこでやつと明日から彼がないんだと漠然とだが実感した。掴めなによつた空しさと寂しさではなく、はつきりと彼の存在を失う気がした。

朝早くに一人で教室で笑いあうことも、彼の部活が終わるのをじつと待つていた放課後も、もうないのだと知つてはいた。だけど、感じていなかつた。

だけどもう、本当に。

制服の裾を引っ張ることも、朝練を覗くことも、校舎の周りを仲間と一緒に走つている彼を見かけることも。手を振られて、恥ずかしくても振り返そつと思つことも。

「……あの学校を、受けた前から『言おつ』って思つてた。だけど、もう、一度と。

「……あの学校を、受けた前から『言おつ』って思つてた。だけど、

願書を出して、合格通知が来ても言えなかつた。迷つてゐる自分が
いて、どう言つていいか分からなかつた」

ギリギリまで、あそこへ行くかどうか迷つてたんだ、と彼は苦く笑つて、それからまた慰めでもするようにわたしの頭に手を置いた。
優しく、撫でるように労わるよう。『

「咲と距離が開くのが嫌で、でもそれで進路を変えようとする自分
はもつと嫌で……。そんな状態で咲に相談するようなことは、絶対
にしたくなかった』

彼までの距離が遠くなる。たつた数歩だった『あの頃』でさえ遠
いと思っていた彼が、今度は手の届かないところへ行つてしまつ。

今、こんなに近いのに。

「咲に、『行けばいいよ』って言われたら、傷つきそうな自分がい
た』

手を伸ばして、彼の服の裾を掴んだ。

引き止めたくて、それでも声は出なくて。彼がわたしの背に手を
回し引き寄せた瞬間、ついに我慢していた涙が零れて、彼の肩口を
濡らした。

0・5歩の距離がひどく遠くに感じてしまつわたしは、彼がいな
くなる事実を寂しがつてゐるんだろうか。

0・5歩分（後書き）

どこまで続くか分からないので、連載にもできないもの。遠距離
は聞いてるだけで辛い。

短編連作ですが、どこまで書いつかないと迷い中。

ドア一枚分（前書き）

現代モノがそんなに得意ではないことにやつと眞付いたこの頃。
いまだその子つてどんな風に恋愛してるんですかね。

ドア一枚分

彼女までの距離 ドア一枚分

抱きしめた彼女の体は僅かに震えていて、懸命に抑える声も痛々しかつた。

彼女をこれほど傷つけることが、自分への罰なのだとしたら、自分にとって一番辛いことを神様は知っているのだろうと思つ。自分の中途半端な決意が、想いが、彼女に涙を流させている。泣かせている。

「ごめん、咲。本当に、ごめん」
泣いている彼女の名を呼べば、『みな、とくんのせいじや、ない、よ?』と途切れ途切れに言葉が返ってきた。

謝るという行為は、許しを強要することなのだと、初めて知つた。彼女に許されたくて、自分を許してほしくて、謝罪の言葉を口にしているのかもしれない。

優しい彼女なら、許してくれるだろ? 心の中はどうであれ、許してしまうんだろう。

それでも、少なからず俺を許せない部分が残つて、許せない咲を自分自身で責めるのかも知れないと思つと、抱きしめる腕に力が入つた。

許さなくともいいと言えない自分は、ビームでも自分の勝手で彼女を縛り付ける。

「湊くん、ごめん、ね」

応援してあげられなくて? 素直に見送ることができなくて? 何について謝っているのか、よく分からなかつた。彼女が謝ることなど、何一つないところの?。

早く『行く』ことを伝えればよかつたのに、迷っていた自分は怖くて彼女に言えなかつた。自分一人では何も決められない自身がもどかしくて、何度も苛付いたことだらう。

引き止めて、ほしかつたのかもしけない。

いや、『かもしれない』といつあやふやな表現ではなく、自分は引き止めてほしかつた。

彼女に相談して、『行かないで』と止めてほしかつた。絶対、彼女はそんなことしないと分かつてゐるのに。

自分も彼女も、そういうことを求めて付き合つてゐるわけではないと、知つてゐるのに。

引き止められたら、自分は行くのを止めたとでも言つのか？

本当に、彼女が行かないで、と言えば自分は。自分は一体、どうしていたんだろう。彼女が縋りついて、引き止めたら。

「……逆に、覚悟決めたかも」

なんて勝手なんだろう。

引き止めてほしいくせに、いざ引き止められると、その腕を振り解くなんて。抱きしめたまま、そんなことを考えているとき、新幹線の到着を知らせる、甲高いベルが鳴つた。

そして続いてアナウンスが流れる。

どこへ行くか、なんて言わないで。彼女に聞かせないで。

今更ながら、自分たちの距離を思い出すから。これからどんなに離れるか、なんて知りたくもない。

耳障りなその音に抵抗なんてできはないのに、彼女の耳を塞ぐように手を当てた。せめて、彼女に届かなければいい。

「いつてらつしゃい」

顔を上げた彼女は、赤い目まま優しく笑つた。

もうその日から涙は零れることなく、ただこちらの門出を祝つているように見える。そんな彼女に、もう謝罪の言葉も何も言えなくて、背に回していた手をそつと離した。

離したくない。

放したくない。

逃げ込むように新幹線へ乗り、そのまま振り返ることができなくなつた。振り向いたら、そのまま戻つてしまいそうだつた。

行きたくない、と彼女を目の前にして言つてしまいそうだつた。自分も彼女も、『付き合つ』なんて初めてだから、こういう場合どうすればいいのか分からぬ。どうするのがいいか、なんて誰も言わなかつた。

何が一般的で、どうすれば最善なんだろう。

距離が広がれば、それはそのまま『別れ』に繋がるんだろうか。物理的な距離は、そのまま精神的な距離を表すんだろうか。

『遠さ』は別れを誘うのだろうか。

不安になつて、今度は無性に彼女の顔を見たくなる。まるで彼女の顔さえ見れば、その不安も解消できるとでも言つよつて。彼女の顔さえ見れば、全て上手くいくとも言つよつて。

「湊くんと、遠距離恋愛だね」

苦笑いのような、泣き笑いのような、何とも言えない表情が振り向いた瞬間目に入った。そのときドアが閉まって、声も何も届かなくなる。

自分は大切なことを何一つ、伝えてはいないのに。大切なことは全て、いつも言わずにいるだけの自分が小さく思えた。

『す、き、だ』

そう口を動かして、彼女に伝えようとする。彼女に伝わっているのかさえ定かではなく、ただその行為を続けた。

初めて彼女に伝えて以来、数度しか口にしていなかつた、だけど確実に心にあつた想いが、後から後から溢れてきて、そのまま口を動かし続ける。

こういうとき、別れる？ と聞くべきなんだろうか。

それとも、付き合い続けよう、と言つべきなんだろうか。

そのどちらとも言えず、彼女の意見も聞かなかつた自分は、やっぱり腰抜けなのかもしれないけど。それでも今更、聞く気になれず、

ドア越しに彼女を見つめる。

ドア一枚分の、彼女との距離。

数字にしても、たかが知れている距離。だけどその距離は、彼女の声が届かない距離だ。

今から、それよりずっと遠くへ離れるといつに、ドア一枚分でさえ我慢できない自分がいた。

唉、今だけ許して。

……今だけ、君から離れる決断をしたことを、後悔せじ。今だけ、だから。

いつか間違つてなかつたと、そう思える日が来ると信じているから。だから、ほんの数秒だけ、『離れるべきじやなかつた』と思わせて。

離れたくない、行きたくない、と。

今ままの関係は、ちゃんと続くんだらうか。物理的な距離に、心は負けてしまわないだろうか。

自分たちなら、大丈夫。

そんなことを言えるほど強くないからせめて、彼女は大切な人だ

と言い聞かせる。

泣いてしまいそうな自分を叱咤して、身勝手にも彼女が少しでも幸せであるようにと祈る。どうか泣かないで、笑つて見送つて。そんなこと言えないけど。

……祈るしか、できなかつた。

時速200km以上分（前書き）

題名が少し日本語おかしいですけど、ニコアンスで受け取っていただけたらと思います。それだけの速さで距離は開いていつてるんだよー、という感じで。

時速200km以上分

彼までの距離 ～時速200km以上分～

進みだした新幹線は、瞬く間に速くなつて、わたしと彼の距離を広くしていった。

平日のお昼で、しかも都会でもないここにいるのは数えることのできる程度の人数で、その人たちが一斉にエスカレーターの方向へ向かつて進みだす。

それを避けて、わざと人の少ない階段へと向かつた。呆氣ないその動きに寂しさは浮かばず、ただ何とも言えない喪失感に呆然とした。

一步、一步と階段を下りる動作はひどく緩慢としているだろう。別れというのは、案外悲しみを伴わないかも知れないと思いつつ、目の端に溜まつた涙を拭つた。

「情けないっ

軽く両手で頬を叩く。鈍い痛みに少しだけ勇気付けられて、波と言うには人数の少ない人ごみに紛れ込んだ。

彼は時速200kmで、わたしはそれよりずっと遅く、でも確実な速さで、お互いの距離を広くしていた。駅の中よりもうに人がまばらな外へと出る。

「あつたかい

よく晴れた、太陽の暖かさがよく分かる日だつた。一ひと数日、まだ肌寒さを残していたのに、それが嘘のように温かく、春の陽気が回りに満ちている。

明るいその雰囲気を、少しだけ疎ましく思つてしまつるのは仕方ないことだと、心の中で言い訳した。

しばらく人ごみと陽気を避けるように足早に歩く。早く帰つてしまひたかった。見送つたばかりなのに、もう携帯を意識している。

そう言えば、彼と出会つたのはまだ少し寒かつたときだなと思う。出す。

日にしてみれば、出会つたときのほうが春というに相応しいときではあつたが。

一年生のクラス替えした翌日、つまり始業式の次の日、わたししかいなかつた教室に、大きなカバンを持った彼が現れたのだった。その頃は名字しか知らなかつたし、部活も知らなかつた。

彼の顔も、まじまじと見たのはそのときが初めてで、その長身のせいで少し怖かつたのだ、そういえば。何も知らず、ただ『部活ですごい人』という情報しか得てなかつた。

もつと知つていれば、遠回りも少なかつたのかもしれないと思う。

何をするでもなく朝早く来て、春休み明けのテストの範囲であるテキストをぼんやりと見ていた。

一人が好きというわけでも、人ごみが嫌いというわけでもないけれど、わたしはただこの静かな空間を好いていた。

学校という場所は常に人で溢れていて、少し忙しなく感じて苦手なのだ。

人がいれば気を遣つてしまふのは必至だし、目まぐるしい変わる話のネタや、流行にはついていけない。そういう意味では、わたしは少し浮いていたのかもしれない。

静かな学校は少々不気味に見えるものの、好きな瞬間の一つだった。

そのとき、遠くのほうで足音がした。一人分、一つ一つの間隔が広いから多分男の人……先生かもしれない。

無意識にそんなことを考えて、背筋が自然に伸びる。ちらりと時計に目を走らせるも、まだそんな時間ではなかつた。

登校するにしても、少々早すぎる。

「あ……」

扉を開いたのは、今年初めて同じクラスになつた男の子だつた。すらりとした長身と、少しだけ無造作な髪の毛。短めのその髪は弄つてゐる様子は一切なく、最低限切つていて、という感じだつた。一瞬鋭いと思つた瞳は、次の瞬間にはすでに生氣を含んでいない。鋭い、といつても深い色の瞳と目が合い、思わず目を逸らした。じつと見ることにも、見られることにも慣れていない。

今にして思えば、彼も面を食らつただけなんだろう。だからちょっと驚いて、目が細くなつただけ。緊張すると、険しい顔をする彼だから、当時も緊張していたのもしれない。

「おは、よう。えつと、田野くん」

珍しいクラスメイト情報を総動員して、思い出した彼の名を口に載せる。

わたしの左斜め前の席の彼は、学年のみならず学校単位で有名だつた。何でも、部活でとても活躍しているらしい。

……バスケか、バレーか。たぶんその辺。室内系でボールを使つた気がする。そんなことを昨日クラスの女の子達が嬉しそうに話してたつて、その姿がすごくかっこいいらしい。

「おはよう、…………」「めん、名前」

知らないんだ、と呴くように添えられる声。田野くんは眉を寄せ、宙に視線を彷徨わせる。

そして諦めたように息を吐くと、すまなきやうに聞いてきた。気分を害すことはもちろんない。彼と違つて、部活もしていないわたしの名前など、覚えているわけもない。

そもそも同じクラスになつたのは、今年が初めてだ。むしろ知つていたら、どうして知つてゐるのかと訝しんだだろ？

「高木、です。よろしく」

彼は小さく『高木さん』と呴いた。覚えようとほしてくわっているらしく。

「高木さん、早いんだな。何かの朝練？」

「ううん。何て言うか、早めに来るのが好きなの。日野くんは？」

「俺は朝練。眠くて毎日大変だから、早めに来るのが好きとか、ちょっと羨ましい」

「大変だね、部活してると」

言葉の少ない彼の第一印象は、少し怖い人、だった。

ふと、新幹線が出発する寸前の彼を思い返す。無愛想な顔に笑顔が浮かぶのも珍しいが、泣き出しそうな顔はもっと珍しかった。何か言っているような口の動きは分かるのに、彼の声は聞こえてこなかつた。

だから、自分勝手に想像しても許されるだろう。

もしも、自分勝手が許されるなら、思ってもいいだろうか。彼の口から、滅多に出ない『想い』が、溢れていたと。

いつも大事にされているから、『大切』なんだとは思っていたし、伝わっていた。

だけど、口に出すことが少ないので時々不安になることも事実だつた。口に出されると、何だかくすぐったいけどすごく嬉しい。

「わたしも、言いたかったな」

いつ言えば、彼は喜んでくれるだろう。

時速200km以上分（後書き）

遠距離恋愛が主とこりよりは、距離が広くなつてお互に過去に
思いを馳せる時間が長くなり、改めて相手が大切だと自覚する小説
……みたいなのをコンセプトに。
してはすだつたんですね、もともと。現代モノ苦手なくせに、こ
うこりのが書きたくなるんです。

県一つ分（前書き）

書を足せない日々が続きます。

県一つ分

彼女までの距離 ～県一つ分～

新幹線のアナウンスで、早々に隣の県へ入ったことを知る。窓際へ寄りかかるようにして外を見れば、眩しいくらいの太陽が目を焼いた。携帯を開いて、それから閉じて、じっと見つめて、それからまた開いて……。

そんな無意味な行動を繰り返す。

今自分はさぞや情けない顔を晒しているんだろう。そう思って瞼を閉じた。ちらちらと、彼女の赤い目が瞼の裏に現れては消えてゆく。

自分を責めるような目では、決してなかつたはずのこと。彼女を思い出して、また泣き出しそうになる。じんわりと熱くなつた目を隠すように俯いて、肺の中に溜まつたよどんだ空気を吐き出した。

吐き出しても、心の中に溜まるものは出てはくれなかつたけれど。ぐんぐん卑くなる新幹線に身を任せつつ、彼女と自分の距離の長さを考える。

未だ止まらない新幹線のせいで、さらにその距離は開いているんだけど。そして、あと2時間はその距離が開くのを、じつと耐えることしかできないんだけど。

流れるような景色も、痛くなる耳の奥も、全てのことが彼女の気配を消していくように思えて下を向いた。

一昨年の春頃、つまりは恋などに全く興味のなかつた直らに口ひきでやりたい。

一年年後の自分は、部活か彼女か、で半年以上悩んだぞ、と。

比べたつもりは全くないが、彼女にしてみればそう見えても当然だろう。そして自分より部活……バスケを取ったと思われても仕方のないこととした。

「ああ、クソッ」

口下手な自分に嫌気が差し、髪をかきあげた。何かもつと、言つべきことはあつたはずなのに。伝えることも、あつたはずなのに。

「あの頃は、考えもしてなかつたな」

自分がここまで悩むなんて。ましてや、彼女を作るなんて。

……同級生の女の子に、恋をするなんて。

『高木 咲』の第一印象は“不思議な子”だつた。
特別変人、というわけでも、言動がおかしいというわけでもなかつた、はずだ。

人に興味のない自分なので、正しいかどうかは分からぬけれど。ただその身に纏う雰囲気はとても静かな気がしたのだ。
かと言つて、クラスで一人静かに座つているだけでもなかつた。他者なんて気にしないはずの自分だったのに、特に『女子』といふ生き物が苦手な自分だったのに、何故だか彼女は気になつた。初めて話した朝以来、一人つきりの朝の時間は、小さな楽しみになつていつた。

あれだけ朝を嫌つっていた自分が、無遅刻になるくらい。

朝練も、毎日続いた。

「おはよう、高木さん」

「おはよう。日野くんは早いね。朝練、好きなんだ」

テストのある日はテキストを、それ以外の日は文庫本を眺めている彼女はもうお決まりだ。

一回くらい彼女よりも早く来たいのに、ついぞ二年間それが成功することはなかつた。彼女が欠席した日以外、いつも彼女は自分よリ早く来ていた。

それが悔しかつたが、それと同時に一種の安心感も持つていた。毎日、彼女が迎えてくれたから。それが心地よく、嬉しかつた。彼女より早く来たい、と思つてしまつて、実際そつなるのを少しだけ恐れていた。

「……朝練つていつか、練習は好きだよ。まあ、それだけじゃないけど

君に、会いたいだけだけど。

今思えば、この頃からそれは恋と呼んで差し支えのないものだつた。

「最近ね、日野君の足音、分かるようになつたんだ」

朝話すよつになつて、少しずつ彼女のことを知つた。

たとえば人ごみが苦手なこと、人の少ない学校は安心すること、騒がしいより静かな方が好きだけど、静か過ぎると寂しくなつてしまうこと。

友人と話すのも、一人でじつと考えるのも、両方好きなこと。

……思つたとおり、少しだけ不思議な子だつた。不思議だけど、一緒にいて心地よく、安心する子だつた。

「どんな感じの足音？」

「口では上手く言えないんだけどね。うーん、軽い足音？なんかこう、はつきりとは言い切れないんだけどね、日野くんだつ！ つてはつきり分かる足音だよ。他の誰かの足音とは違うつて

いつから、という明確な区切りはないのに、『特別』になつていくことは分かる。

一つ一つの動作が、言葉が、彼女らしいと思つ度に、彼女のことが分かつていく気がして嬉しくなつた。

彼女は、自分がいつも素通りして気付かない『楽しいモノ』を見つけることが上手かつた。今の足音だつて、言われるまでは氣にも留めていなかつた。

彼女に言われて、初めて気が付いた。

「高木さんの足音も、聞き分けられたらしいな」

「わたしの？　いいよ、何か恥ずかしいし。絶対、日野君のと比べたら笑っちゃうくらい変だと思う。わたしの足音、きっと重そうな音だよ！　だから、しつかり聞こうとしないでね」

彼女の足音が聞き分けられるようになつたら、きっと楽しくなるだろう。

後ろから、その音が聞こえるだけで、きっと笑ってしまうんだろう。そう思つて小さく笑うと、彼女は少しだけ眉を寄せて、『絶対聞かないでね』と念を押した。

彼女に泣き顔を見られなくてよかつたと思う。あんな情けないと、できれば見せたくない。

一回見せれば、十分だ。自分の泣き顔なんて。今更になつて溢れそうになる感情を押し殺して、目を瞑る。

窓の外の眩しい光が瞼を越えて、目を焼く感覚に眉を寄せた。腕で目元を覆い、涙を隠した。

泣き出したいのは自分ではなく、きっと彼女の方だらう。でも、彼女はもつひとつ、泣いていないんだ。

「咲」

彼女を引き止める力も何もなく、ただ縋りつくことしか出来ない自分なのに、彼女は手放せないという事実は知つていた。

付き合い始めて、そんなに時間は経っていないはずなのに、それだけは嫌と言つほど分かつっていた。

県一つ分（後書き）

学校 자체は県一つ分じゃ済まされないくらい離れている設定です。感覚で言えば、フォッサマグナ越えちゃうくらいな？ 因みに私は西日本住まいなので、自然と遠くを考えると東日本になります。フォッサマグナを越えたのは、人生で一回だけです、今のところ。西日本中心の旅行くらいしかしたことないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5328/>

larme ~短編集~

2011年10月9日03時21分発行